

『バーブル・ナーマ』の研究（Ⅰ）

「フェルガーナ章」日本語訳

間 野 英 二

凡 例

1. 本稿は、15世紀の中央アジアにティムール朝の王子として生まれ、後、インドのムガル朝の創設者となったザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル *Ẓahīr al-Dīn Muḥammad Bābur* (1483–1530) がチャガタイ・トルコ語で著した回想録『バーブル・ナーマ』 *Bābur-nāma* (別称『バーブルの出来事』 *Waqī‘at-i Baburī*) の第1部「フェルガーナ章」の全訳である。
2. 『バーブル・ナーマ』は第1部「フェルガーナ章」、第2部「カーブル章」、第3部「ヒンドゥースターン章」の3部より成るが、ここに訳出する第1部は、ヒジュラ暦899年から908年までの10年間の出来事を扱い、分量的には現存するテキスト全体のおよそ半分に相当する。
3. テキストは、現在知られている諸写本の中で最も価値の高いハイダラーバード写本の写真版 (Annette S. Beveridge, *The Bábar-nāma, being the Autobiography of the Emperor Bábar, the Founder of the Moghul Dynasty in India, written in Chaghatáy Turkish; Now reproduced in Facsimile from a Manuscript belonging to the Late Sir Sálár Jang of Haydarábád, and edited with a Preface and Indexes*, “E. J. Gibb Memorial” Series, Vol. I, London, 1905, repr. 1971) を底本として用い、時にイルミンスキーが出版した、不完全ながらも無価値とはいいい切れぬ活字本 (N. Ilminski, *Baber-nameh Diagataice, Ad Fidem Codicis Petropolitani*, Cazani, 1857) をも参照した。
4. ハイダラーバード本の葉数は訳文中に 22a, 35b (a は表, b は裏) の如くに示した。またイルミンスキーのカザン本によって特に訳文を補ったり、固

有名詞の異同を示した場合には、その部分を〈 〉内に収めて区別し、またカザン本の該当ページ数を付記した。

5. 訳文中の()はテキストそのものに基づく注記であるのに対し、[]はテキストには見えぬ訳者による補足・説明である。

6. 訳文中のヒジュラ暦の西暦への換算は陳垣『中西回史日曆』(台北, 民国61年)に基づいた。

7. 固有名詞は原則として初出の場合にのみ原綴のローマ字転写を並記した。

8. テキストのアラビア文字の転写法は以下の如くである。

' (語頭省略), b, t, th, j, ch, ḥ, kh, d, dh, r, z, s, sh, ṣ, ḍ, ṭ, ḏ, ḡ, gh, f, q, k, l, m, n, ng, h, w, y.

長母音 ā, ī, ū. 二重母音 aw, ay. 短母音 a, ä, e, i, o, ö, u, ü.

9. 訳出に当っては、ハイダラーバード本に基づく以下の諸国語への訳本をも適宜参照した。しかし、いずれも一長一短があり、完璧な訳本はなお存在していない。

①英訳 Annette S. Beveridge, *The Babur-nāma in English (Memoirs of Babur)*, London, 1922, repr. 1969.

②現代トルコ語訳 R. R. Arat, *Vekayi: Babur'un Hâtıratı*, 2 Cilt, Ankara, 1943.

③ロシア語訳 М. Салъе, *Бабур-наме: Записки Бабура*, Ташкент, 1958.

④現代ウズベク語訳 П. Шамсиев, С. Мирзаев, *Бобирнома*, Тошкент, 1960.

⑤仏訳 J.-L. Bacqué-Grammont, *Le livre de Babur*, Paris, 1980.

他にウルドゥー語及びペルシア語への訳本があるが今回は利用できなかった。

10. 訳文の末尾に系図と地図を付した。

11. 『バーブル・ナーマ』の解題, 第1部への註釈, また第2部・第3部の訳註, 索引等は別の機会を得て発表したいと考えている。

12. 筆者に『バーブル・ナーマ』の読み方を最初に手解きして下さったのはハーヴァード大学の Omeljan Pritsak 教授である。ここに記して謝意を表す。

1b (1b) 慈悲深く慈愛遍きアッラーの御名において

〔ヒジュラ暦899年/西暦1493年10月12日—1494年10月1日/の出来事〕

899年ラマザン月〔1494年6/7月〕、私はフェルガーナ地方 (Ferghāna wilāyatı) で、12歳で支配者 (pādishāh) となった。

〔フェルガーナ地方について〕

フェルガーナ地方は〔地球上で人間が居住できる7つの気候帯 (iqlīm) の内の〕第5気候帯に属する。居住地域 (ma‘mūra) のはずれにある。東はカーシュガル Kāshghar, 西はサマルカンド Samarqand, 南はバダフシャーン Badakhshān の辺境の山岳地帯である。北には、以前には、アルマリグ Almaligh, アルマトゥ Almatu, そして諸文献にオトラール Otrār と記されているヤング Yangı のような都市があったが、今ではモグール Moghūl とウズベク Özbeg によって破壊され、居住地域はまったく残されていない。

フェルガーナ地方は小さな地方である。穀物と果物が豊富である。周囲を山々に囲まれているが、ただサマルカンド及びホジャンド Khojand 方面にあたる西方には山が無い。冬期には、まさにこの方面以外では、どの方面からも敵が侵入する事は不可能である。

2a (2a) ホジャンド川の名で知られているサイフーン川 Sayhūn daryāsı が東北の方面から流れて来て、この地方の内部をよぎり、西方へと流れて行く。ホジャンドの北、ファナーカト Fanākat —— 現在はシャールヒーヤ Shāhrukhiya の名で知られている —— の南を過ぎてまた北へ向きをかえ、トゥルキスタン Turkistān 方面へ行く。この川は、トゥルキスタンよりもはるか下流で全て砂漠にのみ込まれ (singār), いかなる川にも合流しない。

7つの都市 (qaṣaba) がある。その内の5つはサイフーン川の南にあり、2つは北にある。

南側にある都市の1つがアンディジャーン Andijān で、〔地方の〕中央に位

置し、フェルガーナ地方の首都である。穀物が豊かで果物も多い。メロン、葡萄がすばらしい。メロンの季節にメロン畑の所でメロンを売るという習慣は無い。アンディジャーンの梨よりも良い梨は無い。マー・ワラー・アンナフル Mā warā' al-Nahr [「(アム) 川の彼方の地」] でサマルカンドとケシュ Kesh の城 (qurghan) を別にすれば、アンディジャーン城より大きな城は存在しない。3つの門を持ち、内城 (ark) は南側にある。9本の水路を通して水が流れこんでいる。しかし不思議な事に水はどの1箇所からも城外に出ていない。城壁の周囲の濠の外側はじゃり石の公道である。城壁の周囲は、全て居住区 (maḥallāt) である。つまりこの居住区と城壁の間にあるのが、まさにこの濠の所にある公道である。

- 2b 鳥獣もとれる。きじは (2b) すこぶる肥えている。1羽のきじを、つけ合せの米と一緒に、4人の男をもってしても食べつくせなかったという話もあった。

住民はトルコ人 (Türk) である。町やバーザールでトルコ語 (Türkī) を知らぬ者はいない。住民の言葉は筆になじむ。なぜなら、[チャガタイ・トルコ文学の確立者] ミール・アリー・シール・ナヴァーイー Mir 'Alī Shīr Nawā'i の諸作品は、彼がヘラート (Hari) で成長したにもかかわらず、この地方の言葉で書かれているからである。住民の間には美しい者が多い。音楽で有名なホージャ・ユースフ Khwāja Yūsuf はアンディジャーンの出身である。風気は健康に害があり、秋には人々が熱病にかかる事が多い。

次の1つが**オシュ** Osh である。アンディジャーンの東南にある。東よりである。アンディジャーンから4ユガチ yīghach [ユガチは距離の単位で、一般的には約 6km と云われるが、バーブルの用法では 7~12km と必ずしも一定でない。この場合の実際の距離は約 45km] の道のりである。風気はよい。流水が豊富で、春はすこぶるすばらしい。オシュの美点については多くの言い伝えがある。城の東南に1つの姿のよい山がある。バラー・クーフ Barā-kūh と呼ばれている。この山の頂上に[モグールの] スルターン・マフムード・ハーン Sulṭān Maḥmūd Khān が1つの東屋を建てた。その東屋より下方、この山の肩の所に、**902年** [1496/97年]、私は1つのバルコニー付きの東屋を設置した。かの東屋はこの東屋より上方にあるが、位置的にはこちらの方がはるかによい。全ての市街が足下にひろがっている。

- 3a (3a) アンディジャーン川はオシュの町中^{まちなか}を過ぎてアンディジャーンの方へ

流れる。この川の両岸には果樹園がある。全ての果樹園は川を見おろす位置にある。すみれがすこぶる美しい。いくつもの流水がある。春はとてもすばらしい。沢山のチューリップや薔薇が花開く。バラ・クフの山麓、町と山の間に、1つのイスラム寺院があり、ジャウザー寺院 *masjid-i Jawzā* と呼ばれている。山の方から1本の大きな公共水路が流れて来ている。この寺院の外庭は、やや傾斜した、三つ葉のクローバーのおい繁った、蔭の多い心地よい広場になっている。通りかかれば、どの旅人たちも通行人たちもそこで休息をとった。誰であれそこで眠りこむと、かの公共水路の水をかけるのがオシュのたわむれになっていた。〔バーブルの父の〕ウマル・シャイフ・ミールザー *‘Umar Shaykh Mirzā* の晩年に赤と白のまだらの石がこの山で見つかった。人々はその石で小刀の柄やバンドの止め金やその他の品々をこしらえた。非常によい石である。フェルガーナ地方では、風気のよさで、オシュに匹敵する程の都市は無い。

次は**マルギーナーン** *Marghinān* である。アンディジャーンの西にある。アンディジャーンから7ユガチ〔実際は約60 km〕の道のりで、よい町である。すばらしいものが多く、ざくろ (*anār*) とあんず (*ürük*) が非常にすぐれている。1種のざくろがあって「大種」と呼ばれている。甘さでは、黄あんず (*zardālū*) の甘酸っぱさに比べると甘味に欠ける。セムナーン *Semnān* のざくろ (3b) よりはましといえはましである。また1種のあんず (*ürük*) がとれる。その種子を取り出して、空いた所に仁〔種子から種皮を取った中身〕をつめて保存する。「神種」(*subhānī*) と呼ばれ、大変おいしい。鳥獣もよい。近郊で白鹿 (*aq keyik*) がとれる。住民はサルト人 (*Sart*) である。喧嘩好きで、悪意に満ち、激し易い連中である。殴り合いはマー・ワラー・アンナフルでは日常茶飯事である。サマルカンドやブハーラー *Bukhārā* で悪名高い殴手 (*jangara*) たちは、ほとんどがマルギーナーン人である。〔有名な法学書である〕『ヒダーヤ』 *Hidaya* の著者〔*Shaykh Burhān al-Dīn ‘Alī Qīlich*〕はマルギーナーンのルシュダーン *Rushdān* という村の出身である。

次は**イスファラ** *Isfara* で、山麓にある。流水や心地よい小果樹園がある。マルギーナーンの西南にあり、マルギーナーン、イスファラ間は9ユガチ〔実際は約95 km〕の道のりである。果物 (*müsmir*) の木が多いが、小果樹園にある木のほとんどはアーモンド (*bādām*) の木である。住民は、全てサルト人で

ペルシア語を話す。イスファラから 1 シャルイー (shar'ī) [シャルイーはユガチと同じ。一般的には約 6 km とされている] 南方の丘の間に 1 箇の石があって、鏡石 (sang-i āyna) と呼ばれている。長さはおよそ 10 カル (qarī) [カルは「腕の長さ」]、高さはある所では人間の背丈ほどもあり、低さはある所では人間の腰ほどであろう。鏡のようにあらゆる物を映す。

イスファラ地方 (Isfara wilāyatī) は山の麓の 4 つの地区 (bulūk) から成っている。すなわちイスファラ、ヴァールーフ Wārūkh, スーフ Sūkh, フシュヤール Hushyār である。[ウズベクの] ムハンマド・シャイバーニー・ハーン Muḥammad Shaybānī Khān が [モグールの] スルターン・マフムード・ハーンとアラチャ・ハーン Alacha Khān [11b 参照] を破りタシュケンド
4a Tashkend とシャルヒーヤを取った際、私は山麓にあるこのスーフ (4a) とフシュヤールの地方に来て約 1 年間艱難辛苦をなめた後、カーブル Kābul へむけ出立したのであった。

次は**ホジャンド** Khojand [現在のレーニナーバード Leninabad] である。アンディジャンからは西方 25 ユガチ [実際は約 230 km] の道のりである。ホジャンドからサマルカンドまでも 25 ユガチ [実際は約 230 km] の道程である。古くからある町 (shahr) の 1 つである。シャイフ・マスラハト Shaykh Maṣlaḥat と [詩人の] ホージャ・カマール Khwāja Kamāl はホジャンドの出身である。果物が非常によい。ざくろは、サマルカンドりんど、ホジャンドざくろと云われているように、その優秀さがよく知られている。しかし現在ではマルギーナーンざくろの方がはるかに多い。城 (qurghan) は高い所にある。サイフーン川が北側を流れ、城と川の間は 1 アトゥム (atīm) [アトゥムは矢の飛ぶ距離] の距離であろう。城と川との北側に 1 つの山がある。ムヌーギル Munūghīl [又は Mutūghīl] と呼ばれる。この山にはトルコ石とかその他の宝石の鉱脈があると云われている。この山には蛇が多い。ホジャンドの狩場や獵場はすこぶるよい。白鹿、雄鹿、雌鹿、きじ、野兎が沢山見つかる。風気はきわめて毒されており、秋には熱病が多い。雀すらもが熱病にかかったとも云われていた。風気の悪さは、北側にある山のせいだとも云われている。

ホジャンドの属地の 1 つがカンディ・バーダーム Kand-i Bādām [「アーモンドの町」] である。都市ではないが、かなりの町である。アーモンドがよい。
4b このため (4b) 町はこの名で知られている。ホルムズ Hormuz やヒンドゥー

スターン Hindūstān へ全てこのアーモンドが運ばれている。町はホジャンドから 5～6 ユガチ〔実際は約 70 km〕東方にある。

ホジャンドとカンディ・バーダームの間に 1 つの平原があり、ハー・ダルヴィシュ Hā Darwish と呼ばれている。いつもこの平原には風が吹いている。東方のマルギーナーンへはいつもここから風が吹いて行く。西方のホジャンドへは、いつもここから風が吹いて来る。疾風がある。数名のダルヴィシュがこの平原で疾風に出くわし、お互いの姿を見失い、「おおい、ダルヴィシュよお！おおい、ダルヴィシュよお！」(Hāy darwish hā darwish) と叫んだが、全員死亡したと云う。それ以来、この平原を人々はハー・ダルヴィシュと呼んでいる。

サイフーン川の北側にある都市の 1 つが**アフスィ** Akhsī である。種々の書物にはアフスィーカト Akhsīkat と書かれている。例えば詩人のアスィールッ・ディーン Athīr al-Dīn のことをアスィールッ・ディーン・アフスィーカティーと云うが如くである。フェルガーナでは、アンディジャーンを除き、これ以上の都市は存在しない。アンディジャーンの西方 9 ユガチの道のりである。ウマル・シャイフ・ミールザーはここを首都にしていた。サイフーン川が城の下を流れている。城は高い絶壁の上にある。濠のかわりに深い谷がある。ウマル・シャイフ・ミールザーはここを首都としたが、1～2 度、より外側からさらに
5a 別の谷を切り開いた。フェルガーナではこれ程に堅固な城は他に無い。(5a) 居住区は城から 1 シャルイー離れた所にある。「村はどこだ？ 木々はどこだ？」という諺はおそらくアフスィのために作られた諺である。メロンがすばらしい。1 種のメロンがあり、ミール・ティムーリー Mīr Tīmūrī と呼ばれている。世界中でもあれ程のメロンは他には知られていない。ブハーラー・メロンが有名であるが、私がサマルカンドを取った際に、私はブハーラーからメロンを運ばせ、ある集会の折に切らせた。しかしアフスィ・メロンの比ではなかった。鳥獣も非常によい。サイフーン川のアフスィ側は平原である。白鹿が沢山いる。アンディジャーン側は森である。雌雄の鹿、きじ、野兎が沢山いる。大変肥えている。

次は**カーサーン** Kāsān である。アフスィの北にある。やや小さな都市である。アンディジャーン川がオシュから流れて来るように、アフスィ川はカーサーンを経て流れて来る。風気のよい土地である。感じのよい小果樹園が、全て流れの岸辺に連なっているため、人々は「前に小羊の毛のかざりをつけた毛皮

のコート」(pōstīn-i pesh barrā) と「カーサーンの事を」呼んでいる。心地よさとか風気の点で、オシュの人々とカーサーンの人々の間には「自分の町の方がすぐれているとする」競走心がある。

フェルガーナ地方の周囲の山々には良い夏营地 (yaylaq) がある。タブルグの木 (tabulghu yīghach 「赤柳」) がこの山々にある。他所には無いものである。タブルグは樹皮が赤い木で、杖や (5b) むちの柄を作る。鳥かごにもする。5b けずって矢 (tergez) をも作る。大変よい木である。珍品として遠い地方にまで輸出されている。若干の書物にマンドラゴラ (yabrūj al-ṣanam) がこの山々で成育すると書かれているが、最近はまったくその事を聞かぬ。イエティケン
ト Yetikent の山々に成育する 1 つの草の事は聞いている。土地の人は気づけ草 (ayıq öti) と呼んでいる。メフル・ギヤーフ (mehr giyāh 「マンドラゴラ」) の様なものだと言うが、たぶんメフル・ギヤーフであろう。土地の人はこの名で呼んでいる。この山々にはトルコ石とか鉄の鉱業場がある。

フェルガーナ地方の歳入で、もし人々が公正にすれば、3～4,000の兵士を養う事ができる。

〔父ウマル・シャイフ・ミールザーについて〕

ウマル・シャイフ・ミールザーは高い望みと大きな野望を持った君主 (pādishāh) であったので、常に征服活動を志していた。彼は何度もサマルカンドにむけ出兵した。何度かは敗北を喫し、何度かは成果をあげずに引き返した。彼は何度も義父の「モグールの」ユーヌス・ハーン Yūnus Khān を「フェルガーナ地方へ」招請した。ユーヌス・ハーンはジンギーズ・ハーン Jīngīz Khān の第2子チャガターイ・ハーン Chaghatāy Khān の一族の出身である。彼は当時、チャガターイ・ハーンのユルトにおいて、モグール・ウルス (Moghūl ulusı) のハーンであり、そして私の祖父に当る。ハーンを連れて来ると共に、ウマル・シャイフはハーンに諸地方を贈与していた。ウマル・シャ
イフ (6a) ・ミールザーの思惑通りには事が運ばず、時にはウマル・シャイフ・ミールザーの悪しき行動のため、また時にはモグール・ウルスの反乱のため、ハーンはフェルガーナ地方に留まりえず、またモグーリスターン Moghūlistān へと帰っていた。最後にハーンを連れて来た時には、タシュケンド地方がウマル・シャイフ・ミールザーの支配下にあったので、この地方をハーンに与えた。

タシュケンドは書物にはシャーシュ Shāsh ないしチャーチュ Chāch と書かれており、「チャーチュ弓」(kamān-i Chāchī) の名はそこから出ている。その時以来**908年**〔1502/03年〕まで、タシュケンドとシャールヒーヤの一带 (wilāyatī) はチャガタイ家のハーンたちの支配下にあった。この時点〔899年〕では、モグール・ウルスのハーン位は、ユースス・ハーンの長男で、私の母方のおじに当るスルターン・マフムード・ハーンが占めていた。

ウマル・シャイフ・ミールザーの兄でサマルカンドの君主 (pādishāh) のスルターン・アフマド・ミールザー Sultān Aḥmad Mīrzā とモグール・ウルスのハーンであるスルターン・マフムード・ハーンは、ウマル・シャイフ・ミールザーの悪しき行動を心よく思っていなかった。そこでお互いに協約して、スルターン・アフマド・ミールザーはスルターン・マフムード・ハーンを婿 (küyāw) と為し、前述の年〔899年〕に、ホジャンド川の南側からスルターン・アフマド・ミールザーが、そして北側からスルターン・マフムード・ハーンが〔それぞれ〕ウマル・シャイフ・ミールザーにむけ出兵した。ところがこの時、不思議な事が起こった。前述の如く、(6b) アフスィ城は高い絶壁の上にあり、建物は峡谷に接して建てられていた。まさにこの年の**ラマザン月4日月曜日**〔1494年6月8日〕、ウマル・シャイフ・ミールザーは鳩と鳩小屋と一緒に飛んで鷹になった (shonqar boldı)。39歳であった。

彼〔**ウマル・シャイフ**〕の誕生と系譜 **860年**〔1456年〕にサマルカンドで生まれた。〔ティムール朝の君主であった〕スルターン・アブー・サーイード・ミールザー Sultān Abū Sa‘īd Mīrzā の4男で、スルターン・アフマド・ミールザー、スルターン・ムハンマド・ミールザー Sultān Muḥammad Mīrzā、スルターン・マフムード・ミールザー Sultān Maḥmūd Mīrzā より年少であった。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーはスルターン・ムハンマド・ミールザー Sultān Muḥammad Mīrzā の子で、スルターン・ムハンマド・ミールザーはミーラーン・シャー・ミールザー Mīrānshāh Mīrzā の子であった。ミーラーン・シャー・ミールザーはティムール・ベグ Tīmūr Beg の3男で、ウマル・シャイフ・ミールザー及びジャハーン・ギール・ミールザー Jahāngīr Mīrzā よりは年下で、シャー・ルフ・ミールザー Shāhrukh Mīrzā よりは年上であった。

スルターン・アブー・サーイード・ミールザーは、はじめウマル・シャイフ

・ミールザーにカーブルを与え、バーバーイ・カーブリー *Bābā-yi Kābuli* をその後見人 (*beg atākā*) として、〔アフガニスタンへの〕出立を許していた。やがて王子たちに割礼をほどこす儀式 (*toy*) を行なうため、〔バルフ南方の〕ガズの谷 (*darra-yi Gaz*) からミールザーを呼びもどし、サマルカンドに連れて来た。儀式が終ると、かつてティムール・ベグが長男のウマル・シャイフ・ミールザーにフェルガーナ地方を与えたという関係から、〔同名のウマル・シャイフに〕アンディジャーナ地方を与え、ホダーイ・ベルディ・トゥグチ・ティムールタシュ *Khudāy-berdi tughchi Timūr-tash* を後見人につけて派遣した。

姿形と習慣 短身で、まるいひげ〔ほほからあごに続くひげ〕をはやし、肉
7a づきのよい顔をした肥った男であった。衣服を (7a) すこぶる身体にぴっちり
と身につけていた。腰帯をしめさせる時には、〔息をはいて〕お腹を内にひっこ
めてしめさせた程である。腰帯をしめた後で、急に自分を〔窮屈さから〕解放
しようとする、しばしば腰帯が裂けてしまった。衣服とか食物は型にとらわ
れなかった (*bī-takalluf*)。ターバンを折り目をつけてひと巻き (*dastār pīch*)
に巻いていた。当時ターバンは全て四つ巻き (*chār pīch*) であった。人々は折
り目をつけずに巻いて、端をたらしていた。夏には、宮殿内以外では、たいて
いモグール帽 (*Moghūli bōrk*) を身につけていた。

品行と生活態度 ハナフィー派に属する、まともな信仰を持った人物であっ
た。5回の礼拝を欠かす事は無かった。生涯、都合で実行しえなかった宗教的
義務の「うめ合せ」(*qaḍā'*) をも全て行なっていた。しばしばコーランを誦ん
でいた。〔ナクシュバンディー教団の〕ホージャ・ウバイドゥッラー *Khwāja*
‘Ubayd Allāh に師事していた。お会いする事を大変ありがたい事に思ってい
た。ホージャも〔彼を〕息子と呼んでおられた。流暢な読み書きの能力を持っ
ていた。2種の『ハムサ』(*Khamṣa*) とマスナヴィー体の諸書、それに歴史書
を読んでいた。『シャー・ナーマ』(*Shāh-nāma*) もほとんど読んでいた。詩才
があった。しかし詩を作る気は無かった。彼の公正さは以下に述べる程であっ
た。中国の隊商 (*Khiṭāy kārawānī*) が来た時、アンディジャーナの東方の山の
麓で、雪が1000帳から成る隊商を襲って、2人だけが死をまぬがれた。〔ウマ
ル・シャイフは〕それを聞くと収税官 (*muḥaṣṣil*) を派遣して隊商の全ての財
7b 産を (7b) 管理下に置いた。相続人がいなかったが、大変なのにもかかわらず、

その財産を管理して、1～2年後にサマルカンドやホラーサーンから相続人たちを呼んで来て、彼らの財産を彼等に安全にもどした。

非常に寛大であったが、それは生まれつきの寛大さのようであった。気のいい、話し好きの、流暢な、話のうまい人物であった。勇敢で男らしい人物であった。2度、彼自ら、全ての若党達 (yigit) から離れて刀をふるった。1度はアフスイの城門の所で、いま1度はシャールヒーヤの城門に於いてであった。矢を、ほどほどに射た。腕力が強く、その一ぱつで倒れぬ若党は独りもいなかった。その征服欲が強かったため、平和が戦争に、友情が敵意に変わる事が多かった。以前には大量に酒を飲んでいて、晩年は1週間に1～2度席を設けていた。同席すると楽しい人物であった。時にはよい詩を誦んだ。晩年はそれ以上に麻薬 (ma'jūn) を好み、薬の効いた時には自失していた。惚れっぽく (mutayyam shi'ār), 多くの愛の印がその胸におされていた (na'l-o-dāgh-ı bisyār erdi)。いつも双六 (nard) 遊びをしていた。時にはさいころ (qumār) もしていた。

戦争と戦闘 3度戦った。最初はユーヌス・ハーンとアンディジャーンの北
8a (8a) 側、サイフン川の岸辺のタカ・セクリトキュ Taka-Sekritkü 「雄羊の跳躍」の意」という場所で戦って敗北を喫し捕虜となった。そこがこの名で知られている理由は、山麓のため、サイフン川が非常に狭く流れているので、そこを雄羊 (taka) が跳びこえた (sekri-gän) という話があるためである。ユーヌス・ハーンは彼を丁重に扱って自領へと帰る事を許した。この場所で戦が行なわれたので、タカ・セクリトキュの戦はその地方では時代を画する事件となっている。第2はトゥルキスターン地方のウルス川 Urus suyı の河畔で、サマルカンド近辺を略奪して帰る途中のウズベクと戦った。彼はウルス川を氷上を渡って大いに破り、〔敵の手中にあった〕捕虜と財貨を〔敵から〕切り離し、その全てをもとの所有者に返してやり、自分は全く何も取ろうとしなかった。いま1度は〔兄の〕スルターン・アフマド・ミールザーとシャールヒーヤとウラ・テペ Ūrā-tepe の間のハース Khwās という村で戦って敗北した。

領地 父君はフェルガーナ地方を与えていた。しばしタシュケンドとサイラーム Sayrām もミールザーの支配下にあった。兄のスルターン・アフマド・ミールザーが与えたものである。シャールヒーヤを計略を用いて取って、しばらく領有していた。晩年はタシュケンドとシャールヒーヤは手中から離れていた。フェルガーナとホジャンドとウラ・テペがその領地であった。ウラ・テペの元

の名はウスルーシャナ *Usrūshana* で、ウスルーシュ *Usrūsh* とも云う。若干の
8b 人々はホジャンドをフェルガーナ内には (8b) 数えない。スルターン・アフマ
ド・ミールザーが〔893年/1488年〕タシュケンドへモグールにむけ出征し、チ
ル川 *Chir-suy*¹〔チルチク川〕の河畔で敗北を喫した際、ウラ・テペにはハー
フィズ・ベグ・ドウラダイ *Hāfiz Beg Dawladay* が居た。彼はウラ・テペを
〔ウマル・シャイフ〕ミールザーに与えた。それ以来、ウスルーシャナはウマ
ル・シャイフ・ミールザーの支配下にあった。

子供たち 3男5女が生存している。長男が私、ザヒールッ・ディーン・ム
ハンマド・バーブル *Ẓahīr al-Dīn Muḥammad Bābur* であった。私の母はク
トゥルク・ニガール・ハースム *Qutluq Nigār Khānım* であった。次の息子は
ジャハーンギール・ミールザー *Jahāngīr Mīrzā* で、私より2つ年下であった。
その母はモグールのテュメン・ベグ (*tümān beg*) の家柄の出身であった。フ
ァーティマ・スルターン *Fāṭima Sultān* という名である。もう一人の息子は
ナーシル・ミールザー *Nāṣir Mīrzā* で、母はアンディジャー人 (*Andi-
jānligh*) で側女 (*ghunchachi*) であった。ウミード *Umīd* という名であった。
ナーシルは私より4歳年下であった。

長女はハーンザーダ・ベギム *Khānzāda Begim* で、私と同腹であった。私
より5歳年長であった。私が〔906年/1500年〕2度目にサマルカンドを取った
際、私はサリ・プル *Sar-i pul* で〔ウズベクのシャイバーニー・ハーンに〕破
られたにもかかわらず、サマルカンドに入って**5カ月間**籠城した。しかし周囲
の諸君主やベグたちから何の援助も得られず、私は進退きわまり、城を捨てて
出城した。その際、ハーンザーダ・ベギムは〔敵であるウズベクの〕ムハンマ
ド・シャイバーニー・ハーンの手中に落ちた〔実際は、出城の条件として引渡
された〕。一人の男子が生まれた。フッラム・シャー *Khurram Shāh* という名
9a で、才に恵まれた子であった。バルフ地方 (*Balkh wilāyatı*) を (9a) 与えられ
ていたが、父の死〔1510年〕より1～2年の後に神の御許にめされた。〔サフ
ァヴィー朝の〕シャー・イスマーイール *Shāh Isma‘īl* が〔1510年〕ウズベク
をマルヴ *Marv* に破った際、ハーンザーダ・ベギムはマルヴにいた。〔シャー
は〕私との関係から〔彼女を〕丁重に扱い、十分な護衛をつけて護送し、クン
ドゥズ *Qunduz* に来て私に合流した。一別以来、10年の月日が流れていた。
私とムハンマディー・キュケルタシュ *Muḥammadī Kōkāltash* が〔確かに姉

にまちがいない事を〕確認した。しかしベギムとベギムの側近の者たちは、私がそうだと云っているのに、私を〔バーブルだと〕認めなかった。彼らはしばらく時間がたって私を認めた。

次の娘はミフル・バーヌー・ベギム *Mihr Bānū Begim* で、ナーシル・ミールザーと母を同じくした。私より2歳年上であった。

次はシャフル・バーヌー・ベギム *Shahr Bānū Begim* であった。彼女もナーシル・ミールザーと同腹であった。私より8歳年下であった。＜p. 11 次はヤードカール・スルターン・ベギム *Yādkār Sultān Begim* で、母はアーガー・スルターン *Āghā Sultān* という名の側女であった＞。

次はルカイヤ・スルターン・ベギム *Ruqayya Sultān Begim* で、母はカラ・キョズ・ベギム *Qara-köz Begim* 〔「黒い瞳の姫」〕と呼ばれていたマフドゥーム・スルターン・ベギム *Makhdūm Sultān Begim* であった。

2人共、ミールザーの死後に生まれた。ヤードカール・スルターン・ベギムを私の祖母のイセン・ドウラト・ベギム *Īsān Dawlat Begim* が養育していた。シャイバーニー・ハーンが〔1504年〕アンディジャーン、アフスイを取った際、ヤードカール・スルターン・ベギムはハムザ・スルターン *Ḥamza Sultān* のアブドゥル・ラティーフ ‘Abd al-Latīf という名の息子の手に残った。〔917年/1511年〕私がハムザ・スルターンをはじめとする王子たち (*sultānlar*) をフッタラーン *Khuttalān* 地方で破り、ヒサール *Ḥiṣār* を取った際、彼女は私に合流した。またかの同じ時に、ルカイヤ・スルターン・ベギムは〔シャイバーニーのいとこの〕ジャーニー・ベグ・スルターン *Jānī Beg Sultān* の手に落ちた。(9b) 1～2名の男子が生まれたが、生きおおせなかった。最近、彼女が神の御許にめされたという知らせがとどいた。

妻妾たち クトゥルク・ニガール・ハースムがいた。〔モグールの〕ユーヌス・ハーンの次女で、スルターン・マフムード・ハーン、スルターン・アフマド・ハーンの姉であった。ユーヌス・ハーンはジンギーズ・ハーンの子チャガタイ・ハーンの子孫の出身である。〔その系譜は〕*Jingīz Khān—Chaghtāy Khān—Mū’ātūkān [Mū’ātūgān]—Yīsūn Tū’a [Yesūn Tu’a]—Baraq Khān—Dū’a Khān [Du’a Khān]—Īsān Būghā Khān [Isān Bugha Khān]—Tūghlūq Tīmūr Khān [Tughluq Timur Khān]—Khiḍr Khwāja Khān—Muḥammad Khān—Shīr ‘Alī Oghlān—Ways Khān—Yūnus Khān* である。ちょうどよい

機会なので、ここでハーンらの諸状況についても簡単に述べておく事にしよう。

〔ユーヌス・ハーンについて〕

ユーヌス・ハーンとイセン・ブガ・ハーン *Īsān Būghā Khān* はヴァイス・ハーンの子であった。ユーヌス・ハーンの母は、トゥルクスタン人のキプチャク族のベグ階級の出身で (*Turkistānlıq Qıpchaq beqlāridin*)、ティムール・ベグが目をかけたシャイフ・ヌールッ・ディーン・ベグ *Shaykh Nūr al-Dīn Beg* の娘ないし孫娘であった。ヴァイス・ハーンが〔1432年に〕歿すると、モグール・ウルスは2派に分裂した。1派はユーヌス・ハーンの側につき、より多数はイセン・ブガ・ハーンの側についた。それより先に、ユーヌス・ハーンの姉を、〔ティムール朝の〕ウルグ・ベグ・ミールザー *Ulugh Beg Mīrzā* が〔息子の〕アブドゥル・アズィーズ *‘Abd al-‘Azīz* に娶わせていた。この関係から、バーリン部のテュメン・ベグの1人 (*Bārīn tūmān beqlāridin*) のエルザン *Erzan* とチョラス部の (10a) テュメン・ベグの1人である (*Chorās tūmān beqlāridin*) ミーラク・トゥルクメン *Mīrak Türkmen* は、ハーンを3〜4,000帳のモグール・ウルスと共にウルグ・ベグ・ミールザーのもとへと連れて行った。それは、助けを得て再びモグール・ウルスを支配下に収めようとする考えに基づいた行動であった。しかしミールザーは優しくはしなかった。若干を捕え、若干をひとりずつ地方へと放逐した。「エルザンの破滅」 (*Erzan bozughluḡı*) は、モグールの人々の間で、1つの紀年となっている。

彼らはハーンをイラク方面へ送った。ハーンは行って、1年以上タブリーズ *Tabrīz* に居た。当時、タブリーズの君主 (*pādishāh*) は黒羊朝 (*Qaraqoyluq*) のジャハーンシャー・バーラーニー *Jahānshāh Bārānī* であった。そこからシーラーズ *Shīrāz* に来た。シーラーズには、〔ティムール朝の君主〕シャールフ・ミールザーの次男のイブラーヒーム・スルターン・ミールザー *Ibrāhīm Sulṭān Mīrzā* が居た。5〜6カ月の後、〔1435年5月4日〕イブラーヒーム・スルターン・ミールザーが歿し、息子のアブドゥッラー *‘Abd Allāh* がミールザーの位に即いた。ハーンはアブドゥッラー・ミールザーの家臣 (*nökār*) として仕えた。17〜18年間、ハーンはシーラーズとその諸地域に暮した。

ウルグ・ベグ・ミールザーとその息子たちの抗争の際に、イセン・ブガ・ハーンは機会を見出し、侵入してフェルガーナ地方をカンディ・バーダームまで

略奪し、来たってアンディジャーンを取り、住民を全て捕虜にした。〔ティムール朝の〕スルターン・アブー・サーイード・ミールザーが〔1451年に〕即位すると、出兵してヤングの彼方、アシュパラ Ashpara でモグーリスターン領
10b 内で (10b), イセン・ブガ・ハーンを大いに破った。この厄介事を取り除くためにスルターン・アブー・サーイード・ミールザーは、かつてアブドゥル・アズィーズが娶ったユースス・ハーンの姉のハーヌムを自分が娶っているという関係から、ユースス・ハーンをイラク及びホラーサーンから呼んで来て、たびたび祝宴を催し、友誼を深め、モグール・ウルスのハーンに擁立して〔モグーリスターンへ〕派遣した。当時、サグルチ部のテュメン・ベグたち (Sagh-richi tümän begläri) は、全て、イセン・ブガ・ハーンに敵対してモグーリスターンへ来ていた。ユーススはこれらの人々の間へやって来た。当時、サグルチ部のテュメン・ベグたちの筆頭はシール・ハージー・ベグ Shīr Hājji Beg であった。ユーススはその娘のイセン・ドウラト・ベギムを娶った。モグールの慣例 (Moghūl töräsi) に従って、人々はハーンとイセン・ドウラト・ベギムを1枚の白いフェルトの上に坐らせて、ハーンを上を持ち上げた (khān kōtārdilār)。

ハーンのこのイセン・ドウラト・ベギムから3女が生まれた。長女がミフル・ニガール・ハーヌム Mihr Nigār Khānım で、スルターン・アブー・サーイードが長男のスルターン・アフマド・ミールザーに娶わせたが、ミールザーの子供はできなかった。後、私の空位時代に、シャイバーニー・ハーンの手落ちた。私がカーブルに来た時、彼女はシャー・ベギム Shāh Begim と共にサマルカンドからホラーサーンに来て、〔1505年〕ホラーサーンからカーブルへ来た。〔1507年〕シャイバーニー・ハーンがカンダハールにナーシル・ミールザーを囲んだ時、私はラムガーン Lamghān にむけ出発した。〔スルターン・マフムード・ミールザーの子 (母はユースス・ハーンの娘スルターン・ニガール・ハーヌム)〕ハーン・ミールザー Khān Mīrza, そしてシャー・ベギム, ミフル・ニガール・ハーヌムは〔シャー・ベギムの出身地の〕バダフシャーンへ
11a 行った。ムバーラク・シャー Mubārak-shāh がミールザー・ハーンを (11a) カーライ・ザファル Qal'a-yi Zafar [「勝利の城」] に招いた時、アバー・バクル・カーシュガリー Abā Bakr Kāshgharī の襲撃に出くわし、シャー・ベギムとミフル・ニガール・ハーヌム、それに全ての人々の妻や家族が捕われの身

となった。かの悪しき暴逆者に捕えられたまま、彼らはこのはかなき世に別れを告げた。

次女は私の母のクトゥルク・ニガール・ハーヌムであった。私のほとんどの放浪・空位時代にも、私と共にあられた。カーブル征服後5～6カ月の911年〔1505年6月〕、神の御許にめされ給うた。

3女はフブ・ニガール・ハーヌム Khūb Nigār Khānım であった。ムハンマド・フサイン・キュレゲン・ドゥグラト Muḥammad Ḥusayn Kūrāgān Dūghlat に与えられていた。1男1女をもうけた。その娘を〔ウズベクのシャイバーニー・ハーンの甥の〕ウバイド・ハーン ‘Ubayd Khān〔1534—1540在位〕が娶った。〔1511年に〕私がブハーラーとサマルカンドを取った時、彼女は逃げずに残っていた。〔モグールの〕スルターン・サーイード・ハーン Sulṭān Sa‘īd Khān のもとから、彼女の父方のおじ〔ムハンマド・フサインの弟〕のサイイド・ムハンマド・ミールザーがサマルカンドの私の所へ使者として来た時、彼女は彼について〔モグーリスターンへ〕行った。スルターン・サーイード・ハーンが娶った。〔フブ・ニガール・ハーヌムの〕息子がハイダル・ミールザー Ḥaydar Mīrzā であった。彼は父が〔1508年〕ウズベクに殺害された後、来て私に3～4年間仕えた。後に暇を乞うて、カーシュガルのハーンのもとに帰った。

全ては己が基^{もとい}へとたちかえる。

純金にせよ銀にせよ、また錫にせよ。

彼は最近では悔悛して正しき道を見つけたと云われている。書道、絵画、矢、
11b ^{ヤジリ} 鏃、弓の指貫などあらゆるものに彼の手は熟達していた。詩の才（11b）もあった。私の所に彼の上奏文が来ていたが、その書式（inshā’sī）も悪くなかった。

ハーンのもう1人の妃（khatun）はシャー・ベギムであった。他にも何人かの妃があったが、子供たちの母となったのはこの2人だけであった。シャー・ベギムはバダフシャーン王シャー・スルターン・ムハンマド Shāh Sulṭān Muḥammad の娘であった。このバダフシャーン王家の系譜はイスカンダル・フィールクース Iskandar Fīlqūs〔フィリップの子アレクサンドロス大王〕にさかのぼると云われている。

シャー・ベギムの姉にあたると思われる、この王のもう1人の娘をスルター

ン・アブー・サーイード・ミールザーが娶っていた。彼女からアバー・バクル・ミールザー Abā Bakr Mīrzā が生まれた。

ハーンのこのシャー・ベギムから2男2女が生まれた。他の3人より年長で、先の〔イセン・ドウラト・ベギムから生まれた〕3人の娘たちよりも年下なのがスルターン・マフムード・ハーンであった。彼の事を、サマルカンドやその周辺地帯で、若干の人々はハーニケ・ハーン Khānikā Khān と呼んでいる。スルターン・マフムード・ハーンより年下なのがスルターン・アフマド・ハーン Sultān Aḥmad Khān であった。彼はアラチャ・ハーン Alacha Khān の名で知られていた。「アラチャ」の名の起こりは以下の如くだと云われている。カルマク Qalmaq 〔西モンゴル族〕及びモグールの言葉では殺戮者をアラチ alachi と云う。彼がカルマクを何度も破り多くの者を殺したために、彼をアラチと呼んだ。使用されている内にアラチャとなったと。なおこの史書(ta'rikh)の中で、ハーンたちについては何度も記述する予定である。彼らの諸事件や諸状況はそこで述べられるであろう。

- 12a 他の者たちよりも年少で、1人の娘よりも年長なのが(12a)スルターン・ニガール・ハースム Sultān Nigār Khānīm であった。彼女をスルターン・マフムード・ミールザーの所へ嫁がせていた。ミールザーの子として1人の男子が生まれ、スルターン・ヴェイス Sultān Ways 〔別称ミールザー・ハーン。27a 参照〕と名づけられたが、彼についてはこの史書の中でやがて述べるであろう。スルターン・マフムード・ミールザーの死〔1495年〕後は、息子連れて、誰にも告げずに、タシュケンドの兄たちの所へ行った。数年後に、人々は彼女を、ジンギーズ・ハーンの長子ジョチ Jöchi の一族でカザク (Qazaq) のスルタンの1人であるアディク・スルターン Adik Sultān に与えた。〔1503年〕ハーンたちをシャイバーニー・ハーンが破ってタシュケンドとシャルヒーヤを取った際に、彼女は12人のモグールの従者 (nökār) と共にのがれてアディク・スルターンのもとへ行った。アディク・スルターンによって2女をもうけた。その内の1人をシャイバーン家のスルターンに、もう1人をスルターン・サーイード・ハーンの息子のラシード・スルターン Rashīd Sultān に与えた。アディク・スルターンの歿後、カザク・ウルスのハーンであるカーシム・ハーン Qāsim Khān 〔1511—1518頃在位〕が娶った。カザクのハーンやスルターンの間で、そのウルスをカーシム・ハーンの如くに治めた人物は1人もいないと

云われている。その兵はおよそ30万を数えた。カースィム・ハーンの歿後、ハースムはカーシュガルのスルターン・サーイード・ハーンのもとに來た。

12b 最年少はドウラト・スルターン・ハースム Dawlat Sulṭān Khānīm であった。タシュケンドの破滅の際、シャイバーニー・ハーンの子のティムール・スルターン Tīmūr Sulṭān の手に (12b) 落ちた。その1女が生まれた。彼女たちは、サマルカンドから私と一緒に脱出した。3～4年間、バダフシャーン地方に居た。その後、彼女たちはカーシュガルのスルターン・サーイード・ハーンのもとへ行った。

〔妻妾たち (続)〕

ウマル・シャイフ・ミールザーの妻妾たちのもう1人は、ホージャ・フサイン・ベグ Khwāja Husayn Beg の娘のウルス・アーガー Ulus Āghā であった。1女が生まれたが夭逝した。1年ないし1年半後に人々は彼女をハラム〔後宮〕から出した。別の1人はファーティマ・スルターン・アーガー Fāṭima Sulṭān Āghā であった。モグールのチュメン・ベグの家柄の出であった。ミールザーは、最初にこのファーティマ・スルターン・アーガーを娶った。もう1人はカラ・キョズ・ベギム Qara-köz Begim で、晩年に娶った。大変愛されていた。ミールザーをよろこばせるために、彼女はその系譜をスルターン・アブー・サーイード・ミールザーの兄のマヌーチフル・ミールザー Manūchihr Mīrzā にさかのぼらせていた。妾・側女も多かった。1人はウミード・アーガーチャ Umīd Āghācha で、ミールザーより先に歿した。ミールザーの晩年には、1人はトゥン・スルターン Tūn Sulṭān [＜p. 15. Tursūn Sulṭān＞] で、モグールの出身であった。もう1人はアーガー・スルターン Āghā Sulṭān であった。

13a **アミールたち** ホダーイ・ベルディ・ティムールタシュ Khudāy-berdi Tīmūr-tash がいた。ヘラート (Harī) のハーキム (hākīm) のアク・ブガ・ベグ Aq Bugha Beg の兄の一族の出身である。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーが〔ウルグ・ベグの子アブドゥル・ラティーフの子の〕ジュークー・ミールザー Jūkī Mīrzā をシャールヒーヤに包囲した時、彼はフェルガーナ地方をウマル・シャイフ・ミールザーに与え、このホダーイ・ベルディ・(13a) ティムールタシュをその宮廷の長に任命して派遣した (ishikini bu Khudāy-berdi Tīmūr-tashqa bashlatıp yibārip erdi)。当時このホダーイ・ベ

ルディ・ティムールタシュは25歳であった。年は若かったが、彼の制度、規律、解決はまことにすばらしかった。1～2年後、〔モグールの〕イブラーヒーム・ベグチク Ibrāhīm Begchik が、オシュ近辺を襲撃した際、ホダーイ・ベルディ・ティムールタシュは追撃して戦って打たれて殉教者となった (shahīd boldı)。その時、スルターン・アフマド・ミールザーはウラ・テペのアク・カチュガイ Aq Qachghay という夏営地に居た。サマルカンドから18ユガチ東方の地点である。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーは、ヘラートの東方12ユガチのバーバー・ハーキー Bābā Khakī に居た。この〔ホダーイ・ベルディの死の〕知らせをアブドゥル・ワッハブ・シカーウル ‘Abd al-Wahhāb shiqāwul〔シカーウルはモンゴル語起源。「客の随伴者役」〕を通じて〔スルターン・アフマド・ミールザーに〕上奏し、〔スルターン・アブー・サーイード〕ミールザーに早馬を走らせた。この126ユガチ〔ウラ・テペ、ヘラート間は約1,000km〕の道のりを4日で駆けた。

次にハーフィズ・ムハンマド・ベグ・ドウラダイ Ḥāfiẓ Muḥammad Beg Dawladay がいた。スルターン・マリク・カーシュガリー Sultān Malik Kashgharī の子で、アフマド・ハージー・ベグ Aḥmad Ḥājji Beg の弟であった。ホダーイ・ベルディ・ベグの死後、人々はこの人物を宮廷の長として (ishik ikhtiyārı qılıp) 派遣した。〔1469年の〕スルターン・アブー・サーイードの死後、アンディジャーンのベグたちが彼とうまくゆかなかったため、彼はサマルカンドへ行きスルターン・アフマド・ミールザーに仕えた。スルターン・アフマド・ミールザーが〔1488年〕チル川で敗れた際、彼はウラ・テペにいた。

- 13b (13b) ウマル・シャイフ・ミールザーがサマルカンドをめざしてウラ・テペに来ると、ウラ・テペをミールザーの支配下に委ねてミールザーに仕えた。ウマル・シャイフ・ミールザーもアンディジャーンのハーキム職 (ḥukūmat) を彼に与えた。後には彼は〔モグールの〕スルターン・マフムード・ハーンのもとへ行っていた。ミールザー・ハーン〔の後見〕をまかされて、彼にディーザク Dīzak が与えられた。私が〔1504年に〕カーブルを占領する以前に、彼はメッカ Makka にむけ出発し、ヒンド道 (Hind yolu) をとって進んだが道中で神の御許にめされた。素朴な、寡黙な、きわだった所の無い人物であった。

次はホージャ・フサイン・ベグ Khwāja Ḥusayn Beg であった。男らしい単純な人物であった。当時の流行に従って酒の席で即興詩 (qoshuq) をたくみ

にうたっていたようである。

次はシャイフ・マズィード・ベグ *Shaykh Mazīd Beg* であった。人々は彼を私の最初の後見人 (*beg atākā*) にしていた。その規律、制度〔行政能力〕はすこぶるすぐれていた。〔シャー・ルフの子バイスングルの子の〕バーブル・ミールザー *Bābur Mirzā* に仕えた事がある。ウマル・シャイフ・ミールザーのもとでは彼以上のベグはいなかった。色好みの人物であった。小姓 (*chuhra*) の面倒をみていた。

次はアリー・マズィード・ベグ *‘Alī Mazīd Beg* で、カウチン部 (*Qawchin*) に属した。2度敵対した。1度はアフスィで、もう1度はタシュケンドに於いてである。煽動的な、みだらな、感謝の心を持たぬ、承認できぬ人物であった。

次はハサン・ヤークーブ・ベグ *Ḥasan Ya‘qūb Beg* で、小心で、人の好い、敏捷で、活動的な人物であった。この句は彼のものである。

帰っておいで、おおホマー〔幸せをもたらすという霊鳥〕よ、そなたの口
辺のうぶ毛すらまだ私には無いというのに、

からすが私の骨を運ぶ日がもう近づいた。

- 14a 男らしい人物で、矢を巧みに射た。ポロも (14a) うまく、跳び馬 (*khāk pelā*) も巧みに跳んだ。ウマル・シャイフ・ミールザーの死後、私の宮廷における権限の保持者が彼であった (*mening ishikimdā šāhib-i ikhtiyār ol edi*)。心が狭く、気の弱い、まずめんどろを起こす心配の無い人物であった。

次はカーシム・ベグ *Qāsim Beg* であった。カウチンである。古いアンディジャーンのクシュン・ベグ (*qushun beg*)〔部族軍団の長〕の家柄の出身であった。ハサン・ベグの後に私の宮廷における権限の所有者が彼であった。終世、彼の権威・権限は増大し、減ずる事は無かった。男らしい人物であった。1度はカーサーン附近を略奪したウズベクを追撃して大いに破った。ウマル・シャイフ・ミールザーの脇で刀をふるった。ヤスィ・ケチト *Yasī Kechit* の戦でもよく奪戦した。私の放浪時代に (*qazaqlıqlarda*)、私がマスィーハー山地 (*Masīhā Kūhistān*) からスルターン・マフムード・ハーンの所へ行こうとした時、カーシム・ベグは別れてホスロー・シャー *Khusraw-shāh* の所へ行った〔39b参照〕。私がホスロー・シャーを捕え、カーブルで〔ズーン・ヌーン・ベグの子の〕ムキーム *Muqīm* を包囲した **910年**〔1504年〕に、カーシム・ベグが来た。私は、また全く以前と同様に彼を重んじ眼をかけた。〔1507

年] 私がトゥルクメン・ハザーラ族をフーシュ Khūsh の谷で襲撃した際、カー
スィム・ベグは老齡にもかかわらず若党たちよりもよく進んだので、バンガシ
14b ュ地方 Bangash wilāyatı を分ち与えた (jüldü berdim)。後、(14b) カーブル
に帰ると、彼を〔私の長男の〕フマーユーン Humāyūn の後見人 (beg atākā)
に任命した。ザミーン・ダーワル Zamīn-Dāwar を取った頃、彼は神の御許に
召された。まことのムスリムで信心深い敬虔な人物であった。〔法で禁じられ
ている豚肉等の物を含むかも知れぬ〕疑わしい食物には手をつけなかった。そ
の意見と助言はすこぶる役立った。冗談をよくした。読み書きはできなかった
にもかかわらず、その機智はしばしば人を楽しませた。

次はバーバー・アリー・ベグ Bābā ‘Alī Beg の子のバーバー・クリー Bābā
Qulī であった。シャイフ・アリー・バハードウル Shaykh ‘Alī Bahādur の一
族の出身であった。シャイフ・マズィード・ベグの死後、人々は彼を私の後見
人にした。スルターン・アフマド・ミールザーがアンディジャーンに出兵した
時、彼はスルターン・アフマド・ミールザーに投じて、ウラ・テペを献じた。

〔1495年の〕スルターン・マフムード・ミールザーの死後、彼がサマルカンド
から脱出して来た時、ウラ・テペからスルターン・アリー・ミールザーが出て
彼と戦って破って殺した。その規律や法〔行政能力と司法能力〕はすぐれていた。
従士ら (nökār) の面倒をよくみた。礼拝はしなかった。断食もしなかった。
暴君で邪教徒的な人物であった。

次はアリー・ドースト・タガーイー ‘Alī Dūst Ṭaghā’ī であった。サグルチ
部のテュメン・ベグの一族の出身であった。私の母方の祖母のイセン・ドウラ
ト・ベギムと同族であった。私はウマル・シャイフ・ミールザーの時代以上に
彼に目をかけた。彼の手で何事かが起こると人々は云っていた。しかし私のそ
15a ばに居たこの数年間、云われているような事は何も起こらなかった。(15a) ス
ルターン・アブー・サーイードに仕えた時代には、彼はヤダ石を用いて風雨を
呼び起こす事ができると主張していた (yadachılıq da‘wisini qılır edi)。鷹
匠 (qushchı) であった。感心できぬ品行・態度の人物であった。嫉妬深く、事
あれかしの、粗野で偽善者的で利己的で、荒々しい口をきき、冷い顔つきの人
物であった。

次はヴァイス・ラーガリー Ways Lāgharī であった。サマルカンドのトゥク
チの人々の出身であった (Samarqandlıq Tuqchı elidin edi)。ウマル・シャ

イフ・ミールザーのもとで晩年には非常に可愛がられていた。私と放浪時代を共にした。意見や助言はすこぶる役に立った。やや煽動者的であった。

次はミール・ギヤース・タガーイー *Mīr Ghiyāth Ṭaghā'ī* であった。アリー・ドーストの弟であった。モグール人の王子たち (*mīrzādalar*) の内には、スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの宮廷 (*ishik*) でこの人物より上席を占める者はいなかった。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの四方形の印章 (*chahār sū muhrī*) は彼が管理していた。ウマル・シャイフ・ミールザーの晩年、非常に目をかけられていた。ヴァイス・ラーガリーと親友であった。スルターン・マフムード・ハーンにカーサーンが与えられて以後、彼は終世ハーンに仕えた。ハーンもすこぶる目をかけた。人を笑わせる^{ひょうきん} 剽軽な人物であった。男色 (*fisq*) においても臆する所が無かった。

次はアリー・ダルヴィシュ *‘Alī Darwish* で、ホラーサーン人 (*Khorāsānlīq*) であった。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーのもとで、ホラーサーン小姓隊 (*Khorāsān chuhrasī jergāsi*) の一員として仕えていた。ホラーサーンとサマルカンドがスルターン・アブー・サーイードの支配下に (15b) 入ると、この2つの首都の仕事に適した若者たちを特別近衛隊 (*khāṣṣa tābīn*) に仕立て、ホラーサーン小姓隊 (*Khorāsān chuhra tābīni*)、サマルカンド小姓隊 (*Samarqand chuhra tābīni*) と呼んだと云う。私のもとではサマルカンドの宮廷でよい働きをした。男らしい人物であった。ナスフ・ターリーク体の書 (*naskh ta‘līq khaṭī*) をよくした。人を楽しませる事を云っていた。性格では欲深さがかっていた。

次はモグールのカンバル・アリー *Qanbar ‘Alī Moghūl* であった。馬群管理官 (*akhtachī*) の出身であった。彼の父が「フェルガーナ」地方に来て、しばらく屠殺人 (*sallākh*) の仕事をしていたために、彼はカンバル・アリー・サッラーフと呼ばれていた。彼はユヌス・ハーンのもとで水さし持ち (*āftābachī*) をつとめ、後にベグになった。私のところでも非常な寵愛を受けた。地位にありつくまではその努力はすばらしかった。地位にありつくと役立たずの所があった。おしゃべりで話があちらこちらととんだ。よくしゃべる者はとりとめもなくしゃべるというのがきまりである。心が狭く、頭のわるい人物であった。

ウマル・シャイフ・ミールザーにこの事件が起こった時 [1494年6月8日]、

私はアンディジャーンの〔城外の〕チャハール・バグ Chahār Bāgh にいた。

ラマザン月 5 日火曜日〔1494年 6 月 9 日〕にこの知らせがアンディジャーンにとどいた。急ぎ馬に乗り、傍らにいた従士・従者らと共に〔アンディジャーンの〕城にむかった。ミールザー門に着くとシーリーム・タガーイー Shīrīm Taghā'ī が私の手綱を取ってナマーズ・ガーフ〔集団礼拝場〕の方へ導いた。

彼はふとこう考えたのである：スルターン・アフマド・ミールザーは強大な

16a (16a) 君主である。もし彼が大軍と共に来れば、ベグたちはバーブルと領地を彼に引渡すであろう。バーブルをウズケンド Özkend とイル・タグ Il tagh〔<p. 20 アラ・タグ Alā tagh>〕の麓の方へ連れて行けば、もし彼らが領地を献上してもバーブル自身はスルターン・アフマドの手に落ちず、そのおじたちであるアラチャ・ハーンかスルターン・マフムード・ハーンの所へ行きつくであろうと。

ホージャ・マウラーナー・カーズィー Khwāja Mawlānā Qādī と城内にいたベグたちはこれを知ると、ウマル・シャイフ・ミールザーの古くからの部下 (bayrī) で、1 人の娘の後見人でもあったホージャ・ムハンマド・ダルズィー Khwāja Muḥammad Darzī を遣した。そして種々の不安をこれらの人々の心から取り除き、私たちがナマーズ・ガーフの近くに到達していた時、私を連れて〔城に〕ひき返した。ホージャ・マウラーナー・カーズィーはスルターン・アフマド・カーズィー Sultān Aḥmad Qādī の子で、〔『ヒダーヤ』の著者〕シャイフ・ブルハースッ・ディーン・クルチュ Shaykh Burhān al-Dīn Qīlich の同族であった。母方を通じて〔ティムール時代のマルギーナーンの支配者で、サトゥク・ボグラ・ハーンの子孫と云われる〕スルターン・イリク・マーズィー Sultān Ilik Mādī にさかのぼる。これらの人々の一家は昔からフェルガーナ地方で人々の精神的な寄り所 (marji') とかシャイフル・イスラーム (shaykh al-Islām) に伝統的に (yosunluq) なってきている。彼らについてはこの書物の中で繰り返されし述べられる予定である。私は城につくと内城 (ark) に下馬した。ホージャ・マウラーナー・カーズィーとベグたちは私の前に来て相談をまとめると、城の塔や城壁の整備・補強に努めた。マルギーナーンとその近辺で先遣隊をつとめていたハサン・ヤークーブ、カースィム・カウチンそれに若干のベグたちは 1～2 日後に来て〔私に〕仕え、皆が心と考えを 1 つにして懸

16b 命に (16b) なって城の確保に努めた。

スルターン・アフマド・ミールザーはウラ・テペ、ホジャンド、マルギーナーンを取って来て、アンディジャーから4ユガチ〔実際は約30 km〕の地点のクバー Qubā に下馬した。この時、ダルヴィシュ・ガーウ Darwish Gāw という名のアンディジャーの貴人の1人が不適當な事を云ったというので法に処せられた。この処刊によって全ての人々が衝撃を受けた。

私はホージャ・カーズィーとホージャ・フサイン Khwāja Ḥusayn の子のウズン・ハサン Uzun Ḥasan を使者として派遣し、おおむね次のごとく〔スルターン・アフマド・ミールザーに〕伝えた：この地方に、あなたは御自身で自らの配下の中から1人を選んで〔統治者として〕置かれるであります。私はあなたの配下でもあり息子でもあります。もしあなたがこの奉仕を私に委ねられるならば、事態はよりよく、またより安らかに落着する事でありましょうと。

スルターン・アフマド・ミールザーは言葉数の少い、素朴な、男性的な人物であった。どのような意見・議論 (söz ön) も、どのような仕事 (ish küch) もベグたち抜きでは決定されなかった。ベグたちは〔私の〕この申し出に理解を示さず、厳しい回答をして、さらに前進した。至高の神——その自らなる全能で私のあらゆる事柄を常に人の助けをかりず、正しい方向に導いて下さったお方——はここにおいても幾つかの事態を引起こされた。つまり敵方はこの遠征に厭気がさした——というよりむしろこの〔フェルガーナ制圧の〕計画を後悔して、望みを達する事なく退却した。この時起こった1つの事柄は次の如くであった：クバーには危険な所の多い黒河 (Qara suyu) があった。橋以外の所
17a では渡れなかった。〔敵の〕大軍が(17a) 来て、橋の所で押され、多くの馬やらくだがこの黒河に落ちて死んだ。これより3～4年前、彼らはチル川の渡りで敗北を喫していた。この出来事はそれを思い出させて、兵士たちに怖れが充満した。もう1つは、その時馬が死をもたらすおそろしい病気 (öläti) にかかり、群ごとに倒れて死に始めるという事が起こった。さらにもう1つは、彼らが、我々の兵も民も、生命身体に最後の息や力が残っている限り命をささげる事をものともせぬ程心を1つにして団結しているのに気づいた事であった。以上のような理由から、敵はやむを得ずアンディジャーの1ユガチの所からダルヴィシュ・ムハンマド・タルハン Darwish Muḥammad Tarkhān を派遣して来た。〔城の〕中からはハサン・ヤークーブ Ḥasan Ya‘qūb がナマーズ・ガーフの

近くに出かけ、会見して、和平の如きもの (*ṣulḥgūna*) をとりきめて、2 人共に帰った。

ホジャンド川の北側を進んでいたスルターン・マフムード・ハーンが来てアフシを囲んだ。〔バーブルの弟の〕 ジャハーンギール・ミールザーがそこにいた。ベグではアリー・ダルヴィシュ・ベグ、ミールザー・クリー・キューケルダシュ *Mīrzā Qulī Kōkāldash*, ムハンマド・バーキル・ベグ *Muḥammad Bāqir Beg*, シャイフ・アブドゥッラー・イシクアーガー *Shaykh ‘Abd Allāh ishik-āghā* がアフシにいた。ヴァイス・ラーガリー, ミール・ギヤース・タガーイもそこにいた。〔ヴァイスとミール・ギヤースは〕 上述のベグたちを怖れて、ヴァイス・ラーガリーの領地 (*wilāyat*) であったカーサーンへ行った。ヴァイス・ラーガリーは〔バーブルのもう 1 人の弟の〕 ナースィル・ミールザーの後見人 (*beg atākā*) であった。この理由からナースィル・ミールザーはカーサーンにいた。

- 17b ハーンがアフシ近郊に到着するとこれらのベグたちはハーンに(17b) 投じ、カーサーンを献上した。ミール・ギヤースはハーンのお側に仕え、ヴァイス・ラーガリーはナースィル・ミールザーをスルターン・アフマド・ミールザーの所へ連れて行った。彼らは〔ナースィルを〕 ムハンマド・マズィード・タルハン *Muḥammad Mazīd Tarkhān* に委ねた。ハーンは、アフシの近くまで来ると何度か戦をしかけたが、成果は全くあがらなかった。アフシにいたベグたちや若党たちはよく命を賭して戦った。この間にスルターン・マフムード・ハーンは病にかかった。戦にも厭気がさしていた。彼は自らの領地〔タシュケンド〕へ帰った。

数年にわたって誰にも頭を下げた事の無いアバー・バクル・ドゥグラト・カーシュガリー *Abā Bakr Dūghlat Kāshgharī* はカーシュガル及びホタン *Khotan* の支配者 (*ḥākīm*) であったが、彼もまた領地を求めてウズケンド近くに来て、城を築き、地方を荒し始めた。ホージャ・カーズィーと全てのベグたちが、行ってカーシュガリーを撃退するために任命された。その近くまでせまった時、カーシュガリーはこの軍隊には敵わぬと見てとって、ホージャ・カーズィーの仲だちで、多くの策略を用いて自由となった。

このような大きな事件が起こった時代に、ウマル・シャイフ・ミールザーの死後に残されたベグたちや若党たちはよく団結して勇敢にその命を賭して戦

った。アフスィから〔ジャハーンギール〕ミールザーの母のスルターン・ベギム Sultān Begim, ジャハーンギール・ミールザー, それにその家族とベグたちがアンディジャーンへ来た。葬儀 (‘azā resmi [慟哭の儀]) をとり行ない, 食物・食料が貧者らにふるまわれた。

- 18a (18a) これらの重要事から解放されると私は軍民の整備と秩序づけに勃頭した。アンディジャーンのハーキム職 (ḥukūmat) と宮廷の長としての権限 (ishik ikhtiyārī) をハサン・ヤークーブに定めた。オシュはカーシム・カウチンに定めた。アフスィとマルギーナーンには, ウズン・ハサンとアリー・ドースト・タガーイーを任命した。オマル・シャイフ・ミールザー配下の他のベグたちや若党にも, それぞれ適当に, 領地 (wilāyat wā yer) や職務 (mawja wā jergā), 俸禄 (wajh-i istiqāmat) を定めた。

〔スルターン・アフマド・ミールザーについて〕

スルターン・アフマド・ミールザーの〔サマルカンドへの〕帰還時, 2～3宿の後, 彼の健康状態が急変して燃えるような熱がでた。彼は, ウラ・テペ近郊の白河 (Aq-su) に到達した時, **899年シャッワール月中旬** [1494年7月], 44歳でこの世を去った。

誕生と系譜 **855年** [1451年], [その父] スルターン・アブー・サーイードが〔サマルカンドの〕王権を獲得した年に誕生した。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの長男であった。母はオルダ・ブガ・タルハン Orda Bugha Tarkhān の娘でダルヴィシュ・ムハンマド・タルハン Darwish Muḥammad Tarkhān の姉であった。ミールザーが大事にしていた妃であった。

- 18b **姿形と習慣** 長身で, 赤褐色のひげの, 赤ら顔の, 肥った人物であった。ひげはあご先にはあったが, 両ほほには (18b) 無かった。非常に雄弁な人物であった。ターバンを当時の流行に従って4つ巻きに巻いて, その端を前の方へまゆ毛の上に置いていた。

品行と生活態度 ハナフィー派に属する正統的な信仰の持主であった。5度の礼拝をおこたる事なく実行していた。酒 (sharab) を飲んでいる時も礼拝をおこたらなかった。〔ナクシュバンディー教団の長〕ホージャ・ウバイドゥッラー猊下に師事していた。〔<p. 23 ホージャ猊下は指導者であり援助者であられた。〔スルターン・アフマドは〕非常に礼儀正しかった。>〕特にホージャ

と相対している際にはそうであった。彼はホージャと同席した際には、決して脚を組んだりしなかった (tizi bir bir tizigä yawutkägän emästur) と云われている。ある時、ホージャ猊下との会合の際、彼はいつもとちがって、脚を組んで (ayaghını yawutkäh) 坐っていた。ミールザーが立ちあがった後、ホージャ猊下がこうおおせられた：ミールザーが坐っていた所を調べて御覧と。そこには〔正座を妨げるような〕骨が1つあったという話だ。

彼は何も読まなかった。文字を知らなかった ('āmī edi)。都市で成長したにもかかわらず、粗野なトルコ人で洗練されていなかった (türk wā sādā edi)。才能には恵まれていなかった。公正な人物であった。ホージャ猊下の門下の人々 (ham-ayagh) の間にいた。ほとんどの重要事項はイスラム法に従って解決していた。約束や言葉に誠実であり忠実であった。決してそれに背く事は無かった。勇敢であった。自分の手を直接下すような事は1度も無かったが。もっとも、若干の戦でその勇敢さの印を示した事があるようだと云う人もある。矢
19a を非常に (19a) 巧みに射た。鴨の形をした的 (ilbasun) にその矢や、ティールゲズ [tīrgāz, 先の分岐した矢] はほとんど全て命中した。ひょうたん形の的 (qabaq) を、射場のあの端この端から〔馬で走り〕入って大抵は射ぬいた。晩年に肥ってからは、きじやうずらをピヤーズィー [piyāzī, 先端のついた矢] で射て、失敗する事は稀であった。鷹匠であった。鷹をしばしば放った。巧みに放った。ウルグ・ベグ・ミールザーの死後、彼ほどの鷹匠の君主はいなかった。

非常な恥かしがりやであった。人ばらいをした時に、親しい者や側近の者たちからですらその足を隠していたという話だ。ひとたび飲み始めると、20～30日間ひき続き飲んだ。ひとたび酒 (chaghır) を離れると、また20～30日間飲まなかった。ひとたび坐ると、宴席に時には1昼夜坐っていた。よく飲んだ。酒を飲まぬ日はやたらに食べた。性格ではけちくさがまさっていた。言葉数の少い、男性的な人物であった。権限はベグたちの手中にあった。

戦争 4度戦った。シャイフ・ジャマール・アルグン Shaykh Jamāl Arghun の弟のニーマト・アルグン Ni'mat Arghun と〔サマルカンド近郊の〕ザーミン Zāmīn 附近のアカル・トゥズィ Aqar Tūzi で戦って勝った。1度はウマル・シャイフ・ミールザーと〔サマルカンド、ウラ・テペ間の〕ハース Khwāsh で戦ってまた勝った。もう1度はタシュケンド近郊のチル川の河畔で

スルターン・マフムード・ハーンと〔対決し〕、〔実際には〕戦闘は無かったに
19b もかかわらず、(19b) モグールの略奪隊が1人2人と〔ミールザーの〕軍の背
後から来て、輜重に手をかけると、かくのごとき大軍が戦をする事も無く略奪
をする事も無く、お互いに相まみえる事も無くして滅ぼされた。多数の兵士が
チル川で溺死した。もう1度はハイダル・キュケルダシュと〔サマルカンド近
郊の〕ヤール・ヤイラク Yār Yaylaq で戦って勝った。

領地 父の与えたサマルカンドとブハーラーであった。シャイフ・ジャマー
ル Shaykh Jamāl をアブドゥル・クドゥース ‘Abd al-Qudūs が殺害した後、
タシュケンドとシャールヒーヤとサイラームを取った。しばし領有した。タシ
ュケンドとサイラームを弟のウマル・シャイフ・ミールザーに与えた。ホジャ
ンドとウラ・テペもしばしスルターン・アフマド・ミールザーに属した。

子供たち 2人の男子が生まれたが夭逝した。5人の娘があった。その内の
4人はカタク・ベギム Qataq [〈p. 24 Qutuq〉] Begim から生まれた。

長女はラービア・スルターン・ベギム Rābi‘a Sultān Begim でカラ・キョ
ズ・ベギム〔黒い瞳の姫〕と呼ばれていた。〔スルターン・アフマド・ミール
ザーは〕自分の在世中に彼女をスルターン・マフムード・ハーンの所へ嫁がせ
た。ハーンの子として1人の男子が生まれた。バーバー・ハーン Bābā Khān
という名で、かなり才に恵まれた王子であったが、ウズベクがハーンをホジャ
ンドで殺害した時に、彼とさらに同様に年齒も行かぬ者たちを殺した。スルタ
20a ーン・マフムード・ハーンの歿後、彼女をジャーニー・ベグ・(20a) スルター
ンが娶った。

2女はサーリハ・スルターン・ベギム Ṣāliḥa Sultān Begim で、アク・ベギ
ム〔白いお姫様〕と呼ばれていた。スルターン・アフマド・ミールザーの死後、
〔弟の〕スルターン・マフムード・ミールザーが式を挙げて長男のスルターン
・マスウード・ミールザー Sultān Mas‘ūd Mīrzā に娶った。後、[〈p. 25 シ
ャー〉]・ベギム、ミフル・ニガール・ハーヌムと共にカーシュガルに捕えら
れた。

3女はアーイシャ・スルターン・ベギム ‘Āysha Sultān Begim であった。
私が5歳の折サマルカンドへ来た際に、人々は彼女を私のいいなづけにした。
後、彼女は私の放浪時代にホジャンドに来て、私は娶った。私がサマルカンド
を2度目に取った時、1人の娘が生まれたが、数日後に神の御許に召された。

「タシュケンドの破滅」より前にその姉にそそのかされて私のもとを去った。

4女はスルターヌム・ベギム *Sultānım Begim* であった。スルターン・アリー・ミールザー *Sultān ‘Alī Mīrzā* が娶っていた。その後、ティムール・スルターン *Timūr Sultān* が娶り、さらにその後はマフディー・スルターン *Mahdī Sultān* が娶った。

最も年下の娘がマースーマ・スルターン・ベギム *Ma‘šūma Sultān Begim* であった。母はアルグン部の出で、スルターン・アルグン *Sultān Arghun* のめいのハビーバ・スルターン・ベギム *Ḥabība Sultān Begim* であった。私が〔1506年に〕ホラーサーンにおもむいた際に、見て、好いて、求婚して、カーブルへ連れて来て娶った。1人の娘が生まれた。まさにその時、産みの苦しみのため神の御許に召された。娘に母と同じ名を付けた。

妻妾たち 第1は〔父の〕スルターン・アブー・サーイードが定めたミフル・ニガール・ハーヌムであった。ユースス・ハーンの長女で、私の母と同腹の
20b 姉 (20b) であった。

次はタルハン部の出身で、タルハン・ベギム *Tarkhān Begim* と呼ばれていた。

次はカタク・ベギム *Qataq Begim* で、このタルハン・ベギムの乳姉妹 (*kökāldash*) であった。スルターン・アフマド・ミールザーが恋して娶った。非常に愛されていた。まことにぬきん出ていた。酒 (*chaghır*) を飲んだ。彼女の在世中は、スルターン・アフマド・ミールザーは他の妻たちの所へは行かなかった。〔彼は〕最後には彼女を殺し、〔自分を〕悪い評判から解放した。

次はハーンザーダ・ベギム *Khānzāda Begim* で、テルミズ *Termidh* の王家の出であった (*Termidh khānzādalarıdın edi*)。私が5歳の折、サマルカンドのスルターン・アフマド・ミールザーのもとにおもむいた時、彼が娶っていた。まだ顔にヴェールをつけていた。トルコ人の習慣に従って私にそれを取るように命じられた。私はヴェールを取った。

次はアフマド・ハージー・ベグ *Aḥmad Ḥajji Beg* の娘の子で、ラティーフ・ベギム *Laṭīf Begim* という名であった。ミールザーの死後、ハムザ・スルターン *Ḥamza Sultān* が娶った。ハムザ・スルターンの子として3人の男子が生まれた。私がハムザ・スルターン、ティムール・スルターンをはじめとするスルターンたちを破り、ヒサールを取った時、この2人の王子たちとさらに数

人の王人たちが私の手に落ちた。私は全員を釈放した。

次はハビーバ・スルターン・ベギム Ḥabība Sultān Begim で、スルターン・アルグンのめいであつた。

アミールたち ジャーニー・ベグ・ドウラダイ Jānī Beg Dawladay がいた。スルターン・マリク・カーシュガリー Sultān Malik Kāshgharī の弟であつた。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーはサマルカンドのハーキム職 21a (ḥukūmat) を、またスルターン・アフマド・ミールザーは自らの宮廷の (21a) 長としての権限 (öz ishikining ikhtiyārī) をこの人物に与えた。かわった品行と生活態度の人物だったらしい。彼については面白い話が沢山ある。その1つはこうである。彼がサマルカンドのハーキムであつた時、ウズベクから使者が来た。ウズベク・ウルスでこの使者は力 (zūr) で有名だったという。ウズベクは力士 (zūr kishi) の事をブケ (bökö) と云ったという。ジャーニー・ベグはこう云った。「お前はブケか？ もしブケならば、さあ来い。一戦交えよう」。この使者がどんなに辞退しても許さず組み合つた。ジャーニー・ベグが投げ倒した。男性的な人物だった。

次はアフマド・ハージー・ベグ Aḥmad Ḥājī Beg であつた。スルターン・マリク・カーシュガリーの息子で、ヘラートのハーキム職をスルターン・アブー・サーイード・ミールザーがしばらくこの人物に与えていた。そのおじのジャーニー・ベグの死後、〔彼に〕その職務を与えて、サマルカンドに派遣した。気の良い男らしい人物であつた。ワファイー Wafā'ī をペンネームにしていた。詩集 (dīwān) の著者であつた。彼の詩は悪くなかつた。この句は彼のものである。

酔うた、酔うた、おお見まわり役さんよ、今日のところは見のがしておくれ。

正気だとわかる日に、どうか私を調べておくれ。

ミール・アリー・シール・ナヴァーイーは、ヘラートからサマルカンドに来た時には、アフマド・ハージー・ベグと共にいた。〔ナヴァーイーは〕スルターン・フサイン・ミールザー Sultān Ḥusayn Mīrzā の即位後、ヘラートに来て、非常な寵愛を受けた。アフマド・ハージー・ベグはすばらしい俊馬 21b (topchaq) を飼育して (21b) いた。この俊馬はほとんどが自家産であつた。男らしい人物であつたが、指導者としての資質は、男らしさ程ではなかつた。

構わぬ人物であった。仕事 (ish küch) は配下の者たちがとりしきっていた。バイスングル・ミールザー Baysunghur Mirzā がスルターン・アリー・ミールザーとブハーラーで戦って敗れた時、彼は捕虜になった。ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンの血の問責〔一族の死に対する復讐〕によって、彼は不名誉なやり方で殺された。

次はダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンであった。オルダ・ブガ・タルハンの子で、スルターン・アフマド・ミールザー、スルターン・マフムード・ミールザーの同腹のおじ〔母方のおじ〕であった。ミールザーのもとで、全てのベグたちより強大で、尊敬を集めていたのがこの人物であった。敬虔なムスリムで、男らしい、ダルヴィシュ・タイプの人物であった。いつも『コーラン』を筆写していた。チェス (shaṭranj) をよくしていた。うまく指した。鷹についての学問もよく知っていた。鷹を巧みに放った。最後はバイスングル・ミールザーとスルターン・アリー・ミールザーの確執の際に、その最も盛んな時期に (ulughlugh zamānıda), 悪名を得て死んだ。

次はアブドゥル・アリー・タルハン ‘Abd al-‘Alī Tarkhān で、ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンの近親者であった。その妹もこの人物〔アブドゥル・アリー〕の所にいた。彼女がバーキー・タルハン Bāqī Tarkhān の母であろう。ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンが慣習法 (törä) と地位とによれば、この人物より上であったにもかかわらず、このファラオ (fir’a‘ūn) 〔アブドゥル・アリー〕は彼を歯牙にもかけなかった。数年間、ブハーラーのハーキム職を (22a) この人物が占めた。従者は3,000人に達した。従者を慈しみをもってよく世話していた。彼のほどこし (bakhshish), 表敬訪問 (pursish), 謁見 (dīwān), 執務室 (dastgāh), 宴会 (shilān), 集まり (majlis) はまるで君主の如くであった。厳格な、暴君的な、好色の、傲慢な人物であった。シャイバーニー・ハーンはその従者 (nökār) ではなかったが、しばらくこの人物の所にいた。大小のスルターンたちですら、多くの者がその従者になっていた。シャイバーニー・ハーンがかくも上昇する事ができたのは、またかくも古い家柄の人々が没落したのは、アブドゥル・アリー・タルハンの故であった。

次はサイイド・ユースフ・オグラクチ Sayyid Yūsuf Oghlaqchı であった。その祖父はモグールの出身であったようだ。彼の父をウルグ・ベグ・ミールザーが寵愛した。その意見や判断はすこぶるすぐれていた。男らしさもそなえて

いた。コブズ (qobuz) [ギター] を巧みに演奏した。私が最初にカーブルに来た時、私のもとにいた。私は非常に目をかけていた。まことに寵愛にふさわしい働きもした。私が最初の年にヒンドゥースターンにむけ出馬した際、サイイド・ユースフ・ベグをカーブルに残した。まさにその時彼は神の御許に召された。

次はダルヴィシュ・ベグ Darwish Beg であった。ティムール・ベグが目をかけたエギュ・ティムール・ベグ Egü Tīmūr Beg の子孫であった。ホージャ猊下に師事していた。音楽の知識では名を知られた存在であった。楽器も演奏した。詩才が (22b) あった。スルターン・アフマド・ミールザーがチル川の河畔で敗北を喫した際、チル川へ落ちて逝った。

次はムハンマド・マズィード・タルハン Muḥammad Mazīd Tarkhān で、ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンの同腹の弟であった。数年の間、トゥルクスターンのハーキムであった。シャイバーニー・ハーンがトゥルクスターンを彼から奪った。意見・忠告はすぐれていた。憚る所のない色好みであった。私がサマルカンドを2度目及び3度目に取った際、私のもとに来ていた。私は大いに目をかけた。[1512年のブハーラー近郊でのウズベクとの] キョリ・マリク Kōl-i Malik の戦いで死んだ。

次はバーキー・タルハン Bāqī Tarkhān で、アブドゥル・アリー・タルハンの子で、スルターン・アフマド・ミールザーの〔父方の〕おばの子〔いとこ〕であった。父の死後、ブハーラーを与えられていた。スルターン・アリー・ミールザーの時代にすこぶる強大となった。〔彼の〕従者は6,000人に達した。スルターン・アリー・ミールザーにさほど服従していなかった。シャイバーニー・ハーンと〔ブハーラー近郊の〕カーライ・ダブースィ Qal'a-yi Dawūsī で戦って敗れた。この勝利の結果シャイバーニー・ハーンは進んで〔1500年〕ブハーラーを取った。鷹を非常に好んでいた。700羽の鷹を所有していたとも云われる。特記すべき品行や生活態度は無かった。王子にふさわしく、光輝につつまれて成長した。彼の父がシャイバーニー・ハーンにかつてよくした事があるという理由からシャイバーニー・ハーンのもとへ行った。しかしかの義を知らず、慈しみ心の無い人物は、かつて自らにかけられたあの種々のなさけに対する見返りとして、(23a) いかなる寵愛もなさけも、彼に授けようとはしなかった。彼は鬱鬱として楽しまぬ不遇の内に、アフスィ地方でこの世を去った。

次はスルターン・フサイン・アルグン *Sultān Ḥusayn Arghun* で、しばらくカラ・キョル *Qara Köl* のハーキム職についていたのでスルターン・フサイン・カラキョリーとして知られていた。その意見・忠告はすこぶるよかった。私のもとにも、しばしば滞留した。

次はクリー・ムハンマド・ブグダー *Qulī Muḥammad Bughdā* [*<p. 29 Baghdādī>*] でカウチンであった。男らしさを所有していた。

次はアブドゥル・カリーム・アシュリト *‘Abd al-Karīm Ashrit* でウイグル族 (*Uyghur*) であった。スルターン・アフマド・ミールザーのもとでイシク・アーガー (*ishik-āghā*) であった。心のひろい男らしい人物であった。

スルターン・アフマド・ミールザーの歿後、ベグたちは衆議一決して、山道を通して〔ヒサールの〕スルターン・マフムード・ミールザーの所へ人を走らせて、〔サマルカンドに〕来るように求めた。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの兄マヌーチフル・ミールザーの子マリク・ムハンマド・ミールザー *Malik Muḥammad Mīrzā* は、王権をねらって、若干のごろつき・ならず者たち (*lawand wā awbāsh*) を自分のもとに集め、オルドゥ (*ordu* [軍営]) を離れた。彼はサマルカンドへ来たが何事も為しえなかった。そしてそれが彼自身とさらに若干の罪無き王子たちの死の原因となった。

スルターン・マフムード・ミールザーにこの知らせがとどくと、彼はただちにサマルカンドに来て何の困難も無く王位についた。しかしスルターン・マフムード・ミールザーのいくつかの所業の故に、貴賤を問わず、また兵たると民たるとを問わず、〔皆〕厭気がさして彼のもとを離れていった。その所業の第
23b 1 は次の如くであった。彼は、(23b) 父方のおじの子であり、また自らの女婿でもあった前述のマリク・ムハンマド・ミールザーと、さらに別の4人のミールザーを〔サマルカンドの内城内の〕キョク・サライー (*Kök sarāy*) [「青の宮殿」] に送った。そしてその内の2人を幽閉し、マリク・ムハンマド・ミールザーともう1人のミールザーを殺害した。この内の何人かは、王権に対する権利はまったく無かったし、また王権を取ろうとする意図ももともと持っていなかった。マリク・ムハンマド・ミールザーにはあのような罪があったが、もう1人のミールザーには何の罪も無かった。

所業の第2は以下の如くである。彼の行政と法規制 (*ḍabt wā tuzuk*) はまこ

とによかった。財務 (dīwān) もイスラーム法に適っていた。帳簿についての学 (siyāq ‘ilmi) も身につけていた。しかしその性格は圧制と不道德の傾向を持っていた。サマルカンドへ入るや否や、従来とは異った法規、とりきめ (tartīb wā nasaq), 租税や傭役 (kharj wā taḥmīl) を確立し始めた。以前には、租税とか傭役に関して多くの貧しき人々が、その保護によって圧制と不正から解放されていたホージャ・ウバイドゥッラー猊下の一党の人々に対しても——あの方々にこの様な義務が課せられるとは、いかなる根拠に基づくものであろうか——多くの不正と苛斂が行使され始めた。というより、この不正と苛斂がホージャの御子息らにまでも侵透したのである。

第3は、彼自らが暴君で色好みであったように、大小のbegたち (beg wā begchā) や従士・従者たち (nōkār wā sawdar) も全て暴君で好色であった。ヒサル人、特にホスロー・シャーの属下の者たちは常に酒と不義に没頭していた。1度などはホスロー・シャーの従士の1人がある男の妻を力づくで連れ
24a 去った。この女 (24a) の夫がホスロー・シャーの所に来て正義を求めた。ホスロー・シャーはこう答えた：「あの女は何年もお前と一緒にいたのだらうに。数日ぐらひはあの男と一緒におらせたらどうだ」と。

次はこの事である。市民たちも商人たちも (shahrī wā bāzārī), それのみならずトルコ人や軍人たちのまだひげもはえていない若者たちは、稚児 (chuhra) にされる事を怖れて家から出ようとしなかった。

サマルカンドの人々は、20～25年の間、スルターン・アフマド・ミールザーの時代に、平安にのんびりと日を過ごしていた。ほとんどの事柄は、ホージャ猊下のおかげで、公正に法に従って解決されていた。しかし今や彼らはかくの如き悪政と墮落のために、身も心も傷つき苦しめられていた。貴賤を問わず、また貧富を問わず、皆が呪詛を口にして、拳をふりあげた。

胸の内なるいたみに心せよ。

内なる傷はやがて顕わとなるであろうから。

できうる限り心を悩ませる事なかれ。

1つのため息は世界をすら悲嘆の底に沈ませるであろうから。

〔サーディー『ゴレスターン』第1章第26話〕

結局、その暴政と墮落についての悪評の故に、彼がサマルカンドを支配したのは、5～6カ月を越えなかった。

[900年/1494年10月2日—1495年9月20日/の出来事]

私のもとにスルターン・マフムード・ミールザーの所からアブドゥル・クドゥース・ベグ ‘Abd al-Qudūs Beg という名の使者が到着した。〔スルターン・マフムードの〕長男のスルターン・マスウッド・ミールザーに、兄のスルターン・アフマド・ミールザーのアク・ベギムという名の2番目の娘を、祝宴・儀式 (toy wā ā’in) と共に娶った時の引出物 (sachiq) を持って来たのであった。金と銀でアーモンドとピスタチオ (pista) の形を作っていた。この使者は〔私の宮廷の長である〕ハサン・ヤークーブの親族であつたらしい。彼は種々の約束を与えて、ハサン・ヤークーブをミールザーに会わせるために (24b) 来たようであった。〔ハサンは〕いいのがれを云って、と云うより、あちら側についた如くにして使者を帰らせた。

5～6カ月後、ハサン・ヤークーブの態度がすっかり変って、私の近くにいる者たちに対して悪行を為し始めた。事を私にまで及ぼし、私を去らせて、〔私の弟の〕ジャハーンギール・ミールザーを君主 (pādishāh) にしようとしていた。ハサン・ヤークーブの、他のアミールや兵士らとの関係もよくなかった。全ての者たちが、彼のこの意図に気づいていた。ホージャ・カーズィーとカースィム・カウチンとアリー・ドースト・タガーイーとウズン・ハサンとその他若干の私に好意をよせる人々は、私の〔母方の〕祖母のイセン・ドウラト・ベギムの前に集まって、ハサン・ヤークーブを倒し、反乱をしずめたいと申し上げた。女性たちの中で、意見・判断において私の祖母のイセン・ドウラト・ベギム程の者は稀であつたであろう。彼女はまことに聡明で思慮深かった。多くの公務 (ish küch) はあの方の意見を聞いて行なわれていた。

ハサン・ヤークーブは内城 (ark) にいた。私の母と、祖母のイセン・ドウラト・ベギムは外城 (tash qurghan) の堡壘 (chaqar) の所にいた。この意図をもって私は乗馬して、内城へと進んだ。ハサン・ヤークーブは鷹狩りに出かけていたらしい。知らせを聞くとその場からサマルカンド (25a) 方面へとむかった。彼と共にいた全ての兵士やベグたちを捕えさせた。捕えられたベグの中には、ムハンマド・バーキル・ベグとスルターン・ムハンマド・ドウラダイの父のスルターン・マフムード・ドウラダイがいた。さらに数人の者たちもい

た。何人かを私はサマルカンドにむけ去る事を許した。宮廷長の権限 (ishik ikhiyārī) とアンディジャーンのハーキム職はカーシム・カウチンに定められた。ハサン・ヤークーブはサマルカンドをめざしてカンディ・バーダームまで行っていた。数日後、邪まな考えをいだいてアフスィにむかい、ホーカーン地区 (Khōqān örchin) [ホーカーンは現在のコーカンド] の近郊に来た。それを知ると、私は若干のベグたちと若党たちを彼にむけ派遣した。先鋒のベグたちは、彼ら自身よりさらに先行すべく 1 にぎりの若党たちを物見に派遣した。ハサン・ヤークーブはそれを知ると、夜と共にこの物見のため本隊と離れた若党たちの所にむかって行き、[彼らが利用していた] 牛小屋 (oy müngüzi) を囲んで矢を射かけた。暗い夜で、自軍の兵の矢がハサン・ヤークーブの脊椎の下部に当たり、彼は脱出する前に、自らの行為の擒となった。

悪しき業を為せば、不幸よりまぬがれうと思う事なかれ。

報復は自然のおきてであるが故に。

〔ニザーミー『ホスローとシーリーン』〕

この年、私は疑わしい食物を避け始めた。ナイフ、スプーン、テーブルクロス (dastār-khwān) にまで大丈夫かと注意を払った。就寝後の礼拝 (tahajjud) 25b をおこたる事も稀と (25b) になった。

〔スルターン・マフムード・ミールザーについて〕

ラビーウル・アーヒル月 [1495年 1月]、スルターン・マフムード・ミールザーは重い病いにかかり、6日でこの世を去った。43歳であった。

誕生と系譜 857年 [1453] 生まれであった。スルターン・アブー・サーイド・ミールザーの第3子で、スルターン・アフマド・ミールザーと母を同じくしていた。

姿形と習慣 短身で、薄いひげの、肥った、やや不均衡な人物であった。

品行と生活態度 すぐれていた。礼拝をおこたらなかった。法規制・行政もまことによかった。帳簿に関する学問を非常によく知っていた。彼の領地から、1ディラム (diram)、1ディーナール (dīnār) といえども、彼の知らぬままに出て行くという事は全く不可能であった。従士らの俸禄 (‘ulūfa) も滞る事が無かった。その会合、ほどこし、宴会、謁見はまことによかった。全ては、法と規制によって治められていた。彼が定めたいかなる規則・とりきめであれ、

兵も民も決してそれを破る事はできなかった。

以前にはすこぶる鷹に熱を入れていたようだ。後には追い立てられた獣を多く狩っていた。圧制と墮落を熱愛した。酒をひき続き飲んでた。小姓を多数身近においていた。その領内に美しい若者がいると、あらゆる手を使って連れてきて稚児にしていた。彼のベグたちの息子たちや、彼の息子たち〔王子たち〕
26a (26a) の配下のベグたち、そればかりか、彼の乳兄弟たちをすら稚児にしていた。いやそれに止まらず、自分の乳兄弟から生まれた者たちにすらもこの奉仕を命じていた。この厭うべき行為は彼の時代に大いに広がり、稚児を持たぬ男は全くいない程であった。稚児を世話する事を徳とし、稚児を持たぬ事を恥ずべき事としていた。彼の圧制と墮落という悪しき星のもとに生まれたが故に、彼の王子たちは全て若死した。

詩才はあった。詩集を編んでいた。しかしその詩は全く弱く、味が無かった。あのような詩であれば、作るより作らぬ方がましであった。

悪しき信仰の男であった。ホージャ・ウバイドゥッラー猯下を軽んじていた。肝のすわらぬ男であった。謙虚さに乏しかった。若干の道化人やでしゃばりな取巻の間にいた。彼らは会議の席ですら人々の前でいかがわしくみだらな行為をしていた。うまく物の云えぬ男で、その言葉をただちに理解する事は不可能であった。

戦争 2度戦い、2度ともスルターン・フサイン・ミールザーとの戦であった。1度はアスタラーバード Astarābād で敗北した。次はアンドゥホード Andkhūd 近郊のチェクメン Chekmān という所でまた敗北した。2度、バダフシャーンの南方のカーフィリスターン Kāfiristān に聖戦におもむいた
26b (barıp ghazāt qıldı)。このため (26b)、その指令書の花押 (farāmīning toghrası) にはスルターン・マフムード・ガーズィー Sultān Maḥmūd Ghāzī [ガーズィーは「異教徒の征服者」の意] と記されていた。

領地 スルターン・アブー・サーイード・ミールザーはアスタラーバードを与えた。イラクでの事件〔1469年におけるアブー・サーイードの敗死〕の際、彼はホラーサーンへ来た。その際、ヒサールのハーキムであったカンバル・アリー・ベグ Qanbar ‘Alī Beg はスルターン・アブー・サーイード・ミールザーの命によりヒンドゥースターン軍をひきいて、イラクにむけミールザーの後方を進んでいた。彼はホラーサーンに到達すると、スルターン・マフムード

・ミールザーに加わった。スルターン・フサイン・ミールザーの到着の噂を聞くや否やホラーサーンの人々はスルターン・マフムード・ミールザーを攻撃して、ホラーサーンから退却させた。彼はサマルカンドのスルターン・アフマド・ミールザーのもとに来た。数カ月後、アフマド・ムシュターク *Aḥmad Mushtāq* をはじめ、サイイド・バドル *Sayyid Badr*, ホスロー・シャーそれに若干の若党たちはスルターン・マフムード・ミールザーを連れて逃亡し、ヒサールのカンバル・アリーカニバル・アリーの所へ来た。

それ以来、クフカ *Quhqa* [鉄門] とコーフティーン山脈 *Kōhtīn taghī* の南側の諸地方、例えばティルミズ、チャガーニーヤーン *Chaghānīyān*, ヒサール、フッタラーン、クンドゥーズ *Qundūz*, バダフシャーンの諸地方は、ヒンドゥー・クシュ山脈 *Hindū kush taghī* に至るまでスルターン・マフムード・ミールザーの支配下にあった。兄のスルターン・アフマドの死後、兄の領地もこの人物の支配下に入った。

子供たち 5男11女あった。長男はスルターン・マスウード・ミールザーで、
27a その母は (27a) ミーリ・ブズルグ・ティルミズィー *Mīr-i Buzurg Tirmidhī* の娘であった。次男はバイスングル・ミールザー *Bāysunghur Mīrzā* で、その母はパシャ・ベギム *Pasha Begim* であった。3男はスルターン・アリー・ミールザー *Sultān ‘Alī Mīrzā* で、その母はウズベク出身の側女 (*ghuma*) のズフラ・ベギ・アーガー *Zuhra Begi Āghā* であった。4男はスルターン・フサイン・ミールザー *Sultān Ḥusayn Mīrzā* で、その母はミーリ・ブズルグの孫のハーンザーダ・ベギム *Khawānzāda Begim* [*<p. 34 Khānzāda Begim>*] であった。彼は〔父〕ミールザーの在世中に13歳で神の御許に召された。5男はスルターン・ヴァイス・ミールザーで母はユースス・ハーンの娘で、私の母の妹にあたるスルターン・ニガール・ハーヌムであった。この5人の王子たちの諸情況についてはこの史書の〔関係のある〕年の出来事の記述の中で述べられる予定である。

3人の娘たちがバイスングル・ミールザーと同腹であった。スルターン・マフムード・ミールザーは長女をおじのマヌーチフル・ミールザーの子のマリク・ムハンマド・ミールザーのもとに嫁に出していた。

〔ここに、ハイダラーバード写本では、約3行分に相当する空白部分がある〕。

さらに5人の娘がミーリ・ブズルグの孫のハーンザーダ・ベギムから生まれた。最年長の娘を人々はスルターン・マフムード・ミールザーの歿後、アバ
27b ー・バクル・カーシュガリーに (27b) 与えた。2番目はベガ・ベギム Bega Begim である。スルターン・フサイン・ミールザーがヒサルを包囲した際、スルターン・アブー・サイード・ミールザーの娘のパーヤンダ・スルターン・ベギム Pāyanda Sultān Begim より生まれたハイダル・ミールザー Ḥaydar Mīrzā という名の自分の息子のために彼女を娶って、和を結び、ヒサルを離れた。3番目は、カザク・ベギム Qazaq Begim [＜p. 34 Aq Begim＞] であった。4番目の娘は、＜p. 34 アイ・ベギム Ay Begim＞でスルターン・フサイン・ミールザーがクンドゥズに来た際、〔フェルガーナの、バーブルの父〕ウマル・シャイフ・ミールザーがジャハーンギール・ミールザーをアンディジャーンの兵と共に援軍として派遣した機会に、彼女はジャハーンギール・ミールザーのいいなづけとなった。910年〔1504/1505年〕に、アム川 Amū daryāsī の河畔で、バーキー・チャガーニーヤーニー Bāqī Chaghānīyānī が私の所に来て仕えた際、このベギムたちはその母と一緒にティルミズにいた。この人たちもバーキー・チャガーニーヤーニーの家族と共に来て加わった。彼女が〔カーブルの北方の〕カフマルド Kahmard に来た時、ジャハーンギール・ミールザーが娶った。1人の小さな娘が生まれた。この子は現在、祖母のハーンザーダ・ベギムと一緒にバダフシャーン地方にいる。5番目の娘はザイナブ・スルターン・ベギム Zaynab Sultān Begim で、私がカーブルを征服した時、私の母のクトゥルク・ニガール・ハーヌムの力添えで私が娶った。あまりうまくゆかなかった。2～3年後に天然痘の病でこの世を去った。

さらにもう1人の娘がマフドゥマ・スルターン・ベギム Makhdūma Sultān Begim で、スルターン・アリー・ミールザーの同腹の姉であった。現在はバダフシャーン地方にいる。

28a さらに2人の娘が愛人 (ghunchachi) から生まれた。1人 (28a) の名はラジャブ・スルターン Rajab Sultān で、もう1人の名はムヒッブ・スルターン Muḥibb Sultān である。

妻妾たち 大ハトゥン (ulugh khatun) はミーリ・ブズルグ・ティルミズィーの娘のハーンザーダ・ベギムであった。ミールザーは大変彼女を愛していた。スルターン・マスウード・ミールザーの母であった。彼女が歿するとミールザ

ーはすこぶる慟哭した。

彼はその後、ミーリ・ブズルグの孫娘で、このハーンザーダ・ベギムのめい〔兄弟の子〕に当る女性を娶った。彼女もハーンザーダ・ベギムと呼ばれていた。5女1男の母であった。

次はパシャ・ベギムで、黒羊朝 (Qara qoyluq) のバハールルー部族 (Bahārlū aymaghı) の、トゥルクメン人のベグの1人であるアリー・シュクル・ベグ ‘Alī Shukr Beg の娘であった。彼女を黒羊朝のジャハーン・シャー・ミールザー・バーラーニー Jahānshāh Mīrzā Bārānī の子のムハンマディー・ミールザー Muḥammadī Mīrzā が娶っていた。アーザールバーイジャーニ Ādhārbāijān とイラクを、このジャハーン・シャーの子供たちから白羊朝 (Aq qoyluq) のウズン・ハサン Uzun Ḥasan が奪った時、アリー・シュクル・ベグの息子たちは、4～5,000帳の黒羊朝トゥルクメン人らと共に、スルターン・アブー・サーイードのもとに来て仕えた。スルターン・アブー・サーイードが〔ウズン・ハサンに〕敗れると、彼らはこちらの諸地方に下馬した。スルターン・マフムード・ミールザーがサマルカンドからヒサルに來た時、彼らはスルターン・マフムード・ミールザーに仕えた。その時、このパシャ・ベギムをミールザーが娶った。1男3女の母であった。

次はスルターン・ニガール・ハーヌムで、その出身については〔モゲールの〕ハーンたちの諸事件を述べた際〔11b-12a〕にすでに詳述した。

28b 側女・愛人たち (ghuma vā ghunchachi) (28b) も多数いた。有力な側女はズフラ・ベギ・アーガーでウズベクの出であった。1男1女の母であった。愛人も多かったが、その内の1人から前述〔28a〕の如く2人の娘が生まれた。

アミールたち ホスロー・シャーがいた。トゥルクキスタン生まれのキプチャク族の出身であった。若い頃、タルハン族のベグたちの身近に仕えていた。と云うよりまことは<p. 36 その稚児であった>。その後、マズィード・ベグ・アルグンの従者 (nökār) となった。あらゆる点で目をかけられた。〔1469年の〕イラクの破滅の際、スルターン・マフムード・ミールザーに加わり、道中でいくつかの価値ある奉仕をしたため、スルターン・マフムード・ミールザーが寵愛した。後、すこぶる強大となった。まさにスルターン・マフムード・ミールザーの時代、彼の従者は5～6,000人に達していた。アム川からヒンドゥークシュ山脈に至る諸地方は、バダフシャーンを除き、全て彼の属領であっ

た。しっかりと把握された土地 (dar bast yer) であった。その宴会はすばらしく、その施しも同様であった。トルコ人的な、猛烈な誅求者であったが、取った物はまたよくばらまいた。スルターン・マフムード・ミールザーの歿後、その息子たちの時代にはいよいよ強大となり、その従者は20,000人に近かった。礼拝を行ない、疑わしい食物はひかえていたが、腹黒くみだらであった。愚かな、
29a 知恵のない、忠誠心にかけた、(29a) 恩知らずの男であった。5日を過ぎずすぎぬこの世〔仮の宿にしか過ぎぬこの世〕のために、彼は自分を大きくしてくれた恩人〔スルターン・マフムード・ミールザー〕の子〔スルターン・マスウッド・ミールザー〕を盲にした。さらにもう1人〔バイスングル・ミールザー〕を殺した。彼は神の前では罪多く、人に対しては神に見放されたる者となっていた。また最後の審判の日の間際に至るまで、呪い呪詛すべき人物となった。彼はこのはかない現世のためにこのような悪しき事どもを為した。そしてかくも繁栄した領地とかくも多くの武装した従士らを持ちながら、遂に1羽のめん鳥とすら相まみえる事が無かった。〔それらについては〕この史書の中で述べられる予定である。

次はムハンマド・イルチ・ブガ Muḥammad Ilchi Bugha で、カウチン部の者であった。バルフ門での〔ミール・ピール・ダルヴィシュ〕ハザール・アスビー Hazār-asbī との戦では、スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの面前で、〔どちらが勝つかを〕賭けて (da‘wā bilā) なぐり合った。男らしい人物であった。ミールザーに常に仕え、ミールザーは彼の意見をもとに行動していた。スルターン・フサイン・ミールザーがクンドゥズを包囲した時、ホスロー・シャーに対する競走心から、少数の者と共に、甲冑もつけず、考えもねらずに夜襲をかけた。何も出来なかった。あのような大軍に対して、何を為しうるであろうか。その後を追跡者が追った。川に身を投じ溺死した。

次はアイユーブ Ayyūb であった。スルターン・アブー・サーイードのもとでホラーサーン小姓軍団の一員として仕えていた。男らしい人物であった。バイスングル・ミールザーの後見人 (beg atākā) であった。衣食に金をかけていた。ひょうきんな口数の多い人物であった。スルターン・マフムード・ミールザーは (29b) 「恥知らず」 (bī-ḥayā’) と呼んでいたようだ。
29b

次はワリー Wali であった。ホスロー・シャーの同腹の弟であった。従者をよく世話していた。スルターン・マスウッド・ミールザーの眼が盲にされ、ま

たバイスングル・ミールザーが殺されたのは、この男の故であった。彼はあらゆる人の悪口を云っていた。口が悪く口ぎたない利己的な愚かな小者であった。自分以外のいかなる者をも、いかなる事柄においても尊重しなかった。〔1504年〕私がクンドゥズ地方から来て、ドゥーシー Dūshī 近郊でホスロー・シャーをその従士・従者たちから切り離して退去を許した時、彼もまたウズベクに対する恐怖心からアンダラーブ Andarāb とシーラーブ Shīrāb に来ていた。その近辺にいた者たちは、彼の諸部族 (aymaqlar) を攻撃して略奪し、私達をめざすと云ってカーブルに来た。ワリーはムハンマド・シャイバーニーの所へ行った。〔シャイバーニーは〕サマルカンド城内で彼の首を打たせた。

次はシャイフ・アブドゥッラー・バルラース Shaykh ‘Abd Allāh Barlās であった。シャー・スルターン・ムハンマド〔バダフシー〕の娘の1人がこの人物の所にいた。彼女はアバー・バクル・ミールザー〔カーシュガリー〕とスルターン・マフムード・ハーンの母方のおば (khala) に当るであろう。彼は衣服を優美にぴったりと身につけていた。男らしい優雅な人物であった。

次はマフムード・バルラース Maḥmūd Barlās で、〔ヒサール地方の〕スンダク Nūndāk のバルラース部の出身であった。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーのもとでもベグであった。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーにイラクの諸地方が征服された時、〔ミールザーは〕キルマーン Kirmān をマフムード・バルラースに与えた。アバー・バクル・ミールザー
30a に (30a) マズィード・ベグ・アルグンと黒羊朝トゥルクメン族のベグたちが加わって、スルターン・マフムード・ミールザーにむけてヒサールに来た時、スルターン・マフムード・ミールザーは兄のもとサマルカンドへ行った。マフムード・バルラースはヒサールを〔彼らに〕与えずよく守った。詩人であった。詩集を編んでいた。

スルターン・マフムード・ミールザーの死後、ホスロー・シャーはこの出来事を入々から隠し、財宝に手をのばした。このようなニュースがどうして漏れないでいようか。ニュースはたちまち城内の人々にひろまった。サマルカンドの人々にとって、その日は大祭の日になっていた。軍人も市民もホスロー・シャーを襲撃しようとした。しかしアフマド・ハージー・ベグとタルハン族のベグたちが暴動をしずめ、ホスロー・シャーを脱出させてヒサールまで同行した。

スルターン・マフムード・ミールザーはその生存中に、長男のスルターン・マスウッド・ミールザーにヒサルを与え、バイスングル・ミールザーにブハーラーを与え、この2人の王子たちを領地へおもむかせていた。この事件の際、誰も〔サマルカンドに〕いなかった。

ホスロー・シャーを脱出させた後、サマルカンドとヒサルスのベグたちは一致してブハーラーに、バイスングル・ミールザーの所へ人を派遣し、連れて来て、サマルカンドの王座に即かせた。バイスングル・ミールザーは即位の時、18歳であった。

この時に当り、〔モグールの〕スルターン・マフムード・ハーンはジュナイド・(30b) バルラースとサマルカンドの若干の有力者たちの言葉に従って、サマルカンド征服をめざして兵をひきいてカンバーイ Kanbāy 近郊に到着した。サマルカンドからもバイスングル・ミールザーが多数の強力な甲冑に身を固めた兵をひきいて出城し、カンバーイ近郊で戦が行なわれた。モグール軍の支柱であるハイダル・キューケルタシュ Haydar Kōkältash が先鋒であった。彼らは皆下馬して矢を射る事に専念した。多くの騎兵、愛国心にもえたサマルカンドとヒサルスの若党たちが馬を進めると、ハイダル・ベグをはじめ下馬していた者たちは全て馬のひずめに蹴ちらされた。これを打ち取ると、もはや彼らは戦う事もできなかった。彼らは敗北した。多くのモグールの兵士が殺された。バイスングル・ミールザーは自らの面前でも多くの兵士たちの首を打たせた。死者の数があまりにも多いため、3度も幕帳の場所が高い所に移された程であった。

この時、私の父のもとに幼少時代から仕え、ベグの位にのぼり、ある罪行の故に後には退けられていたミンリグの出身者 (Minghgh ili) であるイブラーヒーム・サールーがイスファハラ城に入って、バイスングル・ミールザーの名でフトゥバ〔集団礼拝に先立って行なわれる説教〕を読み、〔私に対する〕反乱の口火を切った。シャールバーン月〔1495年4/5月〕、私はイブラーヒーム・サー
31a ルーの反乱を鎮圧すべく (31a) 兵たちを乗馬させた。

私たちはこの月の末にイスファハラを囲んで下馬した。その日、若党たちは大胆さを発揮して、到着するとすぐ、敵がその城の外側に、新しい城壁をたてて作った城を奪取した。イシク・アーガーのサイイド・カーシム Sayyid Qāsim ishik-āghā はこの日、誰よりもよく進み〔他の者に〕先んじて刀をふるった。

スルターン・アフマド・タンバル *Sultān Aḥmad Tanbal* も刀をふるった。ムハンマド・ドースト・タガーイーも刀をふるった。しかし「バハードゥル〔勇士〕の分け前」(*bahādur ūlūshi*)をサイイド・カースィムが獲得した。勇士に与えられる分け前はモグールの間で古くからある習慣である。誰であれ人々に先んじて刀をふるったならば、何であれ祝宴や食事があった際、最初の分け前をその人物が取るのである。私がシャールヒーヤに行って、私の母方のおじのスルターン・マフムード・ハーンに会った際 [31b-32a参照]、バハードゥルの分け前をサイイド・カースィムが取った。

初日の戦闘で、私の後見人のホダーイ・ベルディに弩弓 (*takhsh*) の矢が命中して戦死した。甲冑をつけずに戦をいどんだため、若干の身軽な若党たち (*yigit yīlang*) が戦死し、多くの者が傷を負った。イブラーヒーム・サールーのもとにはすぐれた弩弓の射手がいた。まことに見事に射た。あれ程すぐれた射手をそれまでに見た事が無かった。彼はほとんどの者を負傷させた。彼は〔イスファラ〕城の征服後は私のところにいた。

包囲は長びいた。私は次の如く命じた：2～3カ所に〔城壁と同じ位の高さ
31b の〕高台 (*sar-kūb*) を築き、対壕を構築し、(31b) 懸命に城の攻略の手だてを構ずるようにと。包囲期間は**40日**に及んだ。遂にイブラーヒーム・サールーは万策つきてホージャ・マウラーナーイェ・カーズィーの仲介で降伏 (*qulluq*) を選び、**シャッワール月** [1495年5/6月]、刀と箠を首からぶらさげて来て服従し、城を引渡した。

ホジャンドも長い間ウマル・シャイフ・ミールザーの管轄下にあった (*‘Umar Shaykh Mīrzā dīwānīgha ta‘alluq edi*)。この間、その掌握が弱まっていたため、この地はスルターン・アフマド・ミールザーになびいていた。このような状況になっていたのも、私はその地へも行った。ホジャンドの城内にはミール・モグール *Mīr Moghūl* の父のアブドゥル・ワッハブ・シガーウール *‘Abd al-Wahhāb shighāul* [シガーウールは「客の随伴役」] がいた。私たちが到着すると、ただちに城を問題も無く引渡した。

この時、スルターン・マフムード・ハーンはシャールヒーヤに来ていた。これ以前に、前述した如く、スルターン・アフマド・ミールザーがアンディジャーン近郊に来た時、ハーンも来てアフスィを囲んだのであった。私はふとこう考えた。こんなに近い所に来ており、ハーンは私にとっては父や兄のごとき方

であられる。それ故行ってお会いして、過去の難しい事どもを水に流せば、遠くや近くで噂を聞いたりお会いしたりするのに益するであろうと。そこで私は行って、シャルヒーヤ城外の、ハイダル・ベグが作った庭園でハーンにお会いした。

32a ハーンは庭園の中央に建てられた大きな、4門のある(32a)テントに坐っておられた。テントに入ると、私は3度ひざまづいた。ハーンも挨拶するため立上がられた。挨拶を交し、もどって、[もう1度]ひざまづいた後、[ハーンは]お側に呼ばれて多くの愛情と温情をお示しになった。

1～2日後に私はケンディルリク峠 Kendirlik dābānı を経て、アフスィ、アンディジャーンにむかった。アフスィに着くと父の墓に詣で巡回を行なった。金曜日の礼拝の時刻にアフスィを出て、バンディ・サーラル Band-i Sālār 路を経て、夕刻の礼拝と就寝前の礼拝の中間の時刻にアンディジャーンに到着した。バンディ・サーラル路というこの路は9ユガチの道のりである。

アンディジャーン地方の遊牧民(ṣaḥrā-neshīn)の1つにチェクレク Chekrāk 族がある。多人数の部族である。5～6,000帳の部民を持っている。フェルガーナとカーシュガルの中の山地にいる。多数の馬と多数の羊を持っている。その山地では牛の代りにヤクを飼っている。ヤクの数も多い。山々は峻しく、辺境地帯にいるため、彼らは税(māl)の納入をスムーズに行なわなかった。私はカーシム・ベグに兵をひきいさせて、チェクレク族にむけ派遣した。チェクレク族から税をとりたてて、兵にその半分を与える約束であった。カーシム・ベグは行って、20,000頭に近い羊と1,000～1,500頭の馬を取って兵士らに分配した。

兵がチェクレク族の所からもどった後、私たちはウラ・テペにむかった。

32b (32b) ウラ・テペはしばらくウマル・シャイフ・ミールザーの支配下にあったが、ミールザーの死んだ年にその手を離れた。この時にはバイスングル・ミールザーの方から弟のスルターン・アリー・ミールザーが来てそこにいた。[さて]スルターン・アリー・ミールザーはそれを聞くと、彼自身はプルガル Pulghar とマスィーハー山地に出て、ウラ・テペには後見人のシャイフ・ズーン・ヌーン Shaykh Dhū al-Nūn を残した。私たちがホジャンドを過ぎて、中ほどまで来た時、私はシャイフ・ズーン・ヌーンの所へハリーファ Khalīfa を使者に仕立てて派遣した。かの無分別な小者は明確な答を与えず、ハリーフ

ァを捕えさせ死を命じた。しかしそれは神の御意志ではなかったらしく、ハリ
ーファは釈放され、無数の苦しみをなめながら2～3日の後に徒歩で、ほとん
ど裸で帰って来た。私たちはウラ・テペの近郊に到着した。冬が近づいていた
ので、人々は穀物や飼料を全て持って行ってしまっていた。このため、私は数
日後にアンディジャーンにむけ出発した。私達がひきかえした後に、ハーンの
兵がウラ・テペめざして進んだ。ウラ・テペの人々は保ちえず、引渡して出城
した。ハーンはウラ・テペをムハンマド・フサイン・キュレゲン **Muhammad**
Husayn Kürägän〔キュレゲンはハーン家の「女婿」の意〕に与えた。この時
から**908年**〔1502/03年〕までウラ・テペはムハンマド・フサイン・キュレゲン
の手中にあった。

901年〔1495年9月21日—1496年9月8日〕の出来事

33a スルターン・フサイン・ミールザーがホラーサーンからヒサールに (33a) むけ出兵し、冬、ティルミズの前面に到着した。スルターン・マスウッド・ミールザーも兵を集めてティルミズに対決のために来て陣を構えた。ホスロー・シャー自らはクンドゥズを固め、〔マスウッドの〕軍には弟のワリーを送った。両軍はその冬のほとんども〔アム川の〕河畔で過ごしたが、川を渡る事はできなかった。スルターン・フサイン・ミールザーは聡明な、経験豊かな君主であった。クンドゥズ方面に川の上流にむかって移動した。対岸にいる兵に気づかせず、アブドゥル・ラティーフ・バフシ ‘Abd al-Laṭīf bakhshī にひきいられた5～600の精鋭をキリーフ Kilif の渡しへ送った。敵兵が気づく前に、アブドゥル・ラティーフ・バフシは任命された人たちと共にキリーフの渡しを渡って対岸を占領した。

この知らせがスルターン・マスウッド・ミールザーのもとに届くと、ホスロー・シャーの弟のワリーはこの渡河した敵にむかって進軍する事を懸命にすすめた。しかし、スルターン・マスウッド・ミールザーは臆病のせい、あるいはワリーのライヴァルであったバーキー・チャガーニーヤーニーの口説のせい、とにかく渡河した敵にむけ進軍しなかった。彼らは、まるで破られた者のごとくにヒサールへと退却した。

スルターン・フサイン・ミールザーは川を渡ると、バディーウッ・ザマーン・ミールザー Badī‘ al-Zamān Mīrẓā, イブラーヒーム・フサイン・ミールザー Ibrāhīm Ḥusayn Mīrẓā, ムハンマド・ワリー・ベグ Muḥammad Walī Beg, ズーン・ヌーン・アルグンをホスロー・シャーにむけ急行させた。そしてムザッファル・ミールザー Muẓaffar Mīrẓā (33b) とムハンマド・ブルンドゥク・バルラス Muḥammad Burunduq Barlās をフッタランにむけ派遣した。彼自らはヒサールに来了。

接近すると〔ヒサールの人々も〕それを知った。スルターン・マスウッド・ミールザーはヒサールに留まる事を良策とせず、カム・ルード Kam-rūd 川をさかのぼり、シラ・タク Sira-taq 道によって、弟のバイスングル・ミールザーのいるサマルカンドへ行った。ワリーもフッタラン方面へ退いた。ヒサール

城をバーキー・チャガーニーヤーニー，マフムード・バルラース Maḥmūd Barlās，クチュ・ベグ Quch Beg の父のスルターン・アフマド Sulṭān Aḥmad が固めた。

ハムザ・スルターン Ḥamza Sulṭān とマフディー・スルターン Mahdī Sulṭān は，シャイバーニー・ハーンのもとを離れてスルターン・マフムード・ミールザーに仕えてすでに数年もたっていた。彼らは全てのウズベクと，ムハンマド・ドグラト，スルターン・フサイン・ドグラト，それにヒサル地方にいたモグールらと共に，この混乱の際，カラ・テギン Qara Tegin の方へ退いた。

スルターン・フサイン・ミールザーはこれらの動きを知ると，アブル・ムフシン・ミールザー Abū al-Muhsin Mīrzā と若干の若党たちにカム・ルードの谷をさかのぼり，スルターン・マスウード・ミールザーを追跡させた。彼らは，[マスウードが]隘路に入った時に後ろから追いついたが，どれ程の事も為しえなかった。ミールザー・ベグ・ファランギー・バーズ Mīrzā Beg farangī-bāz [ファランザー・バーズは「火縄銃手」] がそこで刀で奮闘した。

イブラーヒーム・タルハン Ibrāhīm Tarkhān，アイユーブの子のヤークーブ，そして若干の兵をハムザ・スルターンとモグールらにむけカラ・テギンへ派遣した。彼らはカラ・テギンで後ろから追いついて戦った。[ハムザらは]
34a スルターン・フサイン・ミールザー (34a) の先鋒を破り，これらのベグたちの大半を落馬させたが，またただちに釈放した。

かの〔ヒサルからの〕脱出の結果，ハムザ・スルターン，マフディー・スルターン，ハムザ・スルターンの子の子のママク・スルターン Mamaq Sulṭān，後にはムハンマド・ヒサーリーの名で知られるようになったムハンマド・ドグラト，スルターン・フサイン・ドグラト，これらのスルターンたちに属していたウズベクたち，ヒサル地方に住地を持ちスルターン・マフムード・ミールザーの従者であったモグールたち，これらの人々は私を〔主人にしよう〕と云って，**ラマザン月** [1496年5/6月]，アンディジャーンに来た。私は，その様な際のティムール朝のスルターンたちのやり方に従って，高く広い座椅子 (töshäk) の上に坐っていた。ハムザ・スルターン，マフディー・スルターン，ママク・スルターンが来た時，私はこれらのスルターンたちの挨拶に対して立上がり，座椅子からおりて，このスルターンたちと挨拶を交した。私はスルタ

ーンたちを右手にあぐらをかいて (baghishda) 坐らせた。ムハンマド・ヒサーリーにひきいられた全てのモグールたちも来て、全員が私に仕える事にした。

スルターン・フサイン・ミールザーは到着するとヒサール城を包囲して野営した。坑道設置、城攻め、投石、投石機の仕事などで、夜も昼も、休憩・休息は皆無であった。4～5カ所に坑道を設置した。城内にむかって城門の所に作った坑道は非常に先の方まで来ていた。城内の人々も坑道を作って、この坑道
34b を発見した。城内の人々は (34b) 上手からこちら側の人々にむけ煙を流した。ところが彼らが穴をふさぐと、煙は上手の城内の人々の所へ逆流した。城の人々は息がつまって逃げ出した。城の人々は最後に沢山のかめで水を運んで〔上から〕流し、城外の敵を坑道から逃亡させた。また1度は、1隊の若党たちが出撃して、坑道の所にいた〔包囲軍の〕若党たちを逃亡させた。

また、〔包囲軍は〕ミールザーが野営した北方から、投石機を整えて、多数の石を投じ、1つの塔に穴をあけた。就寝前の礼拝の時刻に塔は倒れた。若干の若党たちは急いで戦におもむく許しを求めた。ミールザーは「〔今は〕夜だ」と云って許さなかった。夜が明けるまでに、城民は塔を全て再建していた。その朝、彼らは戦もしかけてこなかった。この**2カ月**ないし**2カ月半**の間に、包囲し、坑道を作り、土台を築き、石を投げる以外には、〔スルターン・フサイン・ミールザーは〕はなばなしい戦闘をしなかった。

ホスロー・シャーにむけ派遣されていたバディーウッ・ザマーン・ミールザーとその軍団がクンドゥズより3～4ユガチ下流の所で下馬した時、ホスロー・シャーはそこに居あわせた部下と共に、隊伍を整えさせて、クンドゥズを出発し、途中宿営して、バディーウッ・ザマーン・ミールザーとその軍隊にむけ
35a 隊伍を整えてやって来た。これらの、あのようなミールザーたち、あのような指揮官たるベグたちは、(35a) たとえその兵力がホスロー・シャーの兵力の2倍はなかったにせよ、少くとも1倍半はあったという時に、いったいどういう口実で、意を決して塹壕から出ようとしなかったのだろうか。ホスロー・シャーの従士は貴賤長幼を合わせても4～5,000にしか過ぎなかったであろうに。

ホスロー・シャーは、この無価値のうつろいやすい現世のために、また不信心の動揺しやすい家臣のために、あのような悪と悪名を選び、あのような暴虐非道を行なう事を自らにモートーとして課した。彼はかくも広大な領地を獲

得し、かくも多数の従士・従者を手元におく事をたくらんだ。それどころか、やがてその従士・従卒は2〜30,000に達し、彼の領地・軍隊は自らの君主・王子らをも凌駕した。その生涯に為した諸事はかくの如くであった。かくの如くであるにもかかわらず、ホスロー・シャーの部下たちも指揮者として傑出し勇敢であった。塹壕を出なかった者たちは臆病者として評判になり、胆力の無さで物笑いの種となった。

バディーウツ・ザマーン・ミールザーはそこから移動して数宿を数えた後、ターリカーン Ṭāliqān のアルグ山 Alghu taghı に来て野営した。ホスロー・シャーはクンドゥズ城にいた。彼は弟のワリーを一団の精鋭と共にイシュケミシュ Ishkāmish, フルール Fulūl, そしてその山麓の一带へと派遣していた。外側から〔敵に〕不安感を与えるためであった。またムヒッブ・アリー・コルチ Muḥibb ‘Alī qorchı〔コルチは「箴筒手」〕は一団の精鋭を率いて来て、フ
35b ッタラーン川の(35b)河畔で、〔ミールザー側の〕これらの人々の兵に遭遇し、破って、若干の人々を落馬させ、若干の者の首を切って去った。

後に、これに対する対抗心から、サイイディム・アリー・ダルバーン Sayyidim ‘Alī dar-bān〔ダルバーンは「門番」〕とその弟のクリー・ベグ Qulī Beg, そしてアイユーブの子のバフルール Bahlūl が、一団の精鋭と共に来て、アンバル・クーフ ‘Anbar-kūh の麓、ホージャ・チャンガール Khwāja Changāl 近郊で、ホラーサーン軍が移動して来た際に襲いかかった。大勢が来て、サイイディム・アリー、クリー・バーバー、さらに一団の精鋭たちを全て落馬させた。

このニュースがスルターン・フサイン・ミールザーに伝えられた。またヒサールの春の雨の故に兵たちは不安をまぬがれえなかった。和平の提案が出され、城内からマフムード・バルラースが来た。城外からはハージー・ピール・ブカーウル Ḥājjī Pīr bukā’ūl〔ブカーウルは「酌人」〕と高官たち(uluq āghālar), それにそこにいた全ての楽師や歌手らが来て、スルターン・マフムード・ミールザーの〔妃の〕ハーンザーダ・ベギムから生まれた長女を、スルターン・アブー・サーイードの孫娘であるパーヤンダ・スルターン・ベギム Pāyanda Sultān Begim から生まれた〔スルターン・フサインの子の〕ハイダル・ミールザー Ḥaydar Mīrzā に娶って、〔フサインは〕ヒサール城下を出発してクンドゥズ方面へむかった。

クンドゥズに来るとまた包囲網をしいて包囲の体制をとった。結局、バディ

ーウッ・ザマーン・ミールザーの仲介で和平を結び、城の内外に捕虜になって
36a いた若党たちを交換して (36a) ひきあげた。ホスロー・シャーがかくも強大と
なり、かくも限らない事どもを達成できたのは、スルターン・フサイン・ミール
ザーが2度も来攻しながら遂に彼を捕える事ができなかったためであった。

スルターン・フサイン・ミールザーはバルフ Balkh に到達すると、マー・
ワラー・アンナフルに対する関心の故に、バルフをバディーウッ・ザマーン・
ミールザーに与え、彼〔バデーウッ・ザマーン〕の領地であったアスタラーバ
ードを〔弟の〕ムザッファル・フサイン・ミールザーに与えた。両者に、バル
フ及びアスタラーバードを領地とする事を、同じ1つの会合で、承諾させた。
このためバディーウッ・ザマーン・ミールザーは腹を立てた。ここ数年の反乱
・離反の原因がこれであった。

この同じ**ラマザーン月**〔1496年5/6月〕にサマルカンドでタルハン族の反乱
が起こった。その詳細は以下の如くであった。バイスングル・ミールザーは、
ヒサールのベグたちや軍人たちと親しく昵懇に交わった程にはサマルカンドの
ベグや軍人たちと交際しなかった。シャイフ・アブドゥッラー・バルラース
Shaykh ‘Abd Allāh Barlās は彼の非常にお気に入りのベグであった。その息
子たちは文字通りの側近・近臣 (muqarrab wā ichki) で、その関係はまるで
恋人どうし〔愛する者と愛される者〕のようであった。

タルハン族のベグたちや若干のサマルカンドのベグたちはこれらに立腹して
いた。そこでダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンがブハーラーから来て、ス
ルターン・アリー・ミールザーをカルシ Qarshī から連れて来させ、君主に推
戴し (pādishāh kōtārip), 彼らは〔サマルカンドの〕バーゲ・ナウ Bāgh-i
naw 〔「新庭園」〕に来た。バイスングル・ミールザーはバーゲ・ナウにいた。
36b 彼らはバイスングル・ミールザーをとらわれ人のごとくに (36b) して、その従
士・従者たちからひき離し、内城 (ark) に連行した。両ミールザーを1カ所
に坐らせた。後、午後の礼拝時にバイスングル・ミールザーを〔内城内の〕キ
ョク・サライー〔「青の宮殿」〕へ連れて行くつもりでいた。

バイスングル・ミールザーは^{みそぎ}禊をするという口実で、ブスターン・サライー
の東北にある建物から1つの家に入った。門の所にタルハン族の者たちが立っ
ていた。ミールザーと共にムハンマド・クリー・カウチンとハサン・シャルバ

トチ **Ḥasan sharbatchī** [シャルバトチは「シャーベツ作り」] が一緒に入った。手短かに云えば、ミールザーが楔のために入った邸の裏手に、火ぼし煉瓦で「ふさいで」壁にしている門があったらしい。それは内部から外に通ずる門であったらしい。彼らはただちにこの壁を倒して脱出し、内城のガーティファル **Ghātifar** 側の城壁の1つから、水の通路を利用して出て、2重の (*dū-tahī*) 塁壁を越えて外に出て、ホージャ・カフシール **Khwāja Kafshīr** 区の「ナクシュバンディー教団の故ホージャ・ウバイドゥッラーの子の」ホージャカ・ホージャ **Khwājaka Khwāja** の邸へ行った。先の邸の門の所に立っていた者たちは、やがて気づいた。彼らはミールザーが逃げたのを発見した。

その翌朝、タルハン族の人々が集まってホージャカ・ホージャの門の所へ行った。ホージャは「居ない」と云って引渡さなかった。彼らも力づくで奪回する事はできなかった。ホージャたちの尊厳は、彼らが力を行使しうるより以上に高かった。

1～2日の後、ホージャ・アブル・マカーリム **Khwāja Abū al-Makārim**, アフマド・ハージー・ベグ, それに若干の大小のベグたちや軍人市民らは、民
37a 衆蜂起を起こし、(37a) ホージャの邸からミールザーをかつぎ出し、スルターン・アリー・ミールザーとタルハン族の人々を内城に囲んだ。彼らは内城を1日すら守る事ができなかった。ムハンマド・マズィード・タルハンがチャハール・ラハ門 (**Chahār-raha darwāzasī**) を出て、ブハーラーへ行った。スルターン・アリー・ミールザーとダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンが捕えられた。

バイスングル・ミールザーがアフマド・ハージー・ベグの邸にいた時に、ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンを人々が連行して来た。ひと言ふた言質問したが、「ダルヴィシュ・ムハンマドは」うまく答えられなかった。うまく答えられる位なら、あのような事はしなかったであろう。死刑を命じた。ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンが絶望して柱にしがみついた。柱にしがみついたからといって、彼らが許すであろうか。判決が執行された。

スルターン・アリー・ミールザーについてはキョク・サライーへ連行しその両眼に焼けた鉄棒をあてるよう命令された。ティムール・ベグが建設したすばらしい建造物の1つが、サマルカンドの内城にあるキョク・サライーである。不思議な性格を持った建物である。ティムール・ベグの子孫たちの中で、頭をもたげて王位についた者は皆ここで即位した。しかし、王位をねらって首を落

した者も、また皆ここで首を落した。「さる王子をキョク・サライーへ連れ出した」といういいまわしは、「殺した」という事の暗喩にすらなっていた。

37b 彼らはスルターン・アリー・ミールザーをキョク・サライーへ連れ出し、両眼に焼けた鉄棒をあてた。外科医の故意によるものか (37b), それとも不本意にもそうなったのか, スルターン・アリー・ミールザーの両眼は鉄棒によって損傷をこうむらなかった。その事をすぐには明かさず, 彼はホージャ・ヤフヤー Khwāja Yahyā の邸へ行った。彼は2～3日後に脱出してブハーラーのタルハンたちの所へ行った。

ホージャ・ウバイド猊下の子らの間でこのために対立が生じた。年長者〔ホージャカ・ホージャ〕は年長者〔バイスングル〕に組した。年少者〔ホージャ・ヤフヤー〕は年少者〔スルターン・アリー〕をたすけた。数日後にホージャ・ヤフヤーもブハーラーへ行った。バイスングル・ミールザーは兵をひきいてブハーラーのスルターン・アリー・ミールザーのもとにおもむいた。ブハーラーに近づくと, スルターン・アリー・ミールザーとタルハンたちは隊伍を整えて出た。ちょっとした戦闘があった。スルターン・アリー・ミールザーの側が勝ち, バイスングル・ミールザーが敗北した。アフマド・ハージー・ベグと一団の精鋭たちが捕虜になった。彼らはその大部分を殺した。アフマド・ハージー・ベグを, ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンの「血の代償」により, 不名誉なやり方で殺害した。スルターン・アリー・ミールザーはバイスングル・ミールザーの後を追ってサマルカンドにむけ進んだ。

この知らせが**シャッワール月**〔1496年6/7月〕にアンディジャーンにいる私たちのもとにも届いた。私たちもサマルカンドをめざしてその同じシャッワール月に出兵した。スルターン・フサイン・ミールザーはヒサルとクンドゥズから〔ヘラートに〕もどっていた。スルターン・マスウード・ミールザーとホスロー・シャーの心は1つになっていた。スルターン・(38a) マスウード・ミールザーもサマルカンドをねらってシャフリ・サブズ Shahr-i Sabz に来た。ホスロー・シャーは弟のワリーをミールザーに加わらせた。3～4カ月間, 私たちはこの三方からサマルカンドを包囲した。

ホージャ・ヤフヤーがスルターン・アリー・ミールザーのもとから来て, 協調・同盟の提案を出した。会見する事で一致した。私は私の軍勢と共に, サマルカンドから2～3シャルイー (shar'ī) 〔シャルイーは約6 km〕下流のソグ

ド Sughd 側から進んだ。むこう側からスルターン・アリー・ミールザーがその軍勢と共に来た。一方からは4～5人と共にスルターン・アリー・ミールザーが、他方からは4～5人と共に私がコーハク川 Kōhak suyī の川中島 (araliq) に渡り、馬上で会って挨拶を交し、彼らはむこう側へ行き、私はこちら側へ帰った。私は〔詩人・音楽家で有名な〕ムッラー・ビナーイー Mullā Bina'ī と〔『シャイバーニー・ナーマ』の著者〕ムハンマド・サーリフ Muḥammad Ṣāliḥ をそこで、ホージャのお側で見た。私がムハンマド・サーリフを見たのはその1回だけであった。ムッラー・バナーイーはその後ながらく私に仕えた。

スルターン・アリー・ミールザーと会見した後、冬が近づいており、またサマルカンドの人々も〔包囲の結果として〕さほどに窮乏してもいなかったのので、私はアンディジャーンにむかい、スルターン・アリー・ミールザーはブハーラーにむかった。

スルターン・マスウッド・ミールザーはシャイフ・アブドゥッラー・バルラーの娘にすこぶる心を奪われていた。彼女を娶ると、国取りの野望を捨てて
38b ヒサールに (38b) 帰還した。と云うより、この遠征の真の目的はまさにこれであつたのかも知れぬ。

〔サマルカンド近郊の〕シーラーズ Shirāz とカンバーイの近くから、〔ウズベクの王子で、バーブルのもとにいた〕マフディー・スルターンが逃亡してサマルカンドへ行った。ハムザ・スルターンはザーミーン Zāmīn から私の許しをえてサマルカンドへ行った。

〔902年/1496年 9 月 9 日—1497年 8 月29日/の出来事〕

この冬、バイスングル・ミールザーの諸事は全般的に発展した。アブドゥル・カリーム・アシュリトがスルターン・アリー・ミールザーの側からクーフィーン Kūfin とその近郊へ来攻していた。サマルカンドからマフディー・スルターンがバイスングル・ミールザーの先鋒軍をひきいて来て、これらの前に立ちはだかった。アブドゥル・カリーム・アシュリトとマフディー・スルターンは一騎打となった。アブドゥル・カリームの馬をマフディー・スルターンがチェルケス刀 (Cherkesī qilich) で切ると馬が倒れた。彼自身〔アブドゥル・カリーム〕が立上がろうとした時、マフディー・スルターンはその手を手首の所で切り落した。彼を捕え、むこう方の先鋒軍を大いに破った。

これらの〔ウズベクの〕スルターンたちはサマルカンドの政情とミールザーたちの宮廷をどうにもならぬものと見てとって、明け方に草原地帯 (yazı) のシャイバーニー・ハーンのもとへと去った。

このような〔ささやかな勝利という〕事でサマルカンドの人々は希望を見出し、スルターン・アリー・ミールザーと対決すべく兵をひきいて出城した。バイスングル・ミールザーはサリ・プル Sar-i Pul に来た。スルターン・アリー・ミールザーはホージャ・カーズルーン Khwāja Kāzrūn [＜p. 48 Khwāja Kārdzan＞] に来た。この時に当り、ホージャ・ムニール・オシー Khwāja Munīr Oshī にそそのかされて、ホージャ・アブル・マカーリムと、アンディ
39a ジャーンのベグたちの中では (39a) ヴァイス・ラーガリー、ムハンマド・バーキル、さらにカーシム・ドウラダイ Qāsim Dawladay、そしてバイスングル・ミールザーの1団の側近 (ichki) の者がブハーラーに急行した。彼らが近づくと、ブハーラーの人々も気づいた。これらの人々の事は成らずに引きかえした。

スルターン・アリー・ミールザーとの会見の際、春 (yaz) になったら、彼らはブハーラーから、私はアンディジャーンから来てサマルカンドを包囲するという約束が為されていた。私たちはその約束に従って、**ラマザン月** [1497年 5/6 月]、アンディジャーンを出馬し、ヤール・ヤイラク Yār Yaylaq 近郊に到達した時、〔2人の〕ミールザーたちが相対峙しているという情報を得て、

モグールのトゥールーン・ホージャ Tūlūn Khwāja Moghūl を、2～300人の奔放な若党たち (qazaq yigit) と共に急派した。これらの者たちが近づいた時、バイスングル・ミールザーは私たちについての情報を得ると、まるで敗北者の如くして退却した。これらの若党たちはその夜、間道を通して突入し、多数の者を射て捕え、多くの戦利品をもたらした。

私たちはその2日後、シーラーズ城に達した。シーラーズはカースィム・ドウラダイの手中にあった。彼のダルガ (darugha) 「[軍政管民官]」はシーラーズを保ちきれず、城をさし出した。シーラーズ城をイブラーヒーム・サールーに委ねた。翌朝、**ラマザンあけの礼拝** (‘īd-i fiṭr namāzı) をそこで行ない、サマルカンドにむかい、アーブヤール禁地 (Ābyār qurughı) に下馬した。この日、カースィム・ドウラダイ、ヴァイス・ラーガリー、ハサン・ナビーラ、

39b スルターン・ムハンマド・サイファル Sultān Muḥammad Sayfal, (39b) スルターン・ムハンマド・ヴァイス Sultān Muḥammad Ways [＜p. 49 Sultān Muḥammad Darwish＞] が3～400人と共に来て〔私に〕仕えた。彼らは「私たちはバイスングル・ミールザーが移動して退却した時に別れて、お殿様の家来になるためにまいりました」と云った。しかし後に判明した真相は、彼らは、命令によってバイスングル・ミールザーのもとを離れ、シーラーズを確保するために来たが、シーラーズの状況が上述の如くになって、途方にくれて〔私たちの所へ〕やって来たという事であった。

カラ・ブラク Qara Bulaq 「[黒泉]」に野営した時、若干のわれわれの支配下に入っていた村々 (kent kesäk) に対して思慮の無い行動をとったモグールたちが捕えられて連行されて来た。カースィム・ベグは規律を正すため2～3人を八つざきにした。4～5年後 [99b 参照]、私の流浪時代に、私がマシーハーから〔モグールの〕ハーンのもとへむかった際、カースィム・ベグはまさにこの理由から〔復讐を怖れて〕私たちと別れてヒサールへ行った。

カラ・ブラクを発って、〔ザラフシャーン〕川を渡り、ヤーム Yām に面して野営した。この日、若干の側近のベグたち (ichki beglār) は大道 (khiyābān) の所でバイスングル・ミールザーの兵と交戦した。敵はスルターン・アフマド・タンバルののどに槍をつきさしたが、落馬しなかった。ホージャ・カラーン Khwāja Kalān の長兄であるホージャキ・ムッラー・サドル Khwājaki Mullā Saḍr のぶ厚い (yoghan) 首に矢が当り、彼はその時神の御許に召された。非

常にすぐれた若党であった。私の父も眼をかけて印章官 (muhr-dār) にして
40a いた。学問好きで (40a), 文章をよく知っていた。その〔公文書の〕書式も
よかった。鷹の扱い方 (qushchiligh) と〔風雨をもたらす〕ヤダ石の扱い方
(yadachiligh) も知っていた。

私たちがヤームの近くにいる時,〔サマルカンド〕城内から,土地の商人たちやその他の商人たち (il bāzārī wā ghayr bāzārī) が出てきて,軍営地のバーザール〔市場〕を設営して (ordu bāzārda bolup) 商売をしていた。ある日,午後の礼拝の時刻に突然暴動が起って,これらのムスリムたちは全て略奪をこ
うむった。軍規がこんな状況であったので,全ての者が自分の所に何も留めず,
全てをただちに返還するようにとの命令が出された。翌朝,初更以前に,糸く
ずや針の破片に至るまで,何も兵士らのもとには残らなかった。全てをただち
に持主に返却した。

そこを発って,私はサマルカンド東方のハーン・ユウトゥ Khān-yurtı [「ハ
ーンの宿営地」] に下馬した。サマルカンドから 3 キョルフ (körüḥ) [キョル
フは 4,000 歩の距離] であろう。私は**40~50 日間**,この宿営地に留まった。こ
こに滞留中に,数度,城の内外から勇気ある若党たちが出撃し大道の所でよく
戦を交えた。1 度は大道の所でイブラーヒーム・ベグチクが攻撃した。顔を切
られた。以後彼は切傷のイブラーヒーム (Ibrāhīm chapuq) と呼ばれている。
もう 1 度も大道上の,プリ・マガーク Pul-i Maghāk [「マガーク橋」] の所で
アブル・カースィム・クーフボル Abū al-Qāsim kūh-bor [クーフボルは「山
を切り開く者」] がほこをふるった。次も大道上のタル・ナーウ Tar-nāw [「狭
40b 水路」] の近くで戦が (40b) あった。ミール・シャー・カウチン Mīr Shāh
Qawchin がほこをふるった。ミール・シャー・カウチンはすさまじい攻撃を
受け,その首の半分ちかくを切りつけられたが,結局,大動脈は切られずにす
んだ。

ハーン・ユルトゥに滞留中に,城内の者たちは策をめぐらして人を派遣して
来てこう述べた。「夜になったらガーリ・アーシカーン Ghār-i ‘Āshiqān [「恋
人たちの洞」] の方面においで下さい。城をお渡ししましょう」。このつもりで
私は乗馬してマガーク橋の所へ来た。そして一団の精鋭と歩兵を待合わせの場
所へ派遣した。城内から人が来て我が方の歩兵の内の 4~5 人を連れ去った。
彼らは〔私たちの到着〕を知っていたのであった。〔連れ去られた者たちは〕

まことにすばやい歩兵たちであった。その1人の名はハージーで幼い頃から私に仕えていた。もう1人を人々はマフムード・キュンデリ・サンガク *Maḥmūd Kündār-i Sangak* [キュンデリ・サンガクは「小石の槍」]と呼んでいた。彼らは全員殺された。

このユルトに滞在中に、サマルカンドから市民や商人があまりに多数やって来たので宿営地 (*ordu*) は1つの町のようにになった。町々で求めるような物は全て宿営の中で見付けられた。

この間に、サマルカンドを除く全ての城・山・平原 (*qurghanlar wā tagh wā tūz*) が「私に」帰順した。シャーダール山 *Shāh-dār taghī* [＜p. 51 *Shāw-dār taghī*＞] の山麓のウズケト *Özket* [＜p. 51 *Urgut*＞] と云う名の城を1団の人々が固めた。必要にせまられて、私はユルトを発ってウズケトへ行った。

41a 彼らは持ちこたえられず、ホージャ・カーズィーを(41a)中に立てて帰順した。私たちも彼らの罪を許した。私たちは再びサマルカンドの包囲に帰った。

この年、スルターン・フサイン・ミールザーとバディーウッ・ザマーン・ミールザーの間の確執は戦にまで発展した。その詳細は次の如くである。前述した如く、先年、バルフとアスタラーバードをそれぞれバディーウッ・ザマーン・ミールザーとムザッファル・ミールザーに与えて、それを承諾させていた。その時から今日に至るまで、何度も使者が往復した。最後には、アリー・シール・ベグも使者として「ヘラートから」来た。いかに説得しても「バディーウッ・ザマーンは」アスタラーバードを弟「ムザッファル」に与える事に同意しなかった。彼は「私の息子のムハンマド・ムーミン・ミールザー *Muḥammad Mūmin Mīrzā* に割礼 (*khutna*) をほどこした際、「スルターン・フサイン」ミールザーは「アスタラーバードを」この子に与えたではないか」と云った。

ある日、アリー・シール・ベグと「バディーウッ・ザマーン」ミールザーの間で次のような1つの会話が交された。それはミールザーの頭の回転の速さ (*tīz fahmlīgh*) とアリー・シール・ベグの繊細な心とをあらわすものである。アリー・シール・ベグは内密の約束 (*sirrī sözlār*) をミールザーにひそかに何度も告げた。そしてさらにミールザーに、「こういう約束の事はお忘れ下さい」と云った。ミールザーは、間髪をいれず「どんな約束の事だね？」と云った。アリー・シール・ベグはすこぶる感動して大いに泣いた。

結局、父と子との間のこの争論は、父が父に対し、子が子に対してバルフとアスタラーバードにむけ出兵するという結末となった。グルズィワーン Gurzi-
41b wān の麓の (41b), ベルチェラーグ Belcherāgh の牧場へ、下手からスルターン・フサイン・ミールザーが、上手からバディーウッ・ザマーン・ミールザーが来た。ラマザン^{つたち}月朔日水曜日 [1497年5月3日], アブル・ムフサイン・ミールザーが〔父の〕スルターン・フサイン・ミールザーの若干のベグたち、そして1団の先鋒隊と共に前進して来た。たいした戦もなく〔バディーウッ・ザマーンは〕敗北した。多くの精鋭が捕虜となった。スルターン・フサイン・ミールザーは全員の首を打たせた。単にこの時だけではなかった。いつであれ彼は反乱を起こした息子を破った際には、捕虜となったその従士たちの全員の首をはねさせた。何を為そうと、正義は彼の側にあった。

このミールザーたちは、あまりにも度をすごして色と歓楽にふけり、その父の如く聡明で経験に富む君主がすでにそこから半日行程の所までせまっており、またラマザンの如き神聖にして清浄な月〔断食月〕がなお明けるまでには1夜を残しているというのに、父を恐れず、神を怖れず、なおその仕事はと云えば、歓をつくした飲酒であり、楽をきわめた宴会という有様であった。このようになっている者たちが敗北を喫するのは当然である。またこのように日々を過ごしている者たちを誰であれ征服するのも定めである。

バディーウッ・ザマーンがアスタラーバードを支配して数年であった。彼のとりまきやおつきの者たち、そして軽装の若党たちはすこぶる優美にかざりたてられていた。金銀の武器や用具を多数所有した。絹を身につけた若党や
42a (42a) 俊馬 (topchaq atı) も無数であった。ここにおいて、その全てが霧散した。逃亡に当り、山道に出くわし、滝、瀑布の場所におつかり、彼自身苦労してこの滝を降りた。多くの者がこの滝で死んだ。

スルターン・フサイン・ミールザーは自らの息子を破った後、バルフに来了。バディーウッ・ザマーン・ミールザーはバルフにシャイフ・アリー・タガーイーを置いていた。彼は為すすべもなく降伏し、バルフを引渡した。スルターン・フサイン・ミールザーはバルフをイブラーヒーム・フサイン・ミールザーに与え、ムハンマド・ワリー・ベグ Muḥammad Walī Beg とシャー・フサイン・チュフラ Shāh Ḥusayn chuhra をミールザーと共に置いた。彼自身はホラーサーンへ帰った。

バディーウッ・ザマーン・ミールザーは敗北の後、略奪され奪取されつつ、身に何もつけぬ若党・歩兵らと共にクンドゥズのホスロー・シャーの所へ行った。ホスロー・シャーもよく奉仕した。彼は馬，らくだ，テント，帳幕，いやそれだけでなく兵士らの武器を，ミールザーとミールザーと共にいた者たちに，見た者たちの話では以前の武器とこれらの武器の違いはただ金・銀の武具でなかったというだけだったという程のものを恵み与えた。

スルターン・マスウッド・ミールザーとホスロー・シャーの間には，前者の不公平と後者の強大化の故に，敵意と不興が生じていた。〔ホスロー・シャー
42b は弟の〕ワリーとバーキーを(42b) バディーウッ・ザマーン・ミールザーに加えて，スルターン・マスウッド・ミールザーにむけ，ヒサルに派兵した。しかし彼らは城に近づく事もできなかった。周辺地帯で1～2度，両方の側から，刀による交戦がなされた。1度はヒサルの北のクシュ・ハーナ Qush-Khāna 〔「鳥小屋」〕の所でムヒップ・アリー・コルチが人々の所を離れて来て大いに戦った。落馬して捕えられそうになった時，敵側から圧力を加えて来て彼を助けた。数日後，彼らは誠意のない和平 (gurg-āshti) を結んで帰還した。

数日後，バディーウッ・ザマーン・ミールザーは山道を取ってカンダハールとザミン・ダーワルに，ズーン・ヌーン・アルグンとその子シャー・シュジャー・アルグン Shāh Shujā‘ Arghun のもとへおもむいた。ズーン・ヌーン・アングルはけちで欲深い人物であったにもかかわらず，よく奉仕した。1度贈物 (pīshkesh) をした際に40,000頭の羊を贈った。

不思議な出来事の1つは，スルターン・フサイン・ミールザーがバディーウッ・ザマーン・ミールザーを破ったのは水曜日 (chahār-shanba kūni) であったが，その同じ日にアスタラーバードでムザッファル・ミールザーがムハンマド・ムーミン・ミールザーを破ったという事である。もう1つのより不思議な出来事は，「水曜日」(Chār-shanba) という名の男がムハンマド・ムーミン・ミールザーを落馬させ連行して来た事であった。

〔903年/1497年 8 月30日—1498年 8 月18日/の出来事〕

私はバーゲ・メイダーン Bāgh-i Maydān 〔「広場の園」〕の後ろにあるコルバ牧地 Qolba ulangı に下馬した。サマルカンド人は兵も民もムハンマド・チャプ橋 Pul-i Muḥammad Chap の近くへ多勢で出撃した。わが軍は準備を整えていなかったもので、(43a) 若党たちが隊伍を整える前に、〔敵は〕スルターン・クリー Sulṭān Qulī, バーバー・クリーを落馬させて城へ連れ去った。

数日後、私は移動して、コーハク〔山〕の後方の、コルバ〔牧地〕の所に下馬した。この日、人々はサイイド・ユースフをサマルカンドから出した。彼はこの宿営地に来て私に仕えた。サマルカンドにいる者たちは、私たちが先の宿営地から移動してこの宿営地に来た事を退却したと考えて、援軍、兵、民は、〔1隊は〕ミールザー橋まで出撃し、〔1隊は〕シャイフ・ザーダ門を通してムハンマド・チャプ橋の所まで出撃して来た。私はそこにいた若党たちに武装して乗馬するよう命じた。敵は2つの方向、つまりミールザー橋とムハンマド・チャプ橋の方向から圧力を加えて来た。神は正義をもたらされ、敵は敗北した。〔味方の者たちは敵の〕きわめてすぐれたベグたちときわめて優秀な若党たちを落馬させた連れて来た。その内の1人はハーフィズ・ドウラダイ Ḥāfiẓ Dawladay の子のムハンマド・マスキーン Muḥammad Maskīn であった。その人差指を切り落して捕えて連れて来た。またムハンマド・カースィム・ナビーラ Muḥammad Qāsim nabīra 〔ナビーラは「孫」〕を弟のハサン・ナビーラ Ḥasan nabīra が落馬させて連行して来た。このような兵や民、名を知られた若党たちは多数いた。また町の暴れ者 (shahr yatīm) では、織工ディーワーナ Dīwāna jāma-bāf とカル・カシュク Kal Qashuq を連れて来た。彼らは喧嘩や乱暴の (43b) 指導者・煽動者であった。私は、恋人たちの洞 (Ghār-i ‘Āshiqān) で死んだ歩兵たちの報復として、彼らを責め苛んで殺すように命じた。

サマルカンドの人々にとってこれは完全な敗北であった。これ以後、彼らの城からの出撃はやんだ。私たちの側の者が濠の近くまで行って、奴隸たち (qul wā dādak) を連行して来るといった状況にまでなっていた。

太陽が^{てんびん}天秤座に移った。寒気が襲って来た。会議に出席する全てのベグたち

を召集して、協議した結果、次の如く決定された：城内の人々はかくも無力になっている。神の加護を得たならば、私達は今日であれ明日であれ〔いつでも〕征服できる。このまま城の外で寒気の中で苦勞するよりも、〔いったん〕城の近くから退去して、1つの城の中で冬営する事が必要だ。そうすれば、たとえ〔将来、この地を〕去るような事態が生じるとしても、その時はより心配も少く去る事ができると。冬営地はホージャ・ディーダール Khwāja Dīdār 城を適当とみなし、私たちは移動して、ホージャ・ディーダールの前面にある牧地に下馬した。私たちは入城して、テントと小屋のための場所を決め、監督官・検査官 (ustākār wā muḥaṣṣil) を置いて宿営地にもどった。私は数日間、冬営用のテントの準備が整うまで牧地に留まった。

この間、バイスングル・ミールザーはトゥルキスターンのシャイバーニー・ハーンにむけ引続いて使者を送り、シャイバーニー・ハーンを援軍として招請
44a していた。冬営用のテントの準備が整い、私たちは城内に (44a) 入った。シャイバーニー・ハーンがトゥルキスターンから急行して、まさにその日の夜明け方、私たちの宿営地の前に来て立った。私たちの兵は近くにいなかった。冬営地の設営のために、ある者はラバーティ・ホージャ Rabāṭ-i Khwāja へ、ある者はカーブド Kābud へ、またある者はシーラーズへ行っていた。にもかかわらず私はそこにいた兵と共に隊伍を整えて出城した。シャイバーニー・ハーンは陣地を固守しようとせずに、サマルカンド方面へ退却した。彼はサマルカンド近郊へ行った。バイスングル・ミールザーの思わく通りに事が運ばなかった
ので、〔ミールザーはシャイバーニーを〕歓待しなかった。〔シャイバーニーは〕数日後、何事も為しえないまま、失望してトゥルキスターンへ帰った。

バイスングル・ミールザーは**7カ月の包囲**を持ちこたえた。彼の希望の綱がシャイバーニー・ハーンであった。しかしその綱ももはや切れた。彼は2～300人の飢えた一族と共にクンドゥズのホスロー・シャーのもとへと落ちのびた。ティルミズ近くでアム川を渡った時、スルターン・マスウード・ミールザーの一族でもあり寵臣でもあるサイイド・フサイン・アクバル Sayyid Ḥusayn Akbar がティルミズのハーキムであったが、それを知ると、バイスングル・ミールザーめざしてやって来た。ミールザーはすでに川を渡っていた。ミールム・タルハン Mirim Tarkhān はそこで溺死した。〔サイイド・フサイン・アクバルは〕後に残っていた者たち (kishi qara) と輜重 (pārtāl martāl) を奪った。バイ

スングル・ミールザーのターヒル・ムハンマド Ṭāhir Muḥammad という名の稚児も捕えられた。バイスングル・ミールザーをホスロー・シャーはまた丁重に扱った。

- 44b (44b) バイスングル・ミールザーが出城するとその知らせはすぐに私たちのもとに届いた。私はホージャ・ディーダールから乗馬してサマルカンドにむかった。途中で、〔サマルカンドの〕貴人、ベグ、若党らが次々に歓迎の出むかえにやって来た。ラビーウル・アッヴァル月の下旬〔1497年11月下旬〕、私は〔サマルカンドに〕到着して内城のブスターン・サライーに下馬した。至高の神のお加護により、サマルカンドの町と地方が〔私によって〕領有・征服された。

〔サマルカンドについて〕

世界 (rub‘-i maskūn) でサマルカンドのようにすばらしい都市 (shahr) は稀である。第5気候帯に属する。天文学的な記号では、経度99度56分、緯度40度40分である。町がサマルカンドで、その地方をマー・ワラー・アンナフル Mā warā’ al-Nahr 〔アラビア語「(アム)川の彼方の地」〕と呼ぶ。いかなる外敵といえども、征服・制圧という形でこの町を獲得する事が無かったために「〔神に〕守護された町」Balda-yi maḥfūza と呼ばれる。

サマルカンドは、信徒たちの長 (amīr al-mu‘minīn) 〔カリフ〕ウスマーン ‘Uthmān 閣下の時代〔644-656在位〕にイスラムを受容した。〔マホメットのいところで、かつ〕教友たちの1人であったクサム・イブン・アッバース Qutham ibn ‘Abbās がここで逝った。彼の墓は〔サマルカンドの〕鉄門の外にある。現在、「王の墓」Mazār-i shāh の名で知られている。

サマルカンドをアレクサンドロス (Iskandar) が建設した。モグール人やトルコ人はセミズケント Semizkent (「肥沃の町」) と呼んでいる。

ティムール・ベグが首都とした。ティムール・ベグ以前に、彼ほどに強大な君主がサマルカンドを首都とした事は無かった。城の城壁の上を歩いて計らせたところ、10,600歩あった。

- 〔住民とイスラム学者〕住民は全てスンナ派 (sunnī) で、正統法学派に属し、シャリーアを重んずる敬虔な人々である。預言者閣下〔マホメット〕の時代以来、多数のイスラム学者がマー・ワラー・アンナフルに出現したが、これ程の
45a 例は、他の地方では知られていない。(45a) 神学者のシャイフ・アブー・マン

スール Shaykh Abū Manṣūr はサマルカンドのマートリード Mātrīd という名の居住区 (maḥalla) の出身である。神学者は2派に分かれるが、1派がマートリード派 (Mātrīdiya)であり、1派がアシュアリー派 (Ash‘arīya)である。マートリード派の名はこのシャイフ・アブー・マンスールに起源する。

また〔有名な伝承集成である〕『サヒーヒ・ブハーリー』 *Saḥīḥ-i Bukhārī* の著者であるホージャ・イスマーイール・ハルタング Khwāja Ismā‘īl Khar-tang もマー・ワラー・アンナフルの出身である。

さらに〔有名な法学書である〕『ヒダーヤ』 *Hidāya* の著者〔ブルハースッ・ディーン・アリー・クルチュ〕もフェルガーナのマルギーナーンという名の地方の出身である。アブー・ハニーファ Abū Ḥanīfa の学派〔ハナフィー派〕で『ヒダーヤ』よりも名高い法学書 (kitāb-i fiqf) は少いであろう。マルギーナーンもマー・ワラー・アンナフル内部の町で、居住地域のはずれにある。

〔四囲〕 東はフェルガーナとカーシュガル、西はブハーラーとホーラズム Khwārazm, 北はタシュケンドとシャルヒーヤ (〔書物にはそれぞれ〕シャーシュ及びバナーカトと書かれている)、南はバルフとティルミズである。

〔川〕 コーハク川 Kōhak suyī が北を流れている。サマルカンドから2キョルフ kōrūh〔キョルフは4,000歩の距離〕の所であろう。この川とサマルカンドの間に1つの丘があって、コーハク〔現在のチョパン・アタ〕と呼ばれる。この川はこの丘の麓から流れているのでコーハク川と呼ばれる。この川から、1つの大きな水路が分岐しているが、まるで川のように。ダルガム川 Dargham suyī と呼ばれ、サマルカンドの南を流れる。サマルカンドから、1シャルイー程であろう。サマルカンドの果樹園や居住区、そして若干の諸地区 (tūmānāt) は、この川の水で灌漑されている。サマルカンドから30~40ユガチ程の道のりである〔ブハーラーまでは約250km〕ブハーラー、カラ・キョル Qara Kōl に
45b 至る地域はコーハク川によって灌漑されている。これ程の大河(45b)なのに、農業や住宅用になお十分でない。そればかりか夏には、3~4カ月間、ブハーラーには水が達しない。

〔農作物〕 ぶどう、メロン、りんご、ざくろ、と云うよりあらゆる果物がすばらしい。しかし中でも2種類の果物がサマルカンド産として名高い。サマルカンドりんごとサマルカンドぶどうである。

〔気候〕 冬はおそろしく寒い。雪も降るが、カーブル程ではない。夏は気

候がよい。もっともカーブル程ではない。

〔ティムールの建造物〕 ティムール・ベグとウルグ・ベグ・ミールザー Ulugh Beg Mīrzā〔ティムールの孫。シャー・ルフの子〕の造った建造物や庭園がサマルカンドと市内に多い。サマルカンドの内城 (ark) に、ティムール・ベグは1つの大きな宮殿 (köshk) を置いた。4階建てで、「青の宮殿」 Kōk sarāy と呼ばれている。非常にすばらしい建物である。

また鉄門の近く、城壁内に、中央モスク (masjid-i jum‘a) を建設した。その石づくりは、ほとんどがヒンドゥースターンから連れて来た石工 (sang-tarāsh) の手になるものである。モスクには、「かくしてイズラーヒームは基をきずけり云々」というコーランの一節〔2章127節〕を記した銘があるが、非常に大きな文字で書かれているので、1キュロフ程離れた所からでも読む事ができた。これもまことにすばらしい建物である。

〔ティムールは〕サマルカンドの東方に2つの庭園を造った。遠い方が<p. 58「ブルディの園」 Bāgh-i Buldi〔正しくは「高みの園」 Bāgh-i buland〕、近い方が>「よろこびの園」 Bāgh-i dilgushā である。後者から〔サマルカンドの〕トルコ石門まで1本の大道を造り、両側に箱柳 (terāk) の木を植えている。
46a 「よろこびの園」にも、大きな宮殿を造らせた。その宮殿 (46a) には、ティムール・ベグのインド戦役の図が描かれている。

またコーハクの丘〔現在のチョパン・アタ Chopan-ata〕の麓、カーニ・ギル Kān-i gil の野の「めぐみの川」 Āb-i rahmat と呼ばれている黒河 Qara suyı の所に、1つの庭園を造った。「世界の像」 Naqsh-i jahān という名で知られているが、私が見た時には、この庭園は荒廃して、名前だけしか残っていなかった。

またサマルカンドの南に「すずかけの園」 Bāgh-i chinār がある。城壁に近い。さらにサマルカンドの下方に「北の園」 Bāgh-i shimāl と「楽園」 Bāgh-i bihisht がある。

ティムール・ベグの孫で、ジャハーンギール・ミールザー Jahāngīr Mīrzā の子のムハンマド・スルターン・ミールザー Muḥammad Sultān Mīrzā〔1403年歿〕はサマルカンドの外壁の堡壘の所にイスラム学院 (madrasa) を建てた。ティムール・ベグと、その子孫のうちサマルカンドで王位についた人々の墓は、この学院にある。

〔ウルグ・ベグの建造物〕 ウルグ・ベグ・ミールザーの建造物のうち、サマルカンドの城内にあるのは、イスラム学院 (madrasa) とスーフィー道場 (khānqāh) の建物である。後者のドームはすこぶる大きなもので、世界中であれ程大きなものはめったに例がない。またこれらの建物の近くに、きれいな公共浴場 (ḥammām) を作った。ミールザー風呂 (Mīrzā hammāmī) と呼ばれている。各種の石でタイル敷きにしてある。ホラーサーンでもサマルカンドでも、あれ程の浴場はまず知られていない。

46b また (46b) 学院の南に1つのモスクを建てた。「彫刻寺院」masjid-i muqatta‘ と呼ばれている。このように呼ばれるのは、細かく木に彫刻をほどこして、イスリム風 (islīmī) [装飾の1技法]、中国風 (Khitā’i) の絵を描き、全ての壁や天井が、まさにこんな風だからである。この寺院のキブラ (qibla) [メッカの方角を示す壁面。これにむかって礼拝する] と学院のそれとの間には大きくなくいちがいがある。おそらくこの寺院のキブラの方向は、天文学的観測によって決定されたものであろう。

もう一つのすばらしい建物は、コーハクの丘の麓にある天文台 (raṣad) で、これは天文表 (zīj) を編纂するための装置である。3階建てで、ウルグ・ベグ・ミールザーはこの天文台を使って、今日世界中で利用されている『キュレゲン天文表』*Zīj-i kūrägānī* を編纂した。他の天文表が使われる事は稀である。

これ以前には『イル・ハーン天文表』*Zīj-i Il-khānī* が使用されていた。ホージャ・ナスィール・トゥースィー Khwāja Naṣīr Ṭūsī がフラグ・ハーンの時代 [1258—1265在位] にマラーガ Marāgha で観測したものである。フラグ・ハーンはイル・ハーンとも呼ばれている。

たぶん世界中で、7～8カ所の天文台で天文観測が行なわれたのみである。その内の1つは[アッバース朝第7代の]カリフ・マームーン Māmūn Khalīfa [813—833在位] が観測した。『マームーン天文表』*Zīj-i Māmūnī* がその成果として著わされている。またプトレマイオス Baṭlimiyūs も観測した。さらにインド Hindūstān ではインド人のヴィクラマーディトヤ王 (Rāja Bikramājīt Hindū) [Vikramāditya] の時代 [紀元前1世紀] にウッジャイン Ujjayn とダハール Dahār, つまりマールワ国 Mālwa mülki, すなわち現在マンドゥー Mandū と呼ばれている所で観測された。さらにもう1つの観測が行なわれ、現在インド人たちがインドで使用しているのはその天文表である。この観測を

47a したのは (47a), 1,584 年前である。この天文表は、その他の天文表に比べるとかなり不完全である。

〔ウルグ・ベグは〕またコーハクの丘の麓、西側に 1 つの庭園を造ったが、「広場の園」Bāgh-i Maydān と呼ばれている。この園の中央にすばらしい建物を作ったが、「40 柱」Chīlsutūn と呼ばれている。2 階建てで、柱は全て石でできている。この建物の 4 隅の塔の場所に、4 つの寺院の尖塔 (minār) に似た塔を屹立させ、上に昇る道は、この 4 隅の塔の中を通っている。それ以外のあらゆる場所に石造りの柱がある。その内の若干のものには、らせん状のみぞ彫りの装飾がほどこされている。2 階の 4 方はテラスで、その柱は石造りである。中央は、4 面に開けた (chār dara) 東屋である。この建物の基盤を、全て石でしきつめている。

この建物からコーハクの丘よりの麓に、さらにもう 1 つの小庭園を造った。そこに大きなテラス付の建物を造り、その内部に大きな石の玉座を置いた。長さはおよそ 14~15 カル (qarī) [カルは「腕の長さ」], 幅は 7~8 カル, 深さは 1 カルである。このように大きな石を非常に遠い道のりを運ばせた。中央の所で割れている。ここに運んだ後に割れたものだと云う。この同じ小庭園にも
47b う 1 つの 4 面に開けた東屋 (47b) を造った。前壁は全て陶器で、「陶器館」Chīnī-khāna と呼ばれている。中国から、人を派遣して運んで来たものである。

〔その他の建物と庭園〕 サマルカンドの城内に、もう 1 つの古い建物がある。「かささぎ声寺院」masjid-i laqlaqa と呼ぶ。この寺院のドームの中央で足で地面をたたくと、全部のドームからかささぎの鳴声が聞こえてくる。不思議な事である。誰もその秘密を知る者はいない。

スルターン・アフマド・ミールザーの時代 [1469-1494 在位] にも大小のベグたちは多くの大小の庭園を造った。その内で、ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンの庭園 (chār-bāgh) ほど美しく、気持がよく、また眺めのよい庭園は少いであろう。「広場の園」よりも下方の丘の上に、コルバ牧地を見おろす 1 つの庭園を造ったのである。コルバ牧地全体がその足下にひろがる。庭園内部も、段階状に土地を整備して、すばらしい^{にれ}榆の木とか糸杉とか白ポプラを植えている。まことに完璧な邸がある。欠点は大きな川が無い事である。

〔市街〕 サマルカンドの町は、驚くほど整備された町である。この町には他の町ではあまり見られぬ 1 つの特徴がある。すなわちおのおのの商工民は、

それぞれに1つのバーザール〔「市場」〕を持っていて、お互に混り合わない。よい習慣である。よいパン屋と焼肉屋がある。世界で最高の紙はサマルカンド産である。紙すき水車の水は全てカーニ・ギルの野から来ている。カーニ・ギルは黒河 (Siyāh āb) の川岸にある。(48a) この黒河 (Qara su) を「めぐみの川」 (Āb-i raḥmat) と呼ぶ。サマルカンドのもう1つの商品は真紅のビロードで、諸地方へと運ばれる。

〔牧地〕 周囲によい牧地 (ulang) がある。有名な牧地の1つはカーニ・ギル牧地である。サマルカンド市街の東方にあり、やや北寄りである。1 シャルイー程であろうか。「めぐみの川」とも呼ばれる^{カラ・スー}黒河は、その中央を流れている。7～8台の水車を動かし得る川である。この川の周囲は、全て湿地 (āb-gīr) である。この牧地のもともとの名はカーニ・アーブザール Kān-i Ābgīr であつたろうと云う者もある。しかし史書には全てカーニ・ギルと書かれている。非常に良い牧地である。＜p. 60 サマルカンドのスルターンたちは常にこの＞牧地を禁地 (quruq) にしていた。そして毎年この牧地に来て1～2カ月滞在した。

この牧地より上流の、東南の方角に、もう1つの牧地がある。ハーン・ユルトゥ Khān yurtı と呼ばれている。サマルカンドの東方にある。サマルカンドから1 ユガチであろう。先述の^{カラ・スー}黒河がこの間をよぎってカーニ・ギルへと流れている。ハーン・ユルトゥの所でこの川が蛇行しているので、その内側にオルドゥ (ordu 〔幕庭〕) を設置するのに丁度都合のよい土地であろう。そこからの出口は、非常に狭くなっている。この土地の〔戦略的な〕長所を眼にして、サマルカンドを包囲した際に、私はしばらくここに滞留した。

48b もう1つの牧地は (48b) ブーダナ禁地 Būdana qurughı で、よろこびの園とサマルカンドの間にある。さらに、キョリ・マガーク牧地 Kōl-i Maghāk ulangı があり、サマルカンドからおよそ2 シャルイー西にある。やや北寄りである。これもよい牧地である。1 隅に大きな池 (kōl) があるためキョリ・マガーク牧地〔「水たまり池牧地」〕と呼ばれる。サマルカンド包囲の際、私がハーン・ユルトゥにいた時に、この牧地にはスルターン・アリー・ミールザーが滞留した。

もう1つはコルバ牧地 Qolba ulangı で、やや小さな牧地である。北はコルバ村とコーハク川、南は広場の園とダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンの庭

園，東はコーハクの丘である。

〔地方と地区〕 よい地方 (wilāyat) と地区 (tūmānāt) がある。サマルカンドに匹敵する大きな地方はブハーラーである。サマルカンドの西方，25 ユガチ〔実際は約 230 km〕の道のりである。ブハーラーにもいくつもの地区 (tūmānāt) がある。すばらしい都市がある。果物は豊富でうまい。そのメロンはすこぶる美味である。マー・ワラー・アンナフルで，ブハーラー・メロン程，多産で，かつすぐれたメロンはない。フェルガーナ地方のアフシの「ミール・ティームーリー」と呼ばれている 1 種のメロンは，このメロンより甘く繊細な味がする。しかしブハーラーではあらゆる種類のメロンが大量に生産される。そして味もよい。またブハーラーあんず (ālū-yi Bukhārī) も有名である。ブハーラーあんずのようなあんずは，他の何処にも生産されない。その皮をむいて乾燥させ，珍品として地方 (49a) から地方へと運ばれる。下剤としてすこぶるよい薬である。ふとった雁やあひるが多い。マー・ワラー・アンナフルでブハーラーの酒 (chaghır) 程強い酒は無い。私がサマルカンドで最初に飲んだ際には，ブハーラーの酒を飲んでいた。

次はケシュ地方 (Kesh wilāyatī) である。サマルカンドの南，9 ユガチ〔実際は約 65 km〕の道のりである。サマルカンドとケシュの間に 1 つの山があり，エトメク峠 (Etmāk dābānī) と呼ばれている。石細工に使う石は，全てこの山から運ばれる。春には，〔ケシュの〕野や町や，壁面や，屋根が美しい緑になるために，シャフリ・サブズ Shahr-i sabz [「緑の町」] と呼ばれている。ティムール・ベグの故郷がケシュであったため，彼は都会や首都にするために大いに努力し，すばらしいいくつかの建物をケシュに建てた。彼自身のために，宮廷会議 (dīwān) を開催するための 1 つの大きな，アーチを持つ部屋 (pīsh tāq) と，またその右手と左手に，トゥワチ・ベグ (tuwachī beglār) とディーワーン・ベグたち (dīwān beglār) が坐って会議を行なうための 2 つのやや小さな部屋を造った。さらに上訴の人々が坐るために，この会議場 (dīwānkhāna) の四方に，きわめて小さな部屋を造った。このようにすばらしい宮殿は世界でもほとんど他に例をあげる事ができない。〔バグダード近郊の〕ホスロー宮 (Kasrā ṭāqī) よりこれの方が大きい (biyikrāk) と云われている。また〔ティムールは〕ケシュにイスラム学院 (madrasa) と墓地を造った。〔ティムールの長男の〕ジャハーンギール・ミールザーとその他の幾人かの子孫らの墓が

49b (49b) そこにある。ケシュの価値は、大都市にするにはサマルカンド程ではなかったの、結局、ティムール・ベグは首都としてサマルカンドを選んだ。

次はカルシ Qarshī 地方である。ナサフ Nasaf とかナフシャブ Nakhshab と呼ばれる。カルシはモンゴル語名である。墓所〔正しくは「宮殿」〕をモンゴル語でカルシと云う。おそらくこの名は、ジンギーズ・ハーンの統治時代以降のものであろう。やや水の乏しい所である。春はすばらしい。穀物やメロンがよい。サマルカンドの南方にあり、少し西寄り、18ユガチ〔実際は約130 km〕の道のりである。バグル・カラ鳥 (baghrī qara) 〔胸黒鳥〕に似た小鳥がいる。クル・コイルグ (qıl qoyrughī) と呼ばれている。カルシ地方に無数にいるため、そのあたりではカルシ鳥 (murghak-i Qarshī) と呼んでいる。

次はフザール地方 (Khuzār wilāyatī) である。

次はケルミーナ地方 (Kermīna wilāyatī) である。サマルカンドとブハーラーの中間にある。

次はカラ・キョル地方 (Qara-köl wilāyatī) である。最も川下にある。ブハーラーから7ユガチ〔実際は約60 km〕西南にある。

よい地区 (tūmānāt) がある。その1つはソグド Sughd 地区と、ソグドに近接した諸地区である。先端はヤール・ヤイラクで、末端がブハーラーである。1ユガチも行って村とか人居の無い所は無い。ティムール・ベグが「私には長さが30ユガチにも及ぶ1つの庭園がある」と云った事がよく知られているが、この諸地区の事を述べたものである。

次はシャウダール Shāwdār 地区 (tūmān) である。市街地・居住区に近接している。まことによい地区である。一方は、サマルカンドとシャフリ・サブズ 50a の間の山 (50a) である。その村々はほとんどこの山の麓にある。もう一方はコーハク川である。気候がよく心地よい所で、水も豊富で珍品も安い。まことにすばらしい村である。エジプトやシリア (Miṣr wā Shām) を見た事のある旅人たちもこれと同じような所を挙げる事ができなかった。

他にもいろいろの地区があるが、ここで述べた地区程ではない。以上で十分であろう。

〔統治者〕 ティムール・ベグはサマルカンドの支配権 (ḥukūmat) をジャハーンギール・ミールザーに与えた。ジャーングイル・ミールザーの歿後、その長男のムハンマド・スルターンに与えた。シャー・ルフ・ミールザーは全マ

ー・ワラー・アンナフル地方を長男のウルグ・ベグ・ミールザーに与えた。ウルグ・ベグ・ミールザーからその息子のアブドゥル・ラティーフ・ミールザーが奪った。彼はこの5日で過ぎゆく現世のために、あのように学識に富んだ、年老いた父を殺害した。ウルグ・ベグ・ミールザーの死の紀年銘〔アラビア文字の持つ数価を利用して、事件の年代を短い文章で表現する〕が巧みに作られている。

ウルグ・ベグ，学問と知恵の海。

世界と宗教にとりての支柱。

アッバースの手により殉教の蜜を味いたり。

「アッバース，殺害せり（‘Abbās kosht）」の1句，その紀年銘〔853年を示す〕となりたり。

彼自身〔アブドゥル・ラティーフ〕も5～6カ月以上は王権を保持できなかった。次の句が有名である。

父殺しは王権に益する事なし。

益したとて，そは^{むつき}6月を過ぎず。

彼の紀年銘〔854年を示す〕も巧みに作られている。

アブドゥル・ラティーフ，栄光はホスロー，ジャムシードの如く，

50b (50b) しもべの列にファリードゥン，ザルドゥフシュトの姿あり。

金曜の前夜，バーバー・フサイン，矢にて彼を弑せり。

紀年銘，そはこれなり：「バーバー・フサイン，殺害せり（Bābā Ḥusayn kosht) 」。

アブドゥル・ラティーフ・ミールザーの死後，シャー・ルフ・ミールザーの孫で，イブラーヒーム・スルターン・ミールザーの子のアブドゥッラー・ミールザー ‘Abd Allah Mīrzā が王位についた。彼はウルグ・ベグ・ミールザーの女婿であった。1年半ないし2年間ほど支配した。その後，スルターン・アブー・サーイード・ミールザーが王権を取った。その生存中に長男のスルターン・アフマド・ミールザーに〔サマルカンドの支配権を〕与えた。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの死後，スルターン・アフマド・ミールザーが王権を行使した。スルターン・アフマド・ミールザーの死後，スルターン・マフムード・ミールザーがサマルカンドの王位についた。スルターン・マフムード・ミールザーの死後，人々はバイスングル・ミールザーを即位させた。タ

ルハン族の反乱の際、人々はバイスングル・ミールザーを捕え、弟のスルターン・アリー・ミールザーを1～2日間統治させた。再びバイスングル・ミールザーが〔王権を〕取った。この史書の中ですでに述べた如くである。バイスングル・ミールザーから私が取った。他の諸情況はこれから以後の諸事件の記述の中で、明らかにされるであろう。

私はサマルカンドの王位につくと、ただちにサマルカンドのベグたちを、それまでと同様に、丁重に懇切に扱った。私たちと共にいたベグたちにも、それ
51a ぞれに適わしいように、(51a) 地位や恩顧を与えた。スルターン・アフマド・タンバル *Sulṭān Aḥmad Tanbal* が最大の恩恵を受けた。彼は近習ベグ (*ichki beg*) のランクにあったが、大ベグ (*ulugh beg*) のランクに昇格させた。

私たちはサマルカンドを**7カ月間包囲**して、苦勞の末に獲得した。最初に到着した時、兵士らにあれこれといった事柄 (*olcha munchadāk nemä*) が生じていた。まず、サマルカンドを除く全ての諸地方が、私か、スルターン・アリー・ミールザーかに服属していた。服属したこれらの諸地方を略奪する事はできなかった。〔それに〕このように〔ずっと〕略奪・強奪され続けてきた地方から何かを取り立てる事自体、どうして可能であったであろうか？。兵士らの戦利品が尽きた。サマルカンドを征服した時、サマルカンドは荒廢の極みにあり、援助や種子・金子の前貸しが必要ですらあった。そこから何かを取り立てる余地などあったであろうか？。

こういった理由から兵らはすこぶる困窮していた。私たちも彼らに物を補給する事ができなかった。兵士らは家族の事をも思い出した。1人2人と脱走し始めた。最初に脱走したのはバヤン・クリー *Bayan Qulī* の子のハーン・クリー *Khān Qulī* であった。またイブラーヒーム・ベグチクであった。モグールらも全て逃亡した。後にはスルターン・アフマド・タンバルも逃亡した。

この騒ぎをしずめるため、私たちはホージャ・カーズィーを派遣した。〔ア
51b スフィにいる〕ウズン・ハサンが(51b) ホージャにすこぶる心酔・師事していたので、ウズン・ハサンの協力で逃亡した者たちの若干を罰し、若干を私たちのもとに送還する事ができればと考えたのであった。しかしこの騒ぎの煽動者、ここを脱走した者たちの悪行への煽動者がまさにこの恩知らずのウズン・ハサンその人であったらしい。全ての者がスルターン・アフマド・タンバルの逃亡

を境として、明らさまに反乱の姿勢をとった。

私たちはサマルカンド征服を目的に、何年も、懸命に軍をひきいた。スルターン・マフムード・ハーンは、数え上げられるような援助を何1つ与えられなかったにもかかわらず、サマルカンド征服後、アンディジャーンを要求された。ほとんどの兵士やモグールらが全て逃亡して、アンディジャーン、アフスィへ去ったこの時に当っては、ウズン・ハサンとタンバルはかの地方をジャハーンギール・ミールザーに与えるようにと要求した。しかしいくつかの理由から彼らに与える事は不可能であった。

第1には、私はハーンにこれらの地方を与えると約束してはいなかったが、ハーンはそれを求めている。ハーンが要求し続けている時にジャハーンギール・ミールザーに与えるには、ハーンとあらゆる点で合意しておく必要があった。

第2には、皆が逃亡してあの地方へ行ったというこのような状況下に、彼〔ジャハーンギール〕はまるで命令するかの如くに要求を出して来た。もしもっと
52a 前に (52a) この話がもちかけられたのであれば、全体的に対処の仕方があったであろう。〔しかし今は〕彼らの命令に誰が従うであろうか？。

そこにいたモグールとアンディジャーンの兵、さらに若干のベグたちや近習たちもアンディジャーンへ去った。私と共にサマルカンドには、ベグ、若党、貴賤あわせて約1,000人が残っていた。ジャハーンギールの側の者たちは彼らの要求が実現しなかったので、脱走した不安な人々を全て呼び入れて、自分たちの側に加わらせた。不安にさいなまれた人々は、その恐怖心から、このような事が起こる事を神に願っていたのであった。彼らはアフスィからアンディジャーンにむけ兵を進め、その反乱と敵対をあらわにした。

トゥールーン・ホージャという名の者は、〔モグールの〕バーリン部の出身で、勇敢で優秀な、奔放な若党 (qazaq yigit) の1人であった。私の父のウマル・シャイフ・ミールザーが目をかけていた。なお現在も寵愛されていたが、私自らが昇進させて、ベグの地位を与えた。驚くほど勇敢で奔放な若党であった。目をかけるに値する者であった。モグールらの内で私が目をかけた信用できる部下がトゥールーン・ホージャであったので、私は、サマルカンドからモグールの民が脱走し始めた時、彼を〔モグールの人々の所へ〕派遣した。人々に忠告して、不安を心から去らせ、人々が不安のために理性を失わないようにするためであった。

52b (52b) これらの煽動者・恩知らず〔ウズン・ハサンら〕は人々に種々の約束を与え、忠告、おどしを行っていたが、何の効果もえられない状態でいた。トゥールーン・ホージャの進路はイキ・スー・アラス İki-su-arası [「2河の間」] を経ていたが、この地はラバータク地区 (Rabatak örchini) とも呼ばれていた。ウズン・ハサンとスルターン・アフマド・タンバルは1隊の急襲隊をトゥールーン・ホージャにむけ派遣した。彼等行って、不意打ちをかけて彼を捕え、連行して殺した。ウズン・ハサンとタンバルはジャハーンギールを連れて来てアンディジャーンを包囲した。

私は先の出兵に当って、アンディジャーンにはアリー・ドースト・タガーイーを、またアフスィにはウズン・ハサンを置いた。後、ホージャ・カーズィーも〔アンディジャーンに〕来た。ホージャ・カーズィーはその籠城の際、私に味方するために、18,000頭の羊を城内の若党たちと、私たちと一緒にいた若党たちの〔アンディジャーンに残っていた〕家族とに分ち与えた。包囲されたさ中にも、私の母たち〔母と祖母〕とそしてホージャ・カーズィーから引続き以下のような内容の手紙が来た。「彼らは私たちをこのように包囲しております。もしあなたが来て、私たちの叫びに応じられなければ、事態は必ず悪化するで
53a あります。サマルカンドはアンディジャーンの兵力によって獲得されました。(53a) もしアンディジャーンさえ手中にあれば、そしてもしまた神が正義をもたらされるならば、サマルカンドをいつか必ず手中にできるであります」。引続いて、同様の趣旨の手紙が何通もとどいた。

その頃、私は1度病気にかかったが、回復に向っていた。しかし私は回復期を大事にして過ごす事ができなかった。私の身体はバラバラになっていた。この時また、私はすこぶる悪質の病いにかかった。私は4日間、物も云われず、人々は私の口に綿を使って水を1滴1滴したたらせていた。私と一緒に残っていたベグや若党や軽装の若党 (yigit yılang) は私の回復に絶望し、それぞれが物思いに沈んだ。まさにこのような状態の時に、ウズン・ハサンの従者が使者として到着し、けしからぬ言辞をもたらしたが、ベグたちが判断に誤りを犯して、私に会わせて彼に退去を許した。

5日後、私は少しよくなった。しかし私の言葉にはなお障害が残っていた。数日後、自分のいつもの状態にもどった。私の母たち、つまり私の母と、母の母であるイセン・ドウラト・ベギム、そして私の師であり父であるホージャ・

マウラーナーイェ・カーズィーから、前述のような手紙が何通も来て、このように懸命に私の来援を求めている時に、いったい人は、どんな心地で留まっておられようか？。

ラジャブ月〔1498年2/3月〕の土曜日、私たちはアンディジャーンめざして
53b サマルカンドを発った。この時 (53b)、私はサマルカンド城で **100日間** 王権を行使した (pādishāhlıq qıldım) 事になる。私がホジャンドに達したのは同じ土曜日であった。この同じ日に、アンディジャーンから1人の男が来て、これより1週間前の土曜日、つまり私たちがサマルカンドを出たのと同じ日に、アリー・ドースト・タガーイーがアンディジャーン城を反乱者たちに引渡したという知らせをもたらした。その詳細は次の如くであった。私の病臥中に私に会って退去を許されたウズン・ハサンの従者が、反乱者たちがアンディジャーン城を包囲した際に、行って、「王様は物が云えなかった。その口に綿を用いて水を1滴1滴したたらせていた。」と述べた。彼は行って、全くこれと同様の事をアリー・ドーストの前でも宣誓して述べた。アリー・ドーストはハーカーン門 (Khākān darwāza) にいた。この言葉を聞くと絶望的になり、反乱者たちを呼んで和平の条件をとりきめ、城を引渡した。城内には糧食にせよ兵士にせよ、何も不足しているものは無かった。〔城引渡しを〕決定したものはかの無神の小者の女々しさであった。彼は前述の〔バーブルの病についての〕言葉を自分の行為に対する云いわけとした。

アンディジャーンの占領後、彼らは私がホジャンドに來た事を聞くと、ホージャ・マウラーナーイェ・カーズィーを内城の門に不名誉なやり方でつるして
54a 殺害した。ホージャ・(54a) マウラーナーイェ・カーズィーの名はアブドゥッラー ‘Abd Allāh であったが、この名で知られていた。その系譜は父方でシャイフ・ブルハヌッ・ディーン・クルチュにさかのぼり、母方ではスルターン・イリク・マーズィーに至る。この一族はフェルガーナ地方で指導者、シャイフル・イスラーム (shaykh al-Islām), カーズィーの地位を占め続けて來た。ホージャ・カーズィーはホージャ・ウバイドゥッラー猊下の弟子で、あのお方の教えを受けられた。ホージャ・カーズィーが聖者である事 (walīgh) について私は何の疑念も持たぬ。かのお方の命をねらった者たちについては、ほんの短期間の後に、もはや何の痕跡すらも残らなかったという事実ほど、彼の聖者性 (walāyat) をよりよく証明するものは無いであろう。

ホージャ・カーズィーはすばらしい人物であった。彼には怖れは無縁であった。あのように勇敢な人を見た事がない。この属性も彼の聖者たる事の証しである。他の人々はいかに勇敢であろうとも、心がみだれ不安になるものだが、ホージャには全く心のみだれや不安が無かった。ホージャの死後、彼らはホージャに関係のあった人々、例えば従者、従士、部民、属民を全て捕えて略奪した。

私たちはアンディジャーンのためにサマルカンドを放棄した。〔今や〕アンディジャーンをも失ったという。私たちは「愚か者はここを出て、そこにも入れない」(ghāfil az ĭnjā rānda, wa az ānjā mānda) という〔ペルシア語の〕諺の如くになった。まことに苦しく困難な状態となった。何故なら、私は即位
54b して以来、このように私の従者たちや私の国 (54b) から離された経験が無かったし、また私が物心ついてこの方、このような困難や苦しみを体験した事が無かったからである。

私がホジャンドに到着すると、若干の無神論者的ふるまいの者たちは、〔ニザームッ・ディーン・アリー〕ハリーファが私の宮廷の中に居る事を心よしとせず、ムハンマド・フサイン・ミールザー〔ドゥグラト〕と幾人かの者たちをたきつけたので、私はハリーファにタシュケンド方面への退去を許した。私はカースィム・ベグをタシュケンドのハーンのもとに派遣して、アンディジャーンにむけ進軍してくれるよう頼んだ。ハーンも兵をひきいてアーハンギャラーン Āhangarān の谷を通して来て、ケンディルリク峠 (Kendirlik dābānı) の下に下馬した時、私もホジャンドから行っておじのハーンに会った。私はケンディルリク峠を越えて、アフスィ近郊にキャンプをはった。

向う側からも反乱者たちがそこにいた兵を集めてアフスィに来た。この時、人々はパープ城 (Pāp qurghanı) を「私に」〔与えよう〕といて固めていた。しかしハーンのちょっとした行軍の誤りのために、反乱者たちがパープ城を攻撃して奪った。ハーンは、その他の行動とか生活態度は良かったが、軍事とか指揮者としての資質の面では欠ける所が多かった。この場合も、もし彼がもう
1 行程進んでいたならば、まず戦う事なく地方を掌握できたはずであった。まさにそのような時に、反乱者たちの欺きの言葉に耳をかし、和平の話に応じ、
55a (55a) ホージャ・アブル・マカーリムと、当時ハーンのイシク・アーガー (ishik āghāsı) 〔「宮廷長」〕であったタンバルの兄のベグ・テルベ Beg Telbā

を使者として派遣した。彼らは自分自身の安全のために、若干の真偽入りまじった言葉を語って、ハーンと、間に立った者たちとのために分前、贈物を受けとった。かくしてハーンは軍をかえした。

私と共に残っていたベグたち、近習たち、若党たちのほとんどの者の家族はアンディジャーンにいた。彼らはアンディジャーンを取られた事で希望を失ったため、大小のベグたち、軽装備の若党たちの内、7～800人が全て私のもとを離れていった。離脱した者たちの中には、ベグではアリー・ダルヴィシュ・ベグ ‘Alī Darwish Beg, アリー・マズィード・カウチン, ムハンマド・バーキル・ベグ, シャイフ・アブドゥッラー・イシク・アーガー, ミーリーム・ラーガリーがおり、私のもとに留まった者たち、異郷での暮しと困難とを選択した者たちは、貴賤あわせておよそ200人以上、300人以下であったと思われる。ベグでは、カースィム・カウチン・ベグ, ヴァイス・ラーガリー・ベグ, イブラーヒム・サールーイェ・ミンリグ・ベグ Ibrāhīm Sārū-yi Minglīgh Beg, シーリーム・タガーイー, サイイディー・カラ・ベグ Sayyidī Qara Beg であり、近習では、ミール・シャー・カウチン Mīr Shāh Qawchin, サイド・カースィム・イシク・アーガー・ジャライル Sayyid Qāsim ishik-āghā Jalayr, カースィム・アジャブ Qāsim ‘Ajab, アリー・ドースト・タガーイーの子のムハンマド・ドースト, ムハンマド・アリー・ムバッシル, ホダーイ・ベルディ・トゥグチ・モグール Khudāy-berdi tughchī Moghūl, ヤール・タガーイー Yār Taghā’ī, バーバー・クリーの子のスルターン・クリー Sulṭān Qulī, ピール・ヴァイス Pīr Ways, シャイフ・ヴァイス Shaykh Ways (55b), ヤール・アリー・ビラール Yār ‘Alī Bilāl, カースィム・ミラーフル Qasim mīr-ākḥūr [ミラーフルは「厩舎長」], ハイダル・リカーブダール Ḥaydar rikāb-dār [リカーブ・ダールは「あぶみ持ち」] であった。

私にとっての怖るべき試練であった。私はどうする事もできず号泣した。それから私はホジャンドに来た。私の母と祖母、そして若干の私のもとに残った者たちの家族が、ホジャンドの私のもとへと送られて来た。そのラマザン月〔1498年4/5月〕をホジャンドで過ごした。私はマフムード・ハーンに人を遣し、援軍を求め、サマルカンドにむけ出発した。ハーンは息子のスルターン・ムハンマド・ハーニケ Sulṭān Muḥammad Khānikā とアフマド・ベグを4～5,000の兵と共にサマルカンドにむけ任命し、自らも出馬して、ウラ・テペま

で来た。私はそこでハーンに会い、サマルカンドにむけヤール・ヤイラク経由で進んだ。スルターン・ムハンマド・スルターンとアフマド・ベグは他の道を通して先にヤール・ヤイラクに到着していた。私はブルカ・ヤイラク *Burka Yaylaq* を経て、ヤール・ヤイラクのダルガの駐在地であるサングザール *Sang-zār* 城に到着した。スルターン・ムハンマド・スルターンとアフマド・ベグは、シャイバーニー・ハーンが来てシーラーズとその近辺を略奪したという情報を得ると退却した。やむを得ず私も軍をかえしてホジャンドに帰った。

私は王権に対する野望と征服に対する欲求を持っていたので、1度や2度、事がうまくゆかぬからといって、見て留まったりしていないで、アンディジャンにむかう考えで、援助を求めるため、タシュケンドのハーンのもとに
56a (56a) おもむいた。〔ハーンの母の〕シャー・ベギムと私の親族 (*uruq qayash*) らに、私はもう7～8年会っていないかった。その理由で、私は彼らにも会った。

数日後、サイイド・ムハンマド・ミールザー・ドゥグラト、アイユーブ・ベグチク、ジャーン・ハサン・バーリン *Jān Ḥasan Bārīn* が、7～800人程の兵と共に援軍として任命された。私たちは、この援軍を得ると、来て、ホジャンドに留まらず、過ぎて出て、急行してカンディ・バーダームを左手に過ぎて、来て、夜と共に梯子をかけて、ホジャンドから10ユガチ、カンディ・バーダームから3ユガチの道のりの地点にあるナスーフ城 (*Nasūkh qurghani*) を奪取した。メロンの熟する時期であった。ナスーフには1種のメロンがあって「イスマーイール・シャイヒー」と呼ばれていた。皮が黄色で、シャググリーン皮 (*keymokht*) に似た〔ザラザラした〕よいメロンである。種子はリンゴのようで、肉は指4本分もあるすばらしく美味のメロンである。あれに匹敵するようなメロンはその周辺では産出されない。

翌日、モゲールのベグたちが「我々の兵は少数である。この1城を取ったところで、何事にもならないであろう」と上奏してきた。まさにその通りであった。私たちは、そこに留まりその城を固める事を上策とはみなさず、ひき返して再びホジャンドに到着した。

この同じ年、ホスロー・シャーはバイスングル・ミールザーと共に兵をひきいてチャガーニーヤーンに至り、計略を用いてそこを取った。ホスロー・シャーはスルターン・マスウード・ミールザーに使者を送り (56b), 「来られよ。
56b

サマルカンドにむけ進まれよ。もしサマルカンドが手に入れば、1人のミールザーがサマルカンドに君臨し、もう一人のミールザーがヒサールに座す事にしよう」と伝えた。スルターン・マスウード・ミールザーのベグ、近習、軽装の若党たちは〔ミールザーに〕立腹していた。それは以下の理由のためであった。シャイフ・アブドゥッラー・バルラースがバイスングル・ミールザーのもとから、スルターン・マスウード・ミールザーのもとへ来た時、彼がミールザーの義父であったために、非常な愛顧を蒙った。ヒサール地方は小さな狭い地方であったにもかかわらず、彼の俸禄（‘ulūfa）を銅錢（fulūs）1,000万（ming tūmān fulūs）と定め、フッタラン地方をそっくり賜与した。しかしフッタラン地方にはスルターン・マスウード・ミールザーの多くのベグたちや近習たちが土地（tan）を所有していた。シャイフ・アブドゥッラーはその全てを支配下に収めた。彼自身とその息子たちが、全般的な事であれ些細な事であれ、宮廷の権限を握った。厭気のさした者たちは次々に脱出してバイスングル・ミールザーのもとに来始めた。

〔ホスロー・シャーは〕欺瞞をおりませた言葉でスルターン・マスウード・ミールザーをだまし、チャガーニヤーンから急行して、朝を告げる太鼓の時刻にヒサール城を囲んで奪取した。スルターン・マスウード・ミールザーは城外の居住区にその父が造ったダウラト・サラール Dawlat sarā [「幸せの邸」の意] という名の建物にいた。彼は城内に入れず、のがれて、シャイフ・アブドゥッラー・バルラースと共にフッタラン方面へと退いた。さらに途中でシャイフ・アブドゥッラーと別れ、アウバージュ Awbāj の渡しで渡河して、スルターン・フサイン・ミールザーのもとへとむかった。

- 57a (57a) 〔ホスロー・シャーは〕ヒサール地方を征服するとバイスングル・ミールザーをヒサールに置き、フッタランを〔弟の〕ワリーに与えた。数日後、バルフを囲む目的で出発した。自分より先に、ナザル・バハードゥルという名の大従士（ulugh nökār）を3～4,000人と共にバルフ近郊へ差し向け、3～4日後にバイスングル・ミールザーを連れて来て、バルフを包囲した。バルフにはイブラーヒーム・フサイン・ミールザーがいた。スルターン・フサイン・ミールザーのベグたちの内の多くの者もそこにいた。〔ホスロー・シャーは〕弟のワリーに大軍を授けてシャブールガン Shabūrghān を囲み、その近郊を略奪・劫略するために派遣した。ワリーは行って、シャブールガンを近くから

包囲できず、そこにいた兵を、ザルダク・チョリ Zardak Chöli〔チョルは「野、砂漠」〕にいる部民、部族を攻撃するために派遣した。行って、ザルダク・チョリを攻撃し、100,000頭を越える羊と3,000頭に近いらくだを取って来た。ワリーはその後、サーン・チャールヤク Sān Chār-yak 地方を攻撃し略奪し、山地で、陣を固めた若干の諸部族を捕えて来て、バルフで兄に合流した。

ホスロー・シャーがバルフを包囲した時、ある日、前述のナザル・バハードゥルという名の従者を、バルフのいく本かの水路 (arīqlar) を破壊するために派遣した。城内から、スルターン・フサイン・ミールザーが眼をかけたベグで
57b あるテングリ・ベルディ・(57b) サマーンチ Tengriberdi Samānchī が7~80人の若党と共に出撃し、ナザル・バハードゥルと一騎打となり、落馬させ、首を斬って城内に持って帰った。まことに勇敢に打って出て、めざましい働きをしたものである。

またこの同じ年、スルターン・フサイン・ミールザーはズーン・ヌーン・アングン Dhū al-Nūn Arghun とその息子のシャー・シュジャー Shāh Shujā' を撃つため兵をひきいて来攻し、〔アフガニスタン、ハルマンド川流域の〕ブスト Bust に下馬した。彼らはバディーウッ・ザマーン・ミールザーに臣従して、娘を与え、反乱・敵対の立場をとっていた。〔スルターン・フサインの〕軍にどの方面からも糧食が到着しなかった。飢えのために厭戦の気分が出始めていた時、ブストのダルガがブスト城を引渡した。ブストの蓄えに助けられて、彼はホラーサーンに帰還した。

スルターン・フサイン・ミールザーの如く強大な君主が、あのように装備をととのえ、あのように華々しく、何度もクンドゥズ、ヒサール、カンダハールに出兵しながら、征服できずに引きかえしたため、彼の息子たちやベグたちがかくも尊大となって、敵対し反乱を起こしたのであった。

春になるとスルターン・フサイン・ミールザーは、アスタラーバードを支配して敵対の立場をとった息子のムハンマド・フサイン・ミールザーの反乱をしずめるため、ムハンマド・ワリー・ベグ Muḥammad Walī Beg をはじめとするベグたちを大軍と共に急行させ、自らは〔ヘラートに近い〕ニシーン牧地 (Nishīn ulangi) に滞留した。その時、バディーウッ・ザマーン・ミールザー
58a とズーン・ヌーンの息子のシャー・ベグが (58a) 不意をついて兵をひきいてミールザーめざして来攻した。幸運にも、ヒサールを取られてスルターン・フサ

イン・ミールザーの所に向っていたスルターン・マスウッド・ミールザーが丁度この同じ日に到着した。またアスタラーバードに行っていた軍も帰り、まさにこの同じ日に、ミールザーに合流した。相對陣すると、戦もせず、バディーク・ザマーン・ミールザーとシャー・ベグは逃走した。

スルターン・フサイン・ミールザーはスルターン・マスウッド・ミールザーを厚遇し、女婿として跪かせ、好意と愛情をそそいでいた。ところが〔スルターン・マスウッドは〕これ以前に〔ヘラートに〕来てスルターン・フサイン・ミールザーに仕えていたホスロー・シャーの弟のバーキー・チャガーニーヤーニーにそそのかされて、ホラーサーンに留まらず、ある言いわけを用いて出奔し、スルターン・フサイン・ミールザーの許しを得る事なくホスロー・シャーのものへとおもむいた。

ホスロー・シャーはヒサールからバイスングル・ミールザーを招きよせた。この時、ウルグ・ベグ・ミールザーの子のミーラーン・シャー・ミールザー Mirān Shāh Mīrzā が父に敵対して、ハザーラ族の中に入り、ハザーラの所でも法外の行動をとってそこに留まりえず、彼もまたホスロー・シャーのもとへ来た。若干の浅慮の者たちは、〔これらの〕3人の王子たちと一緒に殺し、ホスロー・シャーの名でフトバを読ませようという意見であった。ホスロー・シャーは58b このやり方を上策と考えず、(58b) 幼少時から面倒を見て成長させ、またその後見人でもあったスルターン・マスウッド・ミールザーを、この5日のはかない現世の事どものために——それは彼〔ミールザー〕に対して誠実な行為ではなかったし、また誰に対しても決して誠実な行為ではないであろう——捕えた。そしてこの恩知らずの小者は王子の両眼に刃針を刺して盲目にした。

若干の彼の乳兄弟、友人、古くからの下僕らがスルターン・マスウッド・ミールザーを連れてサマルカンドのスルターン・アリー・ミールザーのもとにおもむく考えでケシュに到達した。しかしその一派〔スルターン・アリーら〕も〔マスウッドの〕命をねらう状況になったため、〔マスウッドは〕ケシュをのがれ、チャール・ジュ Chār-jū の渡しで〔アム川を〕渡り、スルターン・フサイン・ミールザーのもとへ行った。

このような不快な行動に努めるあらゆる者に対し、またこのような事どもに努力する人間に対し、100,000の呪いがかけられる。最後の審判の間ぎわに至るまで、誰もがホスロー・シャーのこの行為を聞けば呪詛せん事を。さらにこ

の行為を聞いて呪詛せざる者も、また呪詛されるに値する者と知れ。

この不快きわまり無き行為の後、〔ホスロー・シャーは〕バイスングル・ミールザーを即位させヒサールに帰らせた。ミーラーン・シャー・ミールザーにはサイイド・カーミル Sayyid Kāmil を援軍に加え、バーミーヤーン Bāmīyān 方面へ派遣した。

904年〔1498年8月19日—1499年8月7日〕の出来事

私はサマルカンドとアンディジャーにむけ、くりかえし進軍したが展望は開けず、再び引返してホジャンドに帰った。ホジャンドは小さな土地である。

59a 100人ないし200人の従者を持つ人物がやっとの事で (59a) 時を過ごす事ができる。しかし野望を持つ人物がどうして手をこまねいて留まっていられようか。

ムハンマド・フサイン・キュレゲン・ドゥグラトがウラ・テペにいた。私たちはサマルカンドに進軍するという野望をもって彼の所に人を派遣し、相談して、ホージャ猊下私有の村々の1つで、当時はムハンマド・フサインの支配下にあったヤール・ヤイラクの村々の1つであるパシャーガル Pashāghar をこの冬の間貸してくれるよう求めた。それは私たちがそこに留まって、サマルカンド地方に出来るかぎり進軍しようという目的のためであった。ムハンマド・フサイン・ミールザーも同意した。私はホジャンドを出発してパシャーガルにむかった。

ザーミーン Zāmīn に到着した時、私は発熱した。発熱にもかかわらずザーミーンを発って急行軍で山道を通りラバーティ・ホージャの前面に到着した。それは、シャウダール地区 (Shāwdār tūmānī) のダルガ駐在地であるラバーティ・ホージャ城を、敵の気付かぬ内に梯子をかけて登って占領するためであった。明け方に到着した。しかし住民が気づいた。そこでまた引返し、どこでも休息をとらず、パシャーガルに着いた。私は発熱にもかかわらず、13～14ユガチの道のりを苦しみ骨折りつつ踏破した。

数日後、イブラーヒーム・サールーとヴァイス・ラーガリー、シーリーム・タガーイーを近習のベグたち、若党たちと共に急行軍に任じた。行ってヤール・ヤイラク城を談合ないし実力行使によって入手するためであった。当時、
59b (59b) ヤール・ヤイラクはサイイド・ユースフの手中にあった。彼は、私がサマルカンドを離れた際、なお〔サマルカンドに〕残っていた。スルターン・アリー・ミールザーも彼に眼をかけていた。サイイド・ユースフ・ベグはその弟と息子をヤール・ヤイラク諸城の掌握・統治のために派遣していた。現在シヤールコト Siyālkot のハーキム職を占めているユースフの子のアフマドがその諸城にいた。わが方のベグたちや若党たちは行って、冬の間かけて、若干の

城を和平の談合によって入手し、若干の城を戦って力で取った。また若干を計略・策略を用いて盗み取って支配下に置いた。その地方ではモグールやウズベクの侵入にそなえて城壁 (qurghan) を持たぬ村は皆無であった。この時には私たちの故に、人々はサイイド・ユースフ・ベグと、彼の弟及び息子に疑心をいだき、彼らをホラーサーンへ退去させた。

この冬はこのような戦闘・退却で明け暮れた。春になると、彼らは和平のためにホージャ・ヤフヤー Khwāja Yahyā を派遣して来た。彼ら自らも軍に鼓舞されてシーラーズとカーブド Kābud の近郊へ来た。私たちのそこにいた兵は200人以上、300人以下であったであろう。4面には強力な敵がいた。アンディジャーンに進撃しても幸運の星はいかなる助けもしてくれなかった。サマルカンドに手をつけても、何の展望も開かれなかった。やむをえず和平の如きも
60a のを結び、私はパシャーガルから (60a) 帰還した。

ホジャンドは小さな土地で、1人のベグがそこでやっと暮せる程度であった。私たちはすでに1年半<p. 74 ないし2年に>近く家族・郎党と共にそこに滞在した。その地のムスリムたちも、この間、出来うるかぎりの出費を重ね、私たちに奉仕する事に誤る所がなかった。私はどんな顔をして、また再びホジャンドに行く事が出来ようか。ホジャンドに行ったとしても、人々は「私のために」何を為しうるであろうか。

おもむくべき住まい無く、

留まるべきすみか無し。

結局、まさにこの不安と混乱の内に、私たちはウラ・テペの南方にある諸夏営地 (yaylaqlar) へおもむいた。数日間、その近辺で自らの事どもに思いわずらい、行くべき、留まるべき地をも知らず、あてどもなくさまよって日を過ごした。ある日、この土地にいる時に、私たちと同様に亡国の状態でさまよっていたホージャ・アブル・マカーリムが私に会いに来た。彼は、私たちがどこへ行きどこに留まるつもりであるか、また何を為し何を為さなかったかを質問し、心を動かされ、私たちの情況に同情し、「フーティハ」(Fatīḥa) [「コーランの巻頭の章」] を読誦して去った。私も非常に心を動かされ、同情の念を禁じえなかった。

この日、午後の礼拝時よりおそく、谷の入口に1人の騎馬の者が出現した。この者はアリー・ドースト・タガーイーの従者と思われるヨルチュク Yolchuq

という名の者で、以下の伝言を伝えるために派遣されて来たのであった。「私は大変な罪を犯してしまいましたが、お願いでございます。どうか私の罪をお
60b 許し下さって、(60b) 私どもの所へお越し下さい。さすればマルギーナーンを
お委せし、私の罪が雪がれ、私の面目がとりもどされるような臣従・奉仕をいた
すであります」。

このような混乱と困惑のさ中にこの知らせがとどくと、私は全く躊躇する事
なく、ちょうど日没時に当たったまさにその時に、マルギーナーンにむけ急行軍
の速度で進んだ。この地とマルギーナーンの間はほぼ24～25ユガチであったで
あろう。その夜が明けるまで、またその日の正午の礼拝時まで、どこでも休息
をとらずに進んだ。正午の礼拝時に、ホジャンドのタング・アーブ Tang-Āb
という名の村に下馬した。馬を横たえ、馬にかいばを食ませ、夜半の太鼓の時
刻にタング・アーブを出発した。その夜が明け、次の日の太陽も沈み、またそ
の夜が明けるよりはやく私たちがマルギーナーンの1ユガチの地点に到達した
時に、ヴァイス・ベグと若干の者たちが心配してこのように上奏してきた。

「アリー・ドーストはありとあらゆる罪を犯した人物でございます。両者の間
を1～2度人が往来する事もせず、また会談や条件のとりきめもせぬ状態では、
とても信用して進めません」。たしかに彼らの心配はもっともであった。私たち
はしばし留まって相談した。結局、次のような結論が出された。「この心配に
61a は一理ある。しかし(61a) もっと前に心配すべきだった。私たちは3昼夜休ま
ず、留まらず、24～25ユガチの道のりをやって来た。馬にも人にももはや力は
残されていない。ここからどのようにして戻る事ができよう。戻ったとしても、
どこへ行ったらよいものか。こうして来てしまった以上、行かねばならぬ。何
事も神のお望みになる以外の事は起こりはせぬ」。このように決定して、神を
信じて進んだ。

朝の礼拝時 (sunnat waqtī), 私はマルギーナーン城の城門に到着した。ア
リー・ドースト・タガーイーは門の後ろに立って、門を開かず、誓約を求めた。
彼は誓約・条件をとりきめた後、門を開き、門の間で私に挨拶した。私はアリ
ー・ドーストに会った後、城内の1軒の適当な邸に下馬した。私と共にいたの
は大小合わせて240人であった。

ウズン・ハサンとスルターン・アフマド・タンバルがその地方の人々にすこ
ぶる圧制を加え、悪行をなしていた。その地方の人々は全て私を望んでいた。

マルギーナーンに入城して2～3日後に、私はカーシム・ベグに、パシャーガルの人々、新たに私の従者となった者たち、それにアリー・ドースト・ベグの従者たちの内から選んだ100人以上の兵を授けて、アンディジャーンの南方
61bにある山岳地帯の民、(61b) 例えばアシュパーリーヤーン *Ashpāriyān*, トゥルクシャーラーン *Turuqshārān*, チェクレク [32a 参照] といった人々とその周辺地帯にむけて派遣した。それは、談合によるにせよ実力を用いるにせよ、これらの人々を服属させるためであった。

さらに私はイブラーヒーム・サールー, ヴァイス・ラーガリー, サイイド・カラをアフシ方面へ100人近い兵と共に派遣した。ホジャンド川を渡って、その平地の諸城と山地の諸部族をあらゆる手段を用いて私たちの側につかせるためであった。

数日後、ウズン・ハサンとスルターン・アフマド・タンバルはジャハーンギール・ミールザーを連れて、集められる限りの騎兵、モグールを集結させ、アンディジャーンとアフシが軍に出す人々を軍に出させて、マルギーナーンを包囲する考えで、マルギーナーンの1シャルイー東方のサパーン *Sapān* という名の村に来て下馬した。1～2日後、彼らは隊伍を整え、武装して、マルギーナーンの居住区地域に來襲した。私はカーシム・ベグと、イブラーヒーム・サールー, ヴァイス・ラーガリーをはじめとする者たちを2方面に急行軍として派遣していたにもかかわらず、私のもとに少数が残っていた。残っていた若党たちは隊伍を整えて出撃し、敵が居住区を越えてこちらに來る事を許さなかった。その日、ターバン巻きの小姓ハリール (*Khalīl chuhra-yi dastār-pīch*) が進撃し、めざましい働きをした。敵は來攻したが何事も為し得なかつ
62a た。2人共、(62a) 城の近くへは來なかった。

カーシム・ベグがアンディジャーンの南方の山地へ行くと、アシュパーリーヤーン, トゥルクシャーラーン, チェクレクそしてその周辺の山地, 平地にいた農民や遊牧民が全て服属した。騎兵らの内でも、1人2人と私たちの所に逃げて來はじめた。アフシ側へ川を渡って行っていたイブラーヒーム・サールー, ヴァイス・ラーガリーをはじめとする者たちにパーブ城とさらに1～2の城が服属した。

ウズン・ハサンとタンバルは暴虐非道の邪教徒的な人物であった。農民たちやこの地方の人々は彼らによってすこぶる苦しめられていた。アフシの有力

者の1人であるハサン・ディクチュ *Hasan Dikchä* はその一党と共に、アフ
スィの一群の悪漢・ごろつき (*lawand wä awbāsh*) たちをたきつけて棍棒を
ふるわせ、アフスィの外城にいた者たちを打ちのめして内城に押し込み、イブ
ラーヒーム・サールー、ヴァイス・ラーガリー、サイイディー・カラをはじめ
とする人々を招き、アフスィの外城に入らせた。

スルターン・マフムード・ハーンは、ハイダル・キュケルダシュの子のバン
ダ・アリー *Banda ‘Alī* と、当時シャイバーニー・ハーンのもとを遁れてハ
ーンのもとに来ていたハージー・ガーズィー・マンギト *Hājji Ghāzi Manghit* と、
さらにバーリン部族軍 (*Bārīn tūmāni*) とをそのbegたちと共に、私たちの所へ
援軍として任命していた。彼らはまさにこの時到着した。この知らせがウズン
62b ・ハサンにとどくと、彼はあわてふためいて、眼をかけていた(62b) 従者たち、
すぐれた若党たちをアフスィの内城にむけ援軍に任命して派遣した。日の出前、
彼らは河岸に到達した。私たちの軍とモグール軍はそれを知ると、1団の人々
を、馬の武装をといて裸にして、川を渡らせた。敵の援軍はあわてて、船を上
にひき上げもせず、渡った地点で船を離した。彼らは城に行けず、そのままそ
こに下馬した。わが軍とモグール軍が両岸から馬を裸にして〔川に〕入り始め
た。船上の者たちは全く戦う事ができなかった。ただ〔敵の〕カルルガチ・バ
フシ *Qarlughach Bakhshī* がモグールのbegの息子の1人を呼んで、その手を
とらえ、刀で打って殺した。しかしそれも何の役にも立たなかった。何故なら
事態の趨勢はすでに決していたからである。この行為は、船上の者のほとんど
が死におもむく原因となった。〔わが軍は〕ただちに川にいる者たちを全てと
らえ、全員を殺害した。ウズン・ハサンの有力な部下の1人がカルルガチ・バ
フシであり、ハリール・ディーワーナ *Khalīl Dīwāna* であり、カーズィー・
グラーム *Qādī Ghulām* であった。この内の1人カーズィー・グラームは奴隸
である (*qulluq*) という口実で釈放された。さらに有力な若党たちの中には、
〔現在〕私のもとで有力であるサイイド・アリー *Sayyid ‘Alī* と、さらにハイ
ダル・クリー *Haydar Qulī*、クリーケ・カーシュガリー *Qulikā Kāshgharī* が
いた。敵の70~80人のすぐれた若党たちの内、釈放された者は、この5~6人
63a を(63a) 越えなかった。

敵はこの知らせを聞くとマルギーナーン付近に留まりえず、アンディジャー
ン方面にむけ敗残者の如くにして移動した。彼らはアンディジャーンにウズン

・ハサンの義兄弟のナースィル・ベグ *Nāṣir Beg* を置いていた。彼は、その陣営の第2位の人物ではなかったにせよ、第3位という点では疑問の余地が無い。経験に富んだ人物であった。勇敢さも持ち合わせていた。彼はこの状況を知り、彼らの基盤がくずれた事を知ると、アンディジャーン城を固め、私の所へ人を遣した。彼ら〔ウズン・ハサンとタンバル〕がアンディジャーンに到達して城が固められているのを知ると、2人の意見が合わず、分裂して、ウズン・ハサンはその一族のいるアフスィにむけ退却した。スルターン・アフマド・タンバルは自らの領地のオシュへむかった。若干の近習・若党たちがジャハーンギール・ミールザーをウズン・ハサンの所から奪い取り、逃亡して、なおオシュに到達していないタンバルの所に行って合流した。

アンディジャーンが固められたというニュースが私のもとに届いた。私は躊躇する事なく、日の出にマルギーナーンを出発し、正午にアンディジャーンに到着した。ナースィル・ベグとその子のドースト・ベグ *Dūst Beg*, ミーリム・ベグ *Mīrīm Beg* に会見し、挨拶を交し、恩恵・恩愛の言葉で彼らに希望を持たせた。神のお恵みにより、2年近く私の手を離れていた父の所領が

63b (63b) **904年ズィール・カーダ月**〔1499年6/7月〕再び私の手にもどった。

ジャハーンギール・ミールザーと合してオシュにむかっていたスルターン・アフマド・タンバルがオシュに入ると、オシュでも暴徒ら (*qızıl ayaq*) が棍棒をふるってさんざんに打ちのめし、オシュを空にして私たちのために守って、私たちの所へ人を派遣してきた。ジャハーンギールとタンバルは数名と共に途方にくれて進み、ウズケンド *Özkend* に入った。

アンディジャーンに入城できなかったウズン・ハサンはアフスィ方面へ進んだ。彼らが行ってアフスィの内城に入ったという知らせがもたらされた。この人物が首謀者・首魁であったから、この知らせがとどくと、私たちはアンディジャーンに4～5日以上は留まらず、アフスィにむかった。アフスィに到着すると、彼は如何ともなし難く、誓約と生命の保証を求め、城を引渡した。私は数日間アフスィに留まって、アフスィとカーサーン及びその方面の諸務を片づけ、急行して来てくれていたモグールのベグたちに〔タシュケンドへの〕退去の許しを与え、ウズン・ハサンをその一族郎党と共に連れて、アンディジャーンに帰った。アフスィには、かつては近習の階級にあったが、私の所でベグの階級に登っていたカーシム・アジャブ *Qāsim ‘Ajab* を仮に一時的に置いた。

誓約がなされていたので、私はウズン・ハサンの生命・財産を奪い損う事なく、カラ・テギン Qara-tegin 道をとって<p. 79 ヒサール>方面に (64a) 行く許しを与えた。彼は数名と共にヒサールへむかった。他の全ての彼の従者たちは離れて残った。この時代に、私たちに属した人々や、ホージャ・カーズィーとその従者たちを捕え略奪したのがこの人々であった。私たちは若干のベグたちと相談して以下の如く決定した。このように災難・破壊をひきおこし、このように私たちに属する信心深きムスリムたちを捕え略奪したのがこの連中である。彼らは自らのベグたちに対しても忠誠をつくさなかった。彼らが私たちに忠誠をつくす事などあり得ようか。もし私たちがこの連中を捕えたとして非難される事は無いであろう。特に、彼らが私たちの目の前でかつて私たちが所有した馬に乗り、私たちの衣類を身につけ、私たちの物であった羊を食べて行き来しているのを、誰かがまんする事ができよう。もしも私たちが許可を与えて彼らを捕え、彼らを略奪する事をせずに、私たちと放浪・辛苦を共にした人々の持物である事が分る品々を全て持主の手に返すよう彼らに命ずるのであれば、彼らはこの事をむしろ幸せと思い、有難い事と思わねばならぬ。

確かにそれはもっともと思われた。私たちと共にいた者たちは、自分のものと分る諸物を取るよう命令された。これは理由のある事であり、正当な事であった。しかしやや性急に過ぎた。ジャハーンギール・ミールザーの如きやっかいな人物が私たちの所にいる時に、人々を (64b) このように混乱させる事はまったく無意味であった。征服とか統治に当り、若干の事柄は表面的には正しい行為だと思われても、それぞれの内面には無数の洞察が必要不可欠である。このような私たちの1つの浅はかな命令のために、どれ程の混乱・反乱が勃発した事か。そして私たちが2度目にアンディジャーンを出奔しなければならなくなっても、私たちが無思慮にも出したまさにこの命令の故であった。この理由からモグールたちは彼ら自身に対して疑心暗危を生じ、イキ・スー・アラスとも呼ばれるラバータク地区を経て、ウズケンド方面に移動し、タンバルにむけ人を派遣した。

私の母のもとには1,500〜2,000人に近いモグール・ウルスの出身者がいた。さらにヒサールからハムザ・スルターン、マフディー・スルターン、ムハンマド・ドググラトと、彼らと共に同じ程の人数のモグールが来ていた。常に悪行・罪行はモグールの民によって引起こされてきた。現在までに、彼らは5度私

に敵対した。私との関係が薄かったという理由で敵対したのではなかった。彼らはこのような行動を自らのハーンらに対しても繰返していた。

この〔モグールの離叛の〕知らせをスルターン・クリー・チュナク *Sultān Qulī chinaq*〔チュナクは「鎧持ち」〕がもたらした。その父のホダーイ・ベル
65a ディ・ブカク *Khudāy-berdi Buqaq* を (65a) 私はモグールらの間では寵愛していた。しかしこの父は以前に歿し、彼自身はモグールたちと共にいた。よくやった。自らの部族、部民を離れてこの知らせをもたらしたのである。彼はこの時はよい働きをしたが、後には、このような奉仕をたとえ無数にしたとしてもとうてい覆いつくしえない程の恥ずべき諸行為を行なった。それについては後に述べる予定である。後の恥ずべき諸行為も モグールの属性 (*Moghūllıq*) のもたらした結果の1つであった。

ニュースが私たちの所にとどくと私はbegたちを集めて会議を開いた。begたちは「これは小事です。王様が出馬する必要はありません。カースィム・begに全てのbegたちと兵をひきいて行かせるがよろしい」と述べた。そのように決定された。彼らは安易に考えた。この判断は誤っていたらしい。この日、カースィム・begがbegたちと兵をひきいて出発した。その間にタンバル自身が来てモグールらに合流したらしい。翌日早朝、イラミシュ川 (*Ilamış-daryāsı*) のヤス・ケチト (*Yası-kechit*)〔ケチトは「渡し」〕という名の渡しを渡った時、相対峙した。よく戦った。カースィム・begは自らスルターン・ムハンマド・アングン *Sultān Muḥammad Arghun* と一騎打となり、2～3合し合ったが、首を取るのを許さなかった。多くの若党たちが打ち合った。しか
65b し結局、敗北をきった。(65b) カースィム・beg, アリー・ドースト・タガーイー, イブラーヒーム・サールー, ヴァイス・ラーガリー, サイイディー・カラ, それに3～4人のbegや近習が脱出したが、他のほとんどのbegや近習たちは敵の捕虜となった。捕虜となったbegや近習たちには, アリー・ダルヴィシュ・beg, ミーリーム・ラーガリー, タガーイー・begの子のトカ・beg *Toqa Beg*, アリー・ドーストの子のムハンマド・ドースト, ミール・シャー・カウチン, ミーリーム・ディーワーンが含まれていた。

この戦で2人の若党が奪戦した。私たちの側からはイブラーヒーム・サールーの弟たちの1人であるサマド *Şamad* という者, そして敵側からはヒサール・モグールの1人であるシャフスワール *Shahsuwār* という者が一騎打となっ

た。シャフスワールが猛烈に打ちかかったので、その刀が胄を貫いてサマドの頭にしっかりと達した。この負傷にもかかわらず、サマドは刀をふるってシャフスワールの頭から手のひら程の大きさの骨をそぎ取った。シャフスワールは胄を付けていなかったのであろう。人々はシャフスワールの頭を開頭した。彼はよくなった。サマドの頭を開頭術をほどこす者がいなかった。3～4日後、彼はその傷のために死んだ。

この敗北は、私たちが放浪と逆境から解放され、新たに領地を獲得した時だけに、すこぶる時宜にかなわぬ敗北であった。わが方の主柱の1人であったカンバル・アリー・モグールは私たちがアンディジャーンを獲得した時にはその
66a 領地に行って(66a)不在であった。かくして、タンバルがジャハーンギールを連れて来て、アンディジャーンの1シャルイーの所にあるアイシュの丘(poshte-yi 'Aysh)の前の牧地に下馬した。彼は1～2度、チール・ドフタラーンChil-dukhtarān 経由で隊伍を整えてアイシュの丘の麓まで来攻した。私たちの若党たちは居住区、果樹園の外に隊を整えて出撃した。敵は前進できず、丘の麓からむこうへと退却した。タンバルはこの近郊に来た時、捕虜にしていたベグたちの内、ミーリーム・ラーガリーとトカを殺害した。彼はこのあたりに1カ月近く滞留したが何事も為しえず、オシュ方向にむかって退却した。オシュはイブラーヒーム・サールーに与えられていた。彼の部下がそこにおり、オシュを固めた。

905年〔1499年8月8日—1500年7月27日〕の出来事

私は諸地方の騎兵，歩兵らにむけて急ぎトゥワチらとムハッスィル (muḥa-ssil [召集人]) らを派遣した。またカンバル・アリーと，それに諸地方に行っていた全ての兵士たちの所にも，間ちがいの無いように，トゥワチらを走らせた。盾，つるはし，おの，それに何であれそこにいた兵士が必要とする諸物資・諸物品を集めるために手ぬかりのない徴集人 (muḥassil) たちを任命した。軍に加わる騎兵・歩兵を諸地方からさがし求め，またあちらこちらに公務のために赴いていた従者・騎兵らを集めさせて，とにかく神を信じ，ムハッラム月 66b (66b) 18日〔1499年8月25日〕，私はハーフィズ・ベグの庭園 (chār-bāgh) へと出発した。

1～2日間，庭園に留まり，なお必要な諸物資・諸物品を整えそろえ，オシュ方面の反乱者たちにむけて，右翼，左翼，中軍，先鋒軍，騎兵，歩兵を整列させ，隊伍を整えて進んだ。オシュ近郊に到着した時，敵がオシュ近郊に留まりえず，オシュ北方のラバーティ・サルハング地区 (Rabāṭ-i Sarhang örchini) 方面へと退却したとの情報に接した。私はその夜はラートケンド村 (Lātkend kent) に下馬した。翌朝，隊伍を整えてオシュを過ぎる際，敵がアンディジャー方面へむかったという情報に接した。私たちもウズケンドにむかった。私たちは，私たちより先にウズケンド近郊を攻略するために急襲隊を分遣した。

アンディジャーにむかった敵は，夜陰に乗じて壕に入り，城壁に梯子をかけたが，その時城中の人々が気付いたので，何事も為しえないで退却した。私たちの急襲隊も行ってウズケンド近郊を攻略したが，たいした成果は得られずに帰還して来た。

オシュの諸城の中で，マーズー城 (Mādhū qurghani) はとりわけ堅固さで知られた城であったが，そこにタンバルは弟のハリールを，200～250名の兵と共に 67a おいて，(67a) その城を固めていた。私たちはもどって来て，マーズー城に戦をしかけた。マーズー城はすこぶる堅固な城である。北側は河床 (say) であるが，〔上までは〕すこぶる高い。もし河床から矢を射たならば，たぶん城壁にはとどくであろう。1本の地下水路 (āb-duzd) 〔「水泥棒」の意〕がこの同じ側にある。城から谷底 (quy) まで，わき道のように両側から壁を立てて，

導いて水の所に到達させている。3 方の丘の側は壕である。〔城が〕河床に近い
ため、彼らは河床の石の内から、きわめて巨大な、大釜のような石を城内に
運び入れていた。このような城攻めの際に、マーズー城で投げ落された程巨大
な石を他の城では投げられた事が無かった。

カッタ・ベグ Katta Beg の兄のアブドゥル・クドゥース・コフブル ‘Abd
al-Qudūs kohbur〔コフブルは「山切り人」〕は城壁の下まで出撃していた。城
壁〔の上〕から〔敵が〕あのような石を投げたので、彼はどこにも大地に全く
足をつけられず、まっさかさまにあれ程高い所から、城の土塁の底部の所まで
ころがって来た。しかし彼はそれで死なず、すぐに乗馬して去った。次には水路
の所でヤール・アリー・ビラールの頭にむけ強裂に石が投げられた。後、彼
67b の頭に開頭術がほどこされた。多くの人々が石で (67b) 死んだ。

私は朝、戦を始めた。昼前に水路の所を占領した。夕刻まで戦が続いた。私
が水路の所を取ったので、彼らはふみ留まる事ができず、翌朝までに生命の保証
を求めて出城した。タンバルの弟のハリールをはじめとする70～80ないし100
名の者たちを捕虜にしてアンディジャーンに送った。保護監督下におくため
であった。わが軍のベグ、近習、そしてすぐれた兵士たちの内には彼らの側の捕
虜になっている者もいた。この〔捕虜交換の〕仕事はうまくいった。私はマー
ズーを取って帰ると、オシュの村々の1つであるウンジュ・トゥパ Unju-tupa
という村に下馬した。

あちら側ではタンバルがアンディジャーンからひき返してラバーティ・サル
ハング地区の村々の1つであるアービ・ハーン Āb-i Khān という所に下馬し
た。この両軍の間は1ユガチであったであろう。この時、カンバル・アリーは
病気のためオシュへ行った。

私は**ひと月**ないし**40日間**〔そこに〕滞留した。戦にはならなかった。しかし
毎日、私たちの側の食糧係と彼らの側の食糧係が矢を射合った。この間敵は夜
ごと、宿営の周囲を嚴重に警戒していた。壕を掘り、壕を作らぬ場所には枝を
立てていた。そこにいた騎兵を全て武装させて、壕の所まで出むかせていた。
68a (68a) このような警戒にもかかわらず、3日か4日に1度は夜と共に軍の所で
さけびやと時の声がきかれた。ある日、食糧係の前方にサイイディー・ベグ・
タガーイーが行っていた。敵の兵が襲って来て、あっという間に戦の最中にサ
イイディー・ベグを捕虜にした。

〔バイスングル・ミールザーについて〕

この同じ年、ホスロー・シャーはバルフにむけ進軍する考えで、バイスングル・ミールザーを呼び、クンドゥズに連れて来て、バルフにむけ出馬した。アウバージュに到達した時、悪しき星のもとに生まれ、邪教徒のともがらであるホスロー・シャーは王権をねらって——それにしても王権があのような非人間的な無教養の者たちの手にどうしてとどく事があるだろう。彼には由緒正しい生まれも血筋も、また教養、思慮、分別、勇気、公正、公平も何1つとしてそなわっていない——バイスングル・ミールザーをそのbegたちと一緒に捕え、ミールザーの首に弓のつるをかけ、**ムハッラム月10日**〔1499年8月17日〕、あのように気立てのよい、美点に満ちた、思慮と血統にかざられた王子を殺害した。さらにそのbegや近習らの内の若干の者をも殺した。

誕生と系譜 **882年**〔1477/78年〕、ヒサル地方で生まれた。スルターン・マフムード・ミールザーの2男である。スルターン・マスウード・ミールザーより年下で、スルターン・アリー・ミールザー、スルターン・フサイン、スルターン・ヴァイス・ミールザー（通称ハーン・ミールザー）より年上であった。その母はパシャ・ベギム Pash Begim であった。

68b **姿形 (68b) と習慣** 眼の大きい、青白い顔の、中背の、トゥルクメンの顔だちをした優雅な若者であった。

品行と生活態度 公正な、男らしい、気立てのよい、すぐれた王子であった。彼の師のサイイド・マフムード Sayyid Maḥmūd はシーア派教徒 (shī'ī) であったらしい。このためバイスングル・ミールザーも〔この異端に〕汚染されていた。彼が後にはサマルカンドでかの悪しき信仰から回心して、浄らかな〔正統派の〕信徒になったと人々は云っていた。すこぶる酒 (chaghır) を好んだ。酒を飲まぬ時は礼拝を行なった。彼の寛大さ、気前のよさは度をわきまえていた。ナスフ・ターリーク (naskh-ta'liq) 体の書をよくした。絵画でも腕は悪くなかった。詩をも巧みにものしていた。アーディリー 'Adilī [「公正」] を雅号にしていた。その詩は、詩集を編むまでにはなっていなかった。この冒頭の1句 (maṭla') は彼の作である。

われ力なく、影のごと、あなたこなたへと倒れふしぬ。

よるべき壁のなかりせば、ただとこしえに倒れふしなむ。

サマルカンドではバイスングル・ミールザーのガザル (ghazal) [抒情詩] が

非常によく知られており、ミールザーの詩を見かけぬ家は少い程である。

戦争 2度戦った。1度は〔モグールの〕スルターン・マフムード・ハーンとの戦である〔30b 参照〕。〔1495年に〕彼が最初に王位に即いた時、スルターン・マフムード・ハーンはスルターン・ジュナイド・バルラースらにそそのか
69a されて、サマルカンド征服を（69a）目的に兵をひきいてアク・キョテル Aq-kötel 〔「白い峠」〕を越え、ラバーティ・ソグド Rabāt-i Sughd とカンバーイ近郊に到着した。バイスングル・ミールザーはサマルカンドを出て、カンバーイで戦い、大いに破り、3～4,000人のモグールを打首にした。ハーンの頼りとした (ḥall-o-‘aqd) ハイダル・キュケルダシュがこの戦で戦死した。

もう1度はブハーラーで〔弟の〕スルターン・アリー・ミールザーと戦って敗北した〔37b 参照〕。

領地 父のスルターン・マフムード・ミールザーはブハーラーを与えていた。〔1495年1月の〕父の死後、父の配下のベグたちが集まって相談して彼をサマルカンドで王位につけた。ブハーラーもしばらくはその領城内に含まれていた (muning dīwānīgha dākhil edi)。〔1495年5/6月の〕タルハン族の反乱の後、彼の支配下から離れた。〔1497年11月末〕私がサマルカンドを取った際、〔クンドゥズの〕ホスロー・シャーの所へ逼塞して行った。ホスロー・シャーはヒサルを取って〔彼に〕与えた。

子供は1人も残さなかった。ホスロー・シャーのもとへ来た時、彼は父方のおじスルターン・ハリール・ミールザー Sulṭān Khalīl Mīrzā の娘を娶った。他には妻妾はいなかった。

彼は、1人の人間を自前で取りたてて、有力なベグにするといった、独立性を持った統治はしなかった。彼のベグたちは、しょせん、彼の父やおじの
69b (69b) 配下のベグたちであった。

バイスングル・ミールザーの死後、クチュ・ベグ Quch Beg の父のスルターン・アフマド・カラウル Sulṭān Aḥmad qaraul が兄弟・一族・郎党と共に「私たち〔バーブルら〕に〔加勢しよう〕」と云ってカラ・テギン地方を出て到着した。オシュで病気になっていたカンバル・アリーも病床から起き上って到着した。このような時期に思いがけない援軍であるスルターン・アフマド・カラウルがその一党と共に来て加った事を吉兆と考えて、私たちは次の朝、敵

にむけ隊伍を整えて進んだ。敵はアービ・ハーンで迎えうつ事をせず、その宿営地から移動した。若干のテント、じゅうたん (gelim), 輜重 (pārtāl) の如き品々が兵士の手に落ちた。私たちは到着して、その宿営地に下馬した。

この日の夕刻、タンバルはジャハーンギールを連れて、私たちの左方をまわって、フーバーン Khūbān [70a では Khūnān] という村に到着してそこに入った。その村はアンディジャーン方面の私たちの側にあり、私たちの所から 3 ユガチの地点であった。翌朝までに私たちも右翼, 左翼, 中軍, 先鋒を整え、馬によろいをつけ、甲冑に身を固め、隊列を整え、盾をかかげた歩兵を前に出して敵にむかって進んだ。私たちの右翼はアリー・ドースト・タガーイーであった。その族党と一緒にであった。左翼はイブラーヒーム・サールー, ヴァイス・ラーガリー, サイイディー・カラ, ムハンマド・アリー・ムバッシル, ホー
70a ジャ (70a)・カラーン・ベグ Khwāja Kalān Beg の兄のキチク・ベグ Kichik Beg, そして若干の近習たちであった。私はスルターン・アフマド・カラウルを、またクチュ・ベグをその兄弟らと共に左翼に任じた。カーシム・ベグは中軍で私の傍らにいた。先鋒はカンバル・アリーと若干の近習たちであった。

私たちはフーナーン〔又はフーバーン〕の東南方から、フーナーンから 1 シャルイーの所にあるサカー Saqā という名の村に到達した時、敵兵がフーナーン村から隊伍を整えて出撃した。私たちもより急いで進んだ。整列させていた歩兵たちは、注意を守って留まり、会戦の際には後方に残っていた。神の御加護により彼らを必要としなかった。到着するや否や、私たちの左翼の兵がより早く敵の右翼と交戦した。ホージャ・カラーンの兄のキチク・ベグがそこで奪戦した。ムハンマド・アリー・ムバッシルもキチク・ベグについて戦った。かくして敵は支えきれず逃走した。左翼と先鋒には〔敵と〕向い合っ
(peshā-pesh) 戦は波及しなかった。多くの〔敵の〕若党たちが連れてこられた。私たちは打首にするよう命じた。私たちのベグたち, カーシム・ベグ, アリー・ドースト・ベグ, 特にアリー・ドーストは、用心と軍を指揮下におく
70b 事とを重く見て、追跡者を (70b) 遠くまで派遣する事を得策とみなさなかつた。このため、多くの敵兵を捕えそこねた。

私たちはフーナーン村に下馬した。これが私の初めての会戦 (maṣāff urushi) の経験であった。至高の神はその自らなる好意と寛大さによって勝利をお恵み下さった。私たちは吉兆と考えた。翌朝までに、私の母の〔義〕母、つまり私

の〔義〕祖母のシャー・スルターン・ベギムがアンディジャーンから到着した。ジャハーンギールがもし捕えられたのであれば命乞いをしようと思って来たのであった。

冬が近づいていたが平地 (yazı) には穀物・飼料が残されていなかったの
71a 私はウズケンドに向う事を得策と考えず、アンディジャーンに帰った。数日後、
相談して、以下の如く決定した。すなわち、アンディジャーンに冬営しても敵
に何の損害・損傷も与える事ができない。というよりむしろ敵は、略奪とかゲ
リラ活動によって強化される可能性がある。味方の兵が食糧不足に悩んだりせ
ず、また敵をこれまでのように悩ませておくには一カ所に冬営すべきであると。
この策を実行するため、私たちは、イキ・スー・アラスとも呼ばれているラバ
ータク地区のアルミーヤーン Armīyān, ヌーシャーブ Nūshāb 付近 (71a) に
冬営する考えで、アンディジャーンを出発し、前述の村々の近郊に到着して冬
営地を設営した。

この一帯はすばらしい狩猟地である。イラミシュ川に近い多くの森には沢山の
雌雄の鹿や猪がいる。非常に小さな森には、きじや野兎が多くいる。丘には
きつねがまことに多い。そして多彩である。ここのきつねは他所のきつねに比
べてよく走る。私はこの冬営地に滞在中に 2～3 日に 1 度狩をするために出馬
した。大きな森に火を放って雄鹿雌鹿を狩った。小さな森には包囲網を形成し
て、きじに鷹を放ったり、弓弦に矢をつがえた。きじは無限であった。その冬
営地に滞在したあいだ中、きじの肉が豊富であった。

この冬営地に滞留中に、私が新たに目をかけてベグの位に昇進させたホダー
イ・ベルディ・トゥグチ Khudāy-berdi tughchı が 2～3 度馬をおりてタンバ
ルの側の略奪者 (qazaq) を攻撃し、首を切って持って来た。アンディジャー
ンとオシュからも〔我が軍の〕冒険者的な若営たちが大胆なやり方で、途中休
まずに進んで、敵の馬群を蹴ちらし、<p. 88 兵士らを殺し>、すこぶる敵を
弱らせた。もし私がその冬をその冬営地で最後まで過ごしていたならば、まず
71b おそらくは (71b) 敵は春までにまったく戦わずして壊滅していたであろう。

まさにこのように敵を弱らせ悩ませていた時に当って、カンバル・アリーが
その領地へ帰る許可を求めた。私がこのような状況判断を挙げてやめさせよう
とする程、彼はますます無視した。彼は驚く程軽薄で、軽率な小者であった。
やむを得ず退去の許可を与えた。彼の以前の領地はホジャンドであった。当時、

私はアンディジャーンを取った際、彼にイスファラとカンディ・バーダームをも与えていた。私たちのbegたちの間で最も多くの領地を持ち、最も多数の従者を所有していた者がカンバル・アリーであった。他のいかなる者の従者も領地も彼程ではなかった。

私たちは**40～50日間**、その冬営地にいた。私はカンバル・アリーに退去の許可を与えた際に、若干の兵士たちにも退去の許しを与えた。私たち自身もアンディジャーンに帰った。

私たちが冬営地とアンディジャーンにいたこの間に、タンバルの部下はたえずタシュケンドのハーンのもとに行き来していた。ハーンの息子のスルターン・ムハンマド・スルターンの後見人で、ハーンがすこぶる寵愛していたbegであるアフマド・begはタンバルの父と同一の母から生まれたおじであった。ハーンの宮廷長 (ishik āghā) であったbeg・テルベはタンバルの同腹の兄であった。彼らは行き来して、ハーンに、タンバルにむけ援軍を送るよう云いくるめた。

72a 援軍より先に、beg・(72a) テルベが家族・一族郎党をタシュケンドに置いて、彼自身来て弟のタンバルに加った。beg・テルベは生まれて以来この方、モグーリスターンにおり、モグールの間で成長し、都市 (wilāyat) には入った事が無かった。彼は都市の君主に仕えた経験が無く、ハーンたちにのみ仕えていた。

この時、驚いた事が起こった。私がアフシに仮に一時的に置いていた〔63b 参照〕カーシム・アジャブが少数の、本隊と離れた〔敵の〕1団の後を追って行って、ビチル・アタ Bichir-ata でホジャンド川を渡っているタンバル側の大军に遭遇して捕虜にされた。

タンバルは私たちの兵が四散したという情報に接し、また兄のテルベがハーンと相談の上で来ており、〔ハーンからの〕援軍の到来について確信を持てる状況になると、ウズケンドを出てイキ・スー・アラスに到着した。この間にハーンがタンバルに対する援軍として息子のスルターン・ムハンマド・ハーニケ (通称スルターニム) をアフマド・begと共に任命し、5～6,000の兵を与えたという確かな情報がカーサーンから届いた。彼らはアルチャ・ケント Archa-kent 道を通して来てカーサーンを包囲した。

私たちも遠方にいる味方の事は考えず、そこに居た部下たちと共に、ただち

72b に、冬の厳寒のさ中、神を信じ、アンディジャーからバンディ・(72b) サー
ラール Band-i Sālār 道を取ってスルターニムとアフマド・タンバルにむけ出
発した。その夜はどこにも留まらず、夜を徹して進んで、朝アフスィに下馬し
た。その夜はことその他寒気が厳しかった。若干の者たちの手足が凍傷にやられ、
多くの者の耳が全くりんごのように水ぶくれして、真赤になった程であった。
私たちはアフスィに留まらず、そこにカーシム・アジャブの代りにヤーラク
・タガーイー Yārak Ṭaghā'ī をまた仮に一時的に置いて、カーサーンに向っ
た。カーサーンに 1 シャルイーの所に到達した時に、アフマド・ベグがそれ
を知るとスルターニムと共にまるで敗北したかのように急いで退却したという情
報が届いた。

タンバルは私たちが出馬した事を知って、〔自分の〕兄〔ベグ・テルベ〕を
助けるべく急ぎ来たようであった。昼の 2 つの礼拝〔正午と午後の礼拝〕の間
と思われる時刻にタンバルの軍勢がナウカンド Nawkand の方面から出現した。
タンバルはその兄があのように軽率に去り、私たちがこのように早く到着した
ために驚きとまどって、留まっていた。私たちは「神がこれをこのようになる
様になされたのだ。敵は馬を攻めつつやって来た。進んで手合わせすれば、も
し神が正義をもたらされるなら、敵の 1 兵といえども脱出できぬであろう」と
述べた。ヴァイス・ラーガリーと他の若干の者たちは「今日はもう晚い。今日
73a でなくても、明日 (73a) 敵はどこへ行く事があるでしょう？ 明朝、どこであ
れ、彼らに出合えるでしょう」と云って、ただちに手合わせする事を適当と考
えなかった。このように〔攻略するのに〕絶好の状態にあった敵は、何の損傷
も受けずに去った。諺がある：「手中の物を取っておかねば、老人になるまで
後悔する」(qabudaghını qapmasa, qarıghuncha qayghurur)。

事物、事宜をえて手にすべし。

事宜を失せる事共はげにはかなきもの。

翌日までに敵はそれを好機と考え、夜に至るまで何処にも下馬する事無く進
み、アルヒーヤーン城 Arkhiyān qurghanı に入った。私はその翌朝まで敵を
求めて進んだが発見できず、後から来てアルヒーヤーン城を近くから包囲する事
を適当と考えず、1 シャルイーの所にあるガズナイ・ナマンガン Ghazna-yi
Namanghān に下馬した。私たちは**30～40日間**このユルトに滞留した。タンバ
ルはアルヒーヤーンの城にいた。ごく少人数の兵がこちら側から出かけ、向う

側からも来て途中で矢を射合ってもどっていた。敵はある夜、夜襲をかけてきた。宿営地の外側からひとにぎりの矢を射かけて去った。私は宿営地の周囲に壕を設け、木の枝を置いて警戒していた。敵は何事も為しえなかった。このユルトに滞在中にカンバル・アリーは2～3度(73b) 気分を害して領地に帰ろうとした。1度などは乗馬して出発していた。私たちは若干のベグたちを派遣して、苦勞してもどらせた。

この間に、サイイド・ユースフ・マジャミー Sayyid Yūsuf Majamī がスルターン・アフマド・タンバルに人を遣して、彼になびいた。アンディジャーンの山麓地帯の1つをウイグル Uyghur, 1つをマジャム Majam と呼んでいる。2つは、山麓地帯である。サイイド・ユースフはマジャムの首長 (ulugh) であった。後年には宮廷でも名を知られる (tanıman) ようになった。彼の業績は首長の程度 (ulughluq) を越えていた。誰もベグにしなかったのに、ベグ (beglik) をよそおっていた。驚くべき偽善者で無節操な小者であった。私が当時アンディジャーンを取って以来、この時点に至るまでに、おそらく彼は2～3度私の側についてタンバルに敵対し、また2～3度はタンバルについて私に敵対したと思われる。最後に敵対したのがこれであった。彼は多くの部民・部族を所有していた。

私たちは「タンバルに合流させるな」と両者の間へ出馬した。途中で1泊してビシュハーラーン Bishkhārān 近郊に到達した。ビシュハーラーン城にタンバルの兵が来て入城していたらしい。私たちの側の急襲隊のベグであるアリー・ダルヴィシュ・ベグとクチュ・ベグ、それにその兄弟はビシュハーラーンの城門の所へ行きよく交戦した。クチュ・ベグはその兄弟と共に(74a) よい働きをした。彼らはほとんど場合成果をあげた。私たちはビシュハーラーンから1シャルイーの所にある1つの高みの上に下馬した。タンバルはジャハーンギールを連れてビシュハーラーン城の内を調べてそこに下馬した。

3～4日後、私たちの、私に反対の立場に立つベグたち、つまりアリー・ドーストとカンバル・アリー・サッラーフがその一党、追随者らと共に、和平の話を持ち出し始めた。私も私の支持者たちもこの和平の事は全く知らされていなかった。また私たちはこのような事に全く同意していなかった。しかし〔私たちの側の〕大ベグがこの2人の小人らであったため、もしこれらの者たちの言葉に耳をかさず、和平をしなければ、他のいくつかの計り難い可能性があっ

た。やむをえず、以下の如く和平のとりきめが為された。

1. ホジャンド川のアフシ側の諸地方はジャハーンギールに属する。アンディジャーン側の諸地方は私に属する。
2. ウズケンドは、彼らの家族を出城させた後、私たちの支配下に入る (bizning dīwāngha qoyghaylar)。
3. 領地の問題が解決し、私とジャハーンギール・ミールザーが相談一致した後、そろってサマルカンドに進撃する。
4. サマルカンドの王権を掌握したならば、アンディジャーンをジャハーン
74b ギール・ミールザーに (74b) 与える。

私はこのように決定した。ジャハーンギール・ミールザーとタンバルはその翌朝までに来て、**ラジャブ月の下旬** [1500年2月下旬]、私に会った。このとりきめの如くに誓約・協定された。私はジャハーンギール・ミールザーにアフシ方面への退去を許し、自らはアンディジャーンに向った。アンディジャーンに到着するとただちに投獄してあったタンバルの弟のハリールなど全員を牢から出し、〔栄誉の〕長衣を身につけさせて退去させた。彼らも彼らの側に捕われていたベグや近習たち、つまりタガーイー・ベグ、ムハンマド・ドースト、ミール・シャー・カウチン、サイイディー・ベグ、カースィム・アジャブ、ミール・ヴァイス、ミーリム・ディーワーンをはじめとする人々を釈放して送ってきた。

アンディジャーンに入ってから、アリー・ドーストの態度が完全に一変した。彼は私と共に亡国のつらい日々を過ごした人々を痛めつけ始めた。彼はまずハリーフアを追放した。ついでイブラーヒーム・サールーとヴァイス・ラーガリーを、罪なく理由なくして捕えさせ、略奪させ、その領地から追放した。彼はカースィム・ベグとお互いに攻撃し合いながら (chirmaship) 暮していた。そして表面的には、「ハリーフアとイブラーヒームは、ホージャ・カーズィーの仲間だ。彼らは私に復讐するだろう」とこの件については主張していた。彼の
75a 息子のムハンマド・ドーストは、彼自身まるで君主の如くに (75a) 為し始めた。彼は会合、宴会、謁見、装備どれをとってもスルターンたちの法式をとり始めた。

この父と子はタンバルに支援されてこのような行動に出はじめたのであった。私にも、彼らのあのような権勢下では、このような承認し難い彼らの行動をや

めさせ得る力が残されていなかった。何故ならタンバルの如き敵が彼らの支援者であり保護者であったからである。彼らは思いのままに行動していた。まことに微妙な時期であった。何も云えなかった。私はこの父子によってその間そこぶるみじめな思いをさせられた。

私は**シャーバーン月**〔1500年3月〕、スルターン・アフマド・ミールザーのアーイシャ・スルターン・ベギムという名の娘を娶った。私の父が生存中に、おじに私のために結納金を支払い、彼女はホジャンドに来ていたのである。最初に娶った時には彼女を嫌っていたわけではないが、はじめての結婚で、遠慮の気持やまた気恥しさもあって、10日、15日あるいは20日に1度しか彼女のもとへおもむけなかった。後には、その愛情そのものも消え失せたが、気恥しさだけはなお増大した。ひと月ないし40日に1度、私の母のハーヌムがその訳をいろいろとたずねては、苦勞して私を彼女のところへ行かせていた。

75b この頃、1人の(75b) オルド商人の息子がいた。バーブリー Bāburī という名であった。その名もうまく〔私の名に〕一致していた。私は彼に不思議な程強く魅せられた。

彼の人に対するわが炎、わが身を焦し、われを狂気へとかりたてぬ。

われいまだ人を恋せし事なし。

否、恋につき聞きし事、語りし事すらもなし。

その頃私は1行ずつ2行ずつとペルシア語で詩を作っていた。その時作った1行がこれである。

何人もわれ程に心みだれ恋い焦れ恥辱にまみれる事なからん。

何人もなれ程につれなく心づかいせぬ者またなからん。

時折、バーブリーが私のもとに来ていた。しかし私は遠慮と気恥しさで真すぐにバーブリーの方を見る事ができなかった。とても会話談笑するなどできなかった。私は興奮と混乱の故に、〔来てくれた事について〕礼を云う事もできなかった。彼が去る事についてうらみ事を云えるはずもなかった。会見の際のきまり事を行なう力がいったい誰に残っていたであろう？

ある日、このように恋におちいていた頃、1群の同行者たちと共に、私はとある小路にさしかかっていた。突然、バーブリーとはち合せした。私は気恥しさのあまり、彼が近くにいるという事で、まるで溶けてしまいそうだった。

76a 彼を直視したり、会話を交す事(76a)などとても不可能だった。私は無限の恥

しさと苦しさとにさいなまれつつ通り過ぎた。ムハンマド・サーリフのこの詩の1行が心に浮んだ。

友を見るごとに私はほほを染める。

友が私を見れば、私はあらぬ方に眼をそらす。

この1行は不思議な程、情況にぴったりである。恋慕の情の激しさの故に、また若さと狂気に支配されて、私はターバンも付けず裸足で大路小路や大小の庭園をさまよい歩いた。知人にも見知らぬ人にも眼を向けず、また自分にも他人にも注意を向けなかった。

われ恋におち、われを忘れ狂いたり。知らざりき——

美わしき人々との恋の、これがまことであろうとは。

私は時には愚者の如く独り山や野におもむき、また時には園や街区を小路から小路へとさまよった。進むも留まるも、それを選ぶ力なく、行くも止まるもそれを決する力が無かった。

われに進むべき力なく、留まるべき力なし。

ああわが心よ、この有様のとりことなせしは、そは汝。

この年、スルターン・アリー・ミールザーとムハンマド・マズィード・タルハンの間で確執が生じた。その理由は以下の如くであった。タルハン族の者たちはすこぶる寵愛され権勢ある者となっていた。ブハーラーをバーキー〔タルハン〕ががっちりと(76b)握り、ブハーラー政府(Bukhārā sarkārī)から1ダング(dang)〔銅銭〕すら人に与えようとしなかった。ムハンマド・マズィード・タルハンもサマルカンドの支配権を握り、全ての諸地方を、息子たちや一族郎党らに取りこみ、町(shahr)からは定められていた俸禄以外は1フィルス(fils)〔銅銭〕といえどもいかなる経路からもスルターン・アリー・ミールザーのもとに届かなかった。

スルターン・アリー・ミールザーは立派な青年(ulugh yigit)に成長していた。彼らのこのようなやり方にどうして我慢できよう。数人の近習らと共にムハンマド・マズィード・タルハンの命をねらうようになっていた。ムハンマド・マズィード・タルハンはそれに気づき、従者・従士、一族・郎党、さらに彼のもとにいたスルターン・フサイン・アルゲン、ピール・アフマド、ウズン・ハサンの弟のホージャ・フサイン、カラ・バルラース、サーリフ・ムハンマド

といった部下やベグたち，さらに若干のベグや若党たちと共に町を出た。

当時，〔スルターン・マフムード〕ハーンはハーン・ミールザーにムハンマド・フサイン・ドゥグラト，アフマド・ベグ，さらに多数のモグールのベグたちをつけて，サマルカンド遠征に任命していた。ハーフィズ・ベグ・ドウラダイ *Hāfiẓ-Beg Dawladay* とその子のターヒル・ベグ *Tāhir Beg* はハーン・ミールザーの後見人であった。ハサン・ナビーラとヒンドゥー・ベグ *Hindū Beg*，それに若干の若党たちはハーフィズ・ベグ，ターヒル・ベグの関係から，
77a スルターン・アリー・ミールザーの所を脱走して (77a)，ミールザー・ハーンのもとに行っていた。

ムハンマド・マズィード・タルハンは人々を派遣し，ハーン・ミールザーとモグール軍を招請し，シャウダール近郊に来て，ミールザー・ハーンに会見し，幾人かのベグたちと会談した。モグールのベグたちの，ムハンマド・マズィード・ベグらとのほど良い関係は生まれなかった。というより彼らはマズィード・タルハンを捕える考えすらも持っていた。これをベグたちが知って，モグール軍から1つの口実をもうけて離れた。彼らが去るとモグール軍も留まりえず，退いてヤール・ヤイラクに下馬した時，スルターン・アリー・ミールザーが少数の兵と共にサマルカンドから急行し，ハーン・ミールザーとモグール軍の所に到着したが，戦う事すらできずに敗走した。晩年におけるスルターン・アリー・ミールザーの1つのかなり良い行動がこれであった。

ムハンマド・マズィード・タルハンらは，このミールザーたちに絶望して，モグールのアブドゥル・ワッハーブ *‘Abd al-Wahhāb* を私の所に派遣して私を招請した。アブドゥル・ワッハーブはこれ以前にも私のもとにいた事があり，〔ウズン・ハサンとタンバルによる〕アンディジャーン包囲の際にも，ホージャ・カーズィーとよく協力してその命をかけて働いた人物であった。私たち自身，このようにどうにもならぬ状況にあった。このため，私たちは〔ジャハーンギールと〕和平を結び，サマルカンドにむけて出兵せる事を決定した。ただちにミール・モグールをアフシのジャハーンギール・ミールザーのもとに，集結地の知らせと共に派遣し，サマルカンドにむけ出発した。**ズィール・カーダ月**〔1500年5/6月〕，私たちはサマルカンドにむけ出兵し，途中2宿してクバー *Qubā* に到着して下馬した。午後の礼拝時に，スルターン・アフマド・タンバルの弟のハリールが来てオシュ城を盗み取ったという情報が届いた。その

詳細は以下の如くである。

78a 和平のとりきめをした時、前述の如く、私はタンバルの弟のハリールをはじめとする者たちを釈放した。タンバルはハリールをウズケンドにいる家族・親族を連れ出す為に派遣した。ハリールは家族を連れ出すという口実で行って、ウズケンドに入り、今日行く明日行くのだまして出発しなかった。私たちの軍が出発した時、機会を見出し、オシュが空〔無防備〕の状態の時、夜に来て、オシュ城を盗み取った。この情報が我たちの所に届いた時、いくつかの理由から、私たちはそこに留まる事、あるいは彼らと関わりになる事を得策とみず、サマルカンドめざして進んだ。その理由の1つは、私たちの側の騎兵も歩兵も全員が、軍の装備を整えるため、家を持つ者はその家へと、あらゆる方面に分散していた事である。私たちは和平のとりきめを信じて、彼らのこの陰謀・破

私はクバーからマルギーナーンに到着した。私はクチュ・ベグの父のスルターン・アフマド・ベグにマルギーナーンを与えていた。彼は諸関係・諸障害のため加わる事ができず、マルギーナーンに残った。息子のクチュ・ベグは1～2の兄弟と共に私と進んだ。私たちはイスパラ *Ispara* 道を進んだ。イスパラの属領のマハン *Maḥan*〔又は <p. 96 *Muḥsin*>〕という名の村に到着して下馬した。よいめぐり合せで、この夜マハンに滞留中に、カースィム・ベグがその一党と共に、アリー・ドーストがその一党と共に、さらにサイイド・カースィムが1団の多数の若党らと共に、集結の約束通りに到着して合流した。

そこを出発して、ハスバーン *Khasbān*〔又は<p. 96 *Ḥasān*>〕の野を経て、
78b チョパン橋 (*Chūpān köprüki*) を過ぎ、ウラ・テペに到着した。カンバル・アリーは自らの領地のホジャンドから、タンバルを信じ軍事につき相談するためにアフスィに來た。情勢がこのように変化するとタンバルは彼を捕え、共に連れて (78b) 彼の所領に向った。ここに1つのトルコ語の諺がある：「汝の友

を信ずる事勿れ。彼は麦わらもて汝の皮膚を貫く」(inanmaghıl döstunggha, saman tıqar pöstunggha)。〔カンバル・アリーは〕連行されて行く途中で、徒歩で脱走し、四苦八苦してウラ・テペにたどり着いた。

ウラ・テペ滞在中に、シャイバーニー・ハーンがダブूसィー城 (qal‘a-yi Dabūsi) でバーキー・タルハンを破り、ブハーラーに向ったという情報が入った。私たちはウラ・テペからブルカ・ヤイラク (Burka Yaylaghı) 道をとってサングザール Sangzār に到着した。サングザールのダルガは城を与えた。カンバル・アリーが捕えられ連行されたにもかかわらず来たという理由で、彼をサングザールに置いて、私たちはそこを通過した。

私たちが到着してハーン・ユルトゥに下馬するとムハンマド・マズィード・タルハンをはじめとするサマルカンドのベグたちが来て挨拶した。私はサマルカンド征服の手だてを彼らと相談した。彼らは「〔ナクシュバンディー教団の〕ホージャ・ヤフヤーも王様〔バーブル〕の味方です。もしホージャが承認されるならば、サマルカンドは戦う事無く簡単に征服できましょう」と云った。このため、私は何度もホージャ・ヤフヤーの所へ人を遣し相談した。ホージャ・ヤフヤーは私たちをサマルカンドに入れる事を決定したとは云ってこなかった。しかし絶望するような事も云わなかった。

私はハーン・ユルトゥを出て、ダルガム川の岸边に来た。ダルガムの岸边からホージャ・ヤフヤーのもとにホージャ・ムハンマド・アリー・キターブダール Khwāja Muḥammad ‘Alī kitābdār 「キターブダールは「司書」」を派遣した。79a た。(79a) 彼は、「彼らを来させよ。私たちは城を与えるであろう」という伝言をもたらした。ダルガムを、夜に近く出発し、城に向った。しかしスルターン・ムハンマド・ドウラダイの父のスルターン・マフムード・ドウラダイ Sulṭān Maḥmūd Dawladay がその宿营地から逃げて行き、この談合について彼ら〔スルターン・アリーら〕に通報していた。彼らが知ったためにその計画は不可能になった。私たちは退いてダルガムの岸边に下馬した。

私がヤール・ヤイラクに到着した際、私がかつてよく眼をかけた私のベグで、アリー・ドーストが捕えさせて追放させていたミンリグのイブラーヒーム・サールーが、サイイド・ユースフ・ベグの長男のムハンマド・ユースフと共に来て私に仕えた。私たちの古いベグたちや近習たちも、1人2人と集まってやって来た。彼らはアリー・ドーストの敵対者で、アリー・ドーストは彼らの内の

幾人かを追放し、幾人かを略奪し、幾人かを捕えさせていたのであった。アリー・ドーストは怖くなった。何故なら彼はタンバルを後盾に、私や私の支持者たちを圧迫・迫害していたからである。私もこの小者には我慢ならなかった。彼は恥と怖れにたえきれず、退去の許しを求めた。私も有難い事と考え許可を
79b 与えた。アリー・ドーストとムハンマド・ドーストはその(79b) 退去の許しを得るとタンバルのもとへおもむいた。

彼らはタンバルの取りまきとなった。多くの離叛や確執がこの親子によって顕現した。1～2年後、アリー・ドーストの手にギネヤ虫(qart)が出て死んだ。ムハンマド・ドーストはウズベクに投じた。概して悪くなかった。その後また不義理(kūr-namak-lik)〔クール・ナマクは「塩に対して盲目な」〕を犯し逃げてアンディジャーンの山麓地帯へ行き、多くの反乱・騒乱を煽動した。最後にはウズベクに捕えられ、両眼を盲目にされた。「その両眼を塩が取った(közlärini tuz tuttı)」という表現にはこの意味がこめられていたようだ。

彼らを去らせた後、私はグーリー・バルラース Ghūrī Barlās を若干の若党たちと共に情報を得るためにブハーラー方面に送った。シャイバーニー・ハーンがブハーラーを取りサマルカンドに向ったという情報がもたらされた。私たちはその近辺に留まる事を得策と考えず、ケシュ方面に向った。このサマルカンドのベグたちのほとんどの家族もケシュにいた。ケシュに到着後1～2週間すると、スルターン・アリー・ミールザーがサマルカンドをシャイバーニー・ハーンに与えたという情報が届いた。その詳細は次の如くである。

スルターン・アリー・ミールザーの母ズフラ・ベギ・アーガー Zuhra Begi
80a Āghā はその無智蒙昧の故に密かにシャイバーニー・ハーンに人を遣わし次の如く伝えた。すなわちもしシャイバーニー・ハーンが(80a) 彼女を娶るなら、彼女の息子はシャイバーニー・ハーンにサマルカンドを与えるであろう。シャイバーニー・ハーンが彼女の息子の父の領地を征服したら、それを息子のスルターン・アリー・ミールザーに与えて欲しいと。この考えについてアブー・ユースフ・アルゲン Abū Yūsuf Arghun は承知していたはずである。というよりこの考えを示させた者は、まさにこの同じ裏切者であった可能性もある。

906年〔1500年7月28日—1501年7月16日〕の出来事

シャイバーニー・ハーンはこの女〔ズフラ・ベギ・アーガー〕の約束にもとづいて到着し、広場の園 (Bāgh-i Maydān) に下馬した。正午に、スルターン・アリー・ミールザーは、そのベグ、若党、軽装備の若党らに、誰にも知らせず、誰とも相談せず、数人の近くにいた大小の者たちと共にチャール・ラフ門を経て広場の園のシャイバーニー・ハーンのもとにおもむいた。シャイバーニー・ハーンはさほど歓待せず、拶挨がすむと下座に坐らせた。

ホージャ・ヤフヤーはミールザーの出城の知らせを得ると落つかなくなった。他にどうしようもなく、ホージャも出かけた。シャイバーニー・ハーンは座ったままで挨拶した。彼はまた非難がましい事をも述べた。しかしホージャ・ヤフヤーが立ち上ると、シャイバーニー・ハーンも敬意を表して立ち上った。

ホージャ・アリー・バイ Khwāja ‘Alī Bay の子のジャーン・アリー Jān ‘Alī はラバーティ・ホージャ Rabāṭ-i Khwāja にいた。ミールザーが出かけたという知らせを聞くと彼もシャイバーニー・ハーンのもとへ到着した。

この幸うすき女は聰明さに欠ける所があったため、結婚するという希望のため、自らの息子の家・(80b) 財産を雲散霧消させたのである。しかしシャイバーニー・ハーンはごくわずかすらも彼女に親切にしなかった。と云うより、妾・側女程にも眼をかけなかった。

スルターン・アリー・ミールザーも自らのとるべき行動に迷い、出城した事を限りなく後悔した。若干の近くにいた者たちがその状況を聞くとミールザーを連れて逃亡する事を計画した。しかしミールザーは賛成しなかった。最後の時は来ており、彼にはのがれるすべはなかった。彼はティムール・スルターンと宿営を共にしていた。4～5日の後、彼はコルバ牧地で殺された。この5日で死する命のために彼は悪名を残して逝った。彼は女の話に首をつっこみ、自らを名声の圏外に去らせたのである。このような男の出来事につき、もはやこれ以上書き記す事は無い。このようなおぞましい行動は、もはやそれ以上聞くにたえぬ。

シャイバーニー・ハーンはスルターン・アリー・ミールザーを殺害した後、ジャーン・アリーをもそのミールザーのもとに行かせた〔殺害した〕。シャイ

バーニー・ハーンはホージャ・ヤフヤーを怖れていたのので、彼をその子ホージャ・ムハンマド・ザカリヤー Khwāja Muḥammad Dhakaryā, ホージャ・バーキー Khwāja Bāqī と共にホラーサーン方面に去らせた。その後を数名のウズベクが追って行き、ホージャ猊下をその2人の若い息子たち共々、ホージャ・カーズルーン Khwāja Kāzrūn [又は Kārdzan] 近郊で殉教させた。シャイ

81a バーニー・ハーンはこう云っていたという：「ホージャの件は (81a) 私がさせたのではない。カンバル・ビー Qanbar Bī とキョペク・ビー Köpek Bī がした事だ」。これはあの行動そのものより、より悪質である。諺に云う：「その弁解は罪行より悪し」(‘Odhrash batar az gunāh)。もしベグたちがこのような行動を、自分の頭で考えて、ハーンや君主に知らせる事なく為し始めたならば、ハーン権や王権をどうして信ずる事ができようか。

ウズベクがサマルカンドを占領すると、私たちはケシュからヒサール方面に向った。ムハンマド・マズィード・タルハンをはじめとするサマルカンドのベグたちは部下や家族郎党と共に私たちと一緒に移動した。チャガーニーヤーンのチルトゥ Chiltu [又は<p. 99 Haltu>] 牧地に下馬した時、ムハンマド・マズィード・タルハンをはじめとするサマルカンドのベグたちは別れて去って、ホスロー・シャーに臣従した。

私たちは町や領地を追われ、行くべき、また留まるべき土地がどこであるかをも知らなかった。ホスロー・シャーはこれまでどれ程私たちの一族に対して敵対行動をとってきた事か。しかし他にどうしようもなく、やむをえず私たちは彼の領地のまっただ中を通過した。私たちは1つの計画を持っていた。それはカラ・テギンとアライ Alay を経て私のおじの小ハーン、つまりアラチャ・ハーンのもとにおもむく計画であった。しかしそれは不可能となった。私たちはカム・ルード Kam-rūd をさかのぼり、シラ・タク峠 (Sira-taq dābānī) を通る事になった。

ヌンダク Nūndāk 付近に到達した時、ホスロー・シャーの従者が1組の9頭の馬と1組の9枚の布地を持って来た。カム・ルードの入口に下馬した時、
81b シール・アリー・(81b) チュフラ [チュフラは「稚児、小姓」] が脱走してワリーとホスロー・シャーのもとへ行った。翌朝までにクチュ・ベグが離れてヒサールへ行った。私たちはカム・ルードの谷に入り上流にむかって進んだ。せまく切りたった様にけわしい道々や、高くけわしい峠の諸所で馬やらくだを放

棄した。3～4宿してシラ・タク峠に到達した。峠——何という峠であろう。私はかつてこれ程までに高くけわしい峠を見た事が無かった。また1度も、このように狭くけわしい道を進んだ事が無かった。私たちは幾多の困難を克服しながら危険な隘路・狭路を通過し、無数の苦しみをなめながら死と隣り合せの高峻な峠を越えてフェーン Fān 近郊に到達した。

フェーンの山々の間に1つの大きな湖が横たわっている。その周囲がおよそ1シャルイーもある美しい湖である。珍しい物にも事欠かぬ。イブラーヒーム・タルハンがシーラーズ城を固守しており、またヤール・ヤイラクの諸城をもカンバル・アリーとアブル・カーシム・コフブルが固守しているという情報が届いた。アブル・カーシムはホージャ・ディーダール Khwāja Dīdār にいたが、ウズベクのサマルカンド占領の際そこに留まりえず、ヤール・ヤイラクに来て、その下方の諸城にいたのであった。私たちはフェーンを右手に見てカシュトゥード Kashtūd 方面に向った。

フェーン王は寛大さと気前のよさ、丁重さと手厚い接待で有名であった。
82a (82a) スルターン・マスウッド・ミールザーは、スルターン・フサイン・ミールザーがヒサルに來攻した時、弟のバイスングル・ミールザーのもとへ、サマルカンドへ、この道をとって進んだ。フェーン王は70～80頭の馬を献じた。この他の接待をも同様に行なった。しかし私には1頭の下等の馬を送って來ただけで、彼自身も出向いて來なかった。私たちの所へ來た際には、気前のよさで有名だった人々がけちくさくなくなり、寛大さで記述に残された人々の寛大さも忘れ去られていた。

気前の良さと手厚いもてなしで有名だったホスロー・シャーがバディーウツ・ザマーン・ミールザーにどれ程のもてなしをしたかは記述した〔42a 参照〕通りである。彼はまたバーキー・タルハンやその他のbegたちにも非常な接待・歓待を示した。私たちは彼の領地を2度通過した。私たちと同等の人々の事は云わずとも、私たちの、より下位の家來たちに彼が為した接待すらも、彼は私たちには為そうとしなかった。と云うより、私たちの家來程にも、彼は私たちを重く見ていなかった。

おお心よ、世の人々からの恵みをいったい誰が見たであろうか？

恵みなど有りはせぬ。故に恵みがあるなどと期待する事なかれ。

フェーンを過ぎた時、私たちはカシュトゥード城にウズベクの兵がいると考

えて、カシュトゥードにむけ急行した。カシュトゥード城そのものは荒廃していたようで、この頃、そこに人が滞留した事はなかったらしい。そこを過ぎて、
82b (82b) 私たちはコーハク川の岸边に到着して下馬した。私たちはヤーリー Yārī の対岸でコーハク川を橋を渡った。私はカーシム・ベグをはじめとするベグたちをラバーティ・ホージャ城を略取するために派遣した。私はヤーリーを過ぎて、シュンカル・ハーナ山 (Shunqar-khāna taghī) を越え、ヤール・ヤイラクに到着した。ラバーティ・ホージャに行ったベグたちは梯子をかけた際に気づかれ、退却させられた。彼らは城を取る事ができず帰って来た。

カンバル・アリーはサングザールにいた。彼は来て〔私に〕会った。アブル・カーシム・コフブルとイブラーヒム・タルハンは私の配下に加わるため、そのすぐれた部下たちを派遣して来、臣従の意を表した。私たちはヤール・ヤイラクの村々の1つであるアスフィードク城 (Asfidak qurqhanī) に到着した。

当時、シャイバーニー・ハーンはホージャ・ディーダール付近に滞留していた。3〜4,000人のウズベクがいた。また土地の (yerlik) 騎兵の内からも同じ位の数の者たちが集まっていた。シャイバーニー・ハーンはサマルカンドのダルガ職 (Samarqand darughalighī) をジャーン・ワファー・ミールザー Jān Wafā Mirzā に与えていた。ジャーン・ワファーは5〜600人と共にサマルカンド城内にいた。ハムザ・スルターンとマフディー・スルターンは属僚・従者らと共にサマルカンドに近いブータナ禁地に滞留していた。私たちの兵は、貴賤
83a 合わせて、240人 (83a) であった。

私たちは、全てのベグや軽装の若党たちと相談して、次の如くとり決めた：シャイバーニー・ハーンはサマルカンドを最近に征服したばかりで、まだ住民たちは彼と親密になっていないし、また彼も住民たちと親密になっていない。この際、私たちがもし何かを為すとすれば、まさに今為そう。サマルカンド城に梯子をかけ、密かに略取すれば、サマルカンドの人々も私たちの側につくであろう。他にやり方があろうか？。またたとえ彼らが私たちに味方しないにせよ、〔少なくとも〕ウズベクのために彼らが戦うはずがない。サマルカンドを入手した後には、神のおぼしめし通りに事が進行するであろう。

この結論を得て、正午の礼拝の後、私たちはヤール・ヤイラクを出発し、夕刻から夜に入っても休まず進み、夜半にハーン・ユルトゥに下馬した。その夜、敵が気づいていると云うので、サマルカンド城近くには行かず、ハーン・ユル

トウから退却した。明け方、私たちはラバーティ・ホージャの下方でコハク川を渡り、再びヤール・ヤイラクに到着した。

ある日、アスフィーダク城に、ナーシルの子のドースト、ノヤン・キュケルダシュ、＜p. 102 カースィム・キュケルダシュ＞、ハーン・クリー、カリーム・ダード、シャイフ・ダルヴィシュ、ホスロー・キュケルダシュ、ミーリーム・ナーシルといった全ての近習たちが全員そろっていた。彼らは私の前に坐っていた。私は「もし神が正義をもたらされるならば、さあ云ってごらん、
83b (83b) 私たちはいつサマルカンドを征服する事になるであろう？」とたずねた。ある者たちは「春までには取れるでしょう」と云った。その時は**晩秋**であった。ある者たちは「1カ月」、ある者たちは「40日」、そしてある者たちは「20日」と答えた。ノヤン・キュケルダシュは「15日で征服するでしょう」と答えた。神は正義をもたらされた。まさに丁度15日で私たちはサマルカンドを取った。

その頃、私は不思議な夢を見た。夢を見ていると、ホージャ・ウバイドゥッラー猊下が来られた。私はお出迎えに出た。ホージャが来てお座りになった。ホージャの前にまことに不作法なやり方で食卓用の布片 (*dastār-i khwān*) が置かれた。このため猊下は何かお考えになったらしい。ムッラー・バーバー *Mulla Bābā* が私の方をむいて合図した。私も眼で、それは私がした事ではなく、布を置いた者が間違えたのである事を知らせた。ホージャはそれを理解され、この言訳を聞き入れられた。立上がられた。私はお見送りに出た。この家の玄関の所で、〔ホージャは〕私の右手か左手を取られ、私の1本の足が宙に浮くほど私を持ち上げられた。そしてトルコ語で「シャイフは最善の道を恵んだ」と云われた。まさにその数日後、私はサマルカンドを獲得した。

1～2日後、私はアスフィーダク城からヴァスマンド城 (*Wasmand qurghanī*) に到着した。私たちはすでに1度サマルカンド近郊まで行って気づかれてもど
84a ったのではあったが、(84a) 再び神を信じ、サマルカンド征服をめざして、ヴァスマンドから正午の礼拝の後、サマルカンドめざして急行した。ホージャ・アブル・マカーリムも同行した。夜半、大道 (*khiyābān*) のプリ・マガーキー *Pul-i Maghākī* [「堀り割橋」] の所に到達した。70～80人のすぐれた若党たちを先に分遣した。それは彼らが「恋人たちの洞」の向いで梯子をかけて城内に入り、進んでトルコ石門 (*Pīrūza darwāzasi*) にいる者たちの前に立ち、門を手に入れ、私たちにむけ人を派遣するためであった。これらの若党たちは行

って、恋人たちの洞の前で梯子をかけて城に入った。誰も気づかなかった。彼らはそこからトルコ石門に到着し、ファーズィル・タルハン Fāḍil Tarkhān の前に立った。ファーズィル・タルハンとは＜p. 103 例のベグのタンハン＞らの1人ではなく、トゥルクスターン出身の商人のタルハンたちの1人であった。彼はシャイバーニー・ハーンにトゥルクスターンで仕え、寵愛されていた。〔若党たちは〕ファーズィル・タルハンを数人の従者ともどもに斬って殺し、門の錠前を斧で打ち壊して門を開いた。

この時、私は到着するとすぐにトルコ石門から入城した。アブル・カーシム・コフブル自身は来ていなかったが、弟のアフマド・カーシムを30～40人程の従者と共に派遣して来ていた。イブラーヒーム・タルハンの部下は〔私と共に〕ひとりもいなかった。私が入城してスーフィー道場 (khānqāh) の所に
84b いた時、アフマド・タルハンという名の弟が (84b) 数名の従者と共にやって来た。町の人々はまだねむっていた。店主たち (dukkāndār) が店々から見て、私である事に気づき、祝詞を述べた。少時の後、町の人々にも知れわたった。

私たちの側の者たちも町の人々もすこぶる愉快になり、喜々となった。彼らはまるで狂犬のように小路や溝の所でウズベクを石や棍棒で殺した。彼らはおよそ4～500人のウズベクをこういうやり方で殺した。時の町のダルガであったジャーン・ワファーはホージャ・ヤフヤーの邸にいたが、逃げて逃げてシャイバーニー・ハーンのもとへ行った。

私は門を入ると、〔町の中心部の〕イスラム学院とスーフィー道場の方へまっすぐに進んだ。到着してスーフィー道場の門 (tāq) の上に座った。夜が明けるまで「〔馬から〕落とせ！ 落とせ！」という叫びやおたけびが聞えた。若干の、知らせを聞いた貴人や商人たちがやって来て、喜色万面で私に会い、急いで用意された品々を持って来て祝詞を述べた。夜が明けた後、鉄門の所でウズベクが2つの門〔外門と内門〕の間を固めて闘っているという知らせが届いた。私はただちに乗馬して鉄門に向った。私と共にいたのは10人、15人、あるいは20人程であったであろう。〔他の〕悪賢い人々は、新たに町が手に入ると、い
85a ずれも財宝あさにそこかしこで (85a) 熱中していた。私が到着するまでにウズベクは鉄門から撃退されていた。

シャイバク・ハーン Shaybāq Khān〔シャイバーニー・ハーンの別称〕は、この知らせが届くと、混乱と共に日の出時、100～150の兵をひきいて鉄門に到

着した。彼は絶好機に来たものであった。しかし前述のように私と共にいた兵もきわめて少なかった。シャイバク・ハーンは、何事も為し得ないと見てとると、留まらず、急ぎ退却した。私はそこからひきかえして来て内城のブスターン・サライーに下馬した。貴顕・大人それに町の有力者たちが私の所に来て挨拶し、祝福した。

140年間に近く、首都サマルカンドは私たちの一族の手中にあった。しかし何たる事か！外敵のウズベクが来襲して領有した。しかし神は手からこぼれ落ちた王国を再び与えられた。略奪と強奪にさらされた領地が私たちの掌握下にとりもどされたのである。かつて〔1470年に〕スルターン・フサイン・ミールザーも全くこれと同様の不意打ちによってヘラートを入手した。しかし物事をよく知っている人々の前では明白であり、また公正に判断する人々のもとでは明瞭であるように、彼の仕事と私の占領との間には大きな違いがある。

第1は、スルターン・フサイン・ミールザーは多くの物事を見、また多くの試練をくぐり抜けてきた、歳取った君主であった。第2は、彼の相手であったヤードガール・ムハンマド・ナーシル・ミールザー Yādgār Muḥammad 85b Nāṣir Mīrzā は17～18歳の経験不足の(85b)王子であった。第3は敵方の内部から、情勢・情況を知っている人物、つまりミール・アリー主馬頭 (Mīr ‘Alī mīr-i ākhūr) がミールザーの所へ人々を送り、気づかぬ内に敵方へと案内して来たのであった。第4は、敵は城内におらず、「からすの園」(Bāgh-i Zāghān) にいた。スルターン・フサイン・ミールザーがヘラートを占領した時には、ヤードガール・ムハンマド・ミールザーとその一党は飲酒にふけていた。すなわちその夜ヤードガール・ムハンマド・ミールザーの宮廷には3人が残っていたが、彼らもまた酩酊していた。第5は彼は〔以前に気づかれたりなどせずに〕初めて密かに来て占領したのである。

一方、私がサマルカンドを取った時、私は19歳であった。多くの物事を見てもいず、また経験にも乏しかった。第2は、私の敵はシャイバク・ハーンの如く経験に富み、多くの物事を見てきた歳取った人物であった。第3は、私たちの所にサマルカンドから誰も来なかった。町の人々は私に心を寄せてはいたが、シャイバク・ハーンに対する恐れから誰もそのように考えうる者がいなかった。第4は、私の敵は城内にいた。私は城を取り、かつ敵を逃走させたのである。第5は、1度サマルカンドをねらって来て、敵に気づかれたが、2度目に来た

時に、神が正義をもたらされて、サマルカンドが征服されたのであった。

このように述べたのは、人に対する評価を低くさせようとするためではない。

86a (86a) 述べた事がすなわち事実である。またこのように記したのは、自分をえらく見せようとするためではない。書いた事が真実なのである。この勝利に当って、詩人たちが紀年銘を含む詩を作った。その内の1つがまだ記憶に残っている。

知慧，口開きぬ：その銘は

「バーブル・バハードゥルの勝利」(Fath-i Bābur Bahādur) [906年を示す] なり，知れよと。

サマルカンドの勝利の後，シャウダール，ソグド，諸地区，それに近くの諸城が1つ1つと私のもとに帰属し始めた。いくつかの城からは，ウズベクのダルガたちが不安になって城を捨てて出城した。いくつかの城はウズベクの兵を追い出して，私たちに服属した。またある者たちはそのダルガを捕えて城を固めた。

まさにこの頃，シャイバク・ハーンとウズベクらの家族・親族がトゥルキスタンから到着した。シャイバク・ハーンはホージャ・ディーダールとアリーアーバード ‘Ali-ābād にいた。彼は諸城がこの様に服属し，人々がこのように帰属したのを見て，滞留していた土地からブハーラー方面へ移動した。神の御加護により，ソグドとミヤーン・カール Miyān-kāl の諸城は**3～4カ月の間**に，ほとんどが私たちに帰属した。バーキー・タルハンも機会を見つけて来て，カルシ城に入った。フザールとカルシもウズベクの支配を脱した。カラ・キョ
86b ルをも，アブル・ムフスィン・(86b) ミールザーの部下が来て取った。私たちの諸事はすこぶる順調であった。

私の母たち〔母と祖母〕と私の家族・親族らは，私がアンディジャーンを出て以後，艱難辛苦を体験しつつウラ・テペに来ていた。私は人を遣して，彼らをサマルカンドに連れて来た。まさにその後数日して，私の最初の正式の妻であるスルターン・アフマド・ミールザーの娘のアーイシャ・スルターン・ベギム [75a 参照] から1人の娘が生まれた。ファフルン・ニサー Fakhr al-Nisā’ と名付けた。これが私のはじめての子であった。その時私は19歳であった。しかし彼女はひと月か40日で神の御許に召された。

サマルカンドの勝利の後，何度も何度も周辺の諸地方・諸方面にいるハーン

やスルターン、アミールや地方諸侯 (sar-ḥadd nishīn) たちの所に、援助・援軍を求めるため、次々と使者やトゥワチらが往復した。しかしある者たちは、その経験にもかかわらず、簡単に断った。また私たちの一族に対して不親切な不愉快な行動をとってきたある者たちは、その怖れの故に、〔求めを〕無視した。またある者たちは援軍を寄越しはしたが、十分な援軍ではなかった。その各々についてはそれぞれの場所でその詳細について説明する予定である。

この2度目にサマルカンドを取った時、〔ヘラートの宮廷の宰相であり文人
87a である〕アリー・シール・ベグが (87a) なお在世中であった。1度、彼の手紙も来た。私も1通の手紙を送った。私は裏面に、トルコ語の詩を作って書き送った。返事をもらうまでに、不和と確執が生じた。

シャイバク・ハーンはサマルカンドを取った際、〔高名な詩人・文人〕ムッラー・ビナーイーを召しかかえた。彼はシャイバク・ハーンと共にいた。サマルカンドの勝利の数日後、彼はサマルカンドに来た。カースィム・ベグは彼を疑い、シャフリ・サブズ方面に去らせた。数日後、すぐれた人物であり、何の罪行も明らかにはならなかったのも、私たちは彼をサマルカンドに連れて来た。彼はいつもカスィーダ (qaṣīda) 〔頌詩〕とガザル (ghazal) 〔抒情詩〕を作っていた。ナワー (nawā) 調で1つの歌を私の名で作曲して歌った。その間に彼は1つの四行詩 (rubā'ī) を作って誦んだ。

我に食むべき穀粒 (ghalla) なし。

また身につけるべき穀粒の対応語 (muhmal-i ghalla) 〔ghalla と韻を同じくする語。この場合は malla, すなわち木棉, 衣類〕もなし。

食を欠き衣を欠く者の、

学芸に尽くし得るは、そはいずれの地ぞや。

当時、私は1行ずつ2行ずつと詩作していた。しかしガザルは完成できないでいた。私は1つの貧弱なトルコ語の四行詩を作って彼に〔返歌として〕おくれた。

事々は全て、そなたの思うがままにな리ましょう。

贈物も俸禄も、全てが命ぜられるであります。

そなたの誦まれた穀粒とその対応語〔＝木棉・衣服〕を私は理解致しました。

そなたの肢体が対応語〔＝衣服〕を満たし、そなたの家を穀物が満たすで

ありましょう。

87b ムッラー・ビナーイーはこの四行詩の (87b) 最後の 1 行 (miṣrā') の脚韻 (qāfiya) をリフレインにして (radīf qılıp), 別の脚韻でまた 1 つの四行詩を作って歌った。

わが君は陸海の君主となられるであります。

世界でその学芸につき常に人の口の端にのぼられるであります。

わずか 1 つの対応語のためにこれ程の恩寵を下されました。

たとえ適当な言葉を用いたにせよ、それがどれ程の事であります。

当時、ホージャ・アブル・バラカ Khwāja Abū al-Baraka (通称フェラーキー Farāqī) がシャフリ・サブズからサマルカンドに来ていた。彼は「同じ脚韻で誦まねばならぬ」と云った。この四行詩をホージャ・アブル・バラカが作った。

彼が為せし悪道は、時が問うであります。

恩情の主〔神〕はその言訳けを求められるであります。

ああ酌人よ！ わが盃はなお満たされぬというのに、

この世におけるわれらが盃はいつか必ず満たされるであります。

この冬、私たちの諸事はすこぶる順調であった。シャイバク・ハーンの諸事は不調であった。しかしこの間に 1～2 の出来事はやや不都合であった。まずマルヴから来てカラ・キョルを取った者たちは留まりえず、カラ・キョルは再びウズベクの支配下に入った。次にダブースィーの城にイブラーヒーム・タルハンのアフマド・タルハンという名の弟がいたが、シャイバク・ハーンが来て包囲した。彼は、私たちが兵を集めて援軍の準備を整えるまでに、攻撃して占領した。住民を皆殺しにした。

88a 私がサマルカンドを取った時、合計 240 名の部下が (88a) いた。しかし私たちは、すぐ後に述べる如く、**5～6 カ月の間**に、至高の神の御加護により、シャイバク・ハーンの如き人物とサリ・プル Sar-i pul で会戦する程にまでなった。周囲の諸方面にいる人々の内、〔スルターン・マフムード〕ハーンからはアイユーブ・ベグチクとカシュカ・マフムード Qashqa Maḥmūd とバーリン部の 4～500 人が援助に来た。ジャハーンギール・ミールザーからはタンバルの弟のハリールが 100～200 人と共に援助に来た。スルターン・フサイン・ミールザーの如く、シャイバク・ハーンの行動・性情を誰よりもよく知っている経

験豊かな君主のもとからは誰 1 人として援助に来た者はいなかった。バーディー・ウッ・ザマーン・ミールザーのもとからも誰も来なかった。ホスロー・シャーも自分自身についての不安から人を派遣しなかった。前述した如く、彼は限りなき悪行をわが一族に対して行なっていたので、私たちを怖れる事甚大であった。

シャッワール月〔1501年4/5月〕、私はシャイバク・ハーンと戦う望みをもって出発し、新庭園 *Bāgh-i naw* に出た。5～6日間、軍を集め、装備を整えるために新庭園に滞在した。新庭園を出発して行軍を重ね、〔サマルカンドとブハーラーの中間にある〕サリ・プルを過ぎて下馬した。軍営地の周囲を全て
88b 枝と壕(88b)で警戒して固めた。シャイバク・ハーンは彼方から来て、ホージャ・カーズルーン〔又はカールドザン〕近郊に下馬した。両者間の距離はおおよそ1ユガチであったであろう。

私は4～5日このユルトに留まった。私たちの兵と敵方の兵は連日あちら側から来、またこちら側から行って矢を射合って戦った。ある日、敵兵が多勢で現れた。激戦となった。しかしどちら側も得る所が無かった。私たちの側の1人の驍手が軽々しく退却して壕に入った。ある者たちはそれをサイイディー・カラ・ベグ *Sayyidī Qara Beg* の驍だと云った。サイイディー・カラは口舌はすばらしいが、刀では並の人数であった。この際、ある夜、シャイバク・ハーンが夜襲をかけて来た。私は兵の周囲を枝と壕で固めていた。彼は来たが、何事も為しえなかった。壕の外側からときをあげ、ひとしきりの矢を射て去った。

戦のための諸事に、私は懸命に努力した。カンバル・アリーも努めた。バーキー・タルハンは1,000～2,000の武装した兵と共にケシュに駐屯していたが、2日で私たちに加わる予定になっていた。サイイド・ムハンマド・ミールザー・ドゥグラトも私のおじのハーンのもとから援軍として来て、1,000～1,500の
89a 兵(89a)と共にディユール *Diyūl* に駐屯していた。距離は4ユガチの道のりであった。朝までには私たちに加わる予定であった。このような状況の時に、私は急いで戦の火ぶたを切った。

急ぎすばやく刀をとれば、

悔みの甲を齒でかまん。

私の憂慮の理由は、戦の日、八星が両軍の間にあったが、もしその日を過ぎ

ると、13～14日間、八星は敵の背後に留まる事になるという点であった。そんな事は考える必要が無かったようだ。理由もなく私たちは急いだ。朝、戦う希望をもって甲冑を身につけ、馬にも武装させ、右翼、左翼、中軍、先鋒、後衛の隊列を整えて進んだ。右翼はイブラーヒーム・サールー、イブラーヒーム・ジャーニー Ibrāhīm Jānī, アブル・カースィム・コフブル、それに若干のベグたちであった。左翼はムハンマド・マズィード・タルハンとイブラーヒーム・タルハン、そしてサマルカンドのベグたち、すなわちスルターン・フサイン・アルグン、カラ・バルラース、ピール・アフマド、ホージャ・フサインであった。中軍にはカースィム・ベグと若干の近しい近習らがいた。先鋒はカンバル・アリー・サッラーフ、バンダ・アリー、ホージャ・アリー、ミール・シャー・カウチン、サイイド・カースィム・イシク・アーガー、バンダ・アリーの弟のハールダール Khāldār, カースィム・ベグの子のクチュ・ハイダルがいた。それにそこにいたすぐれた若党たち近習たちを全て先鋒に任命した。

89b 私たちが陣を整えて進むと、敵も正面から (89b) 隊列を整えて現れた。右翼をマフムード・スルターン、ジャーニー・ベグ・スルターン、ティムール・スルターンが〔将い〕、左翼はハムザ・スルターン、マフディー・スルターンそしてまた幾人かのスルターンたちであった。翼と翼とが近づいた時、敵の右翼の先端が私たちの背後にむかって進んだ。私も彼らの方に向きを変えた。私たちは、そこにいた経験に富み、刀をふるった事もある若党たちを全て先鋒軍に任命していたが、先鋒軍が右手にとり残された。私たちの前には、誰も残っていなかった。にもかかわらず、私たちは前進して来た敵を押しもどし、その中軍に合流させた。こうなった時、シャイバク・ハーンの歳取った族長たちはハーンに「進まねばならぬ。止まっていたはだめだ」と告げたが、ハーン自身は止まって立っていた。敵の右翼が私たちの左翼を破って、背後にまわって来た。わが軍の先鋒も右手の方に残されていて、私の前面は無防備になった。後ろからも前から敵兵がおしよせ矢を射かけ始めた。

援軍のため来ていたモグールの兵は戦いそのものには戦力にもならなかった。彼らは戦わずに、私たちの側の者たちを略奪し、馬から落とし始めた。ただこの時のみではなく、常に、呪われたモグール (90a) の習慣的行動がまさにこれであった。勝てば戦利品を取り、敗ければ自軍の者を略奪・落馬させて戦利品を取るのである。

私たちの前方に來た敵は何度も押しよせてきたが、私たちは打って退却させた。私たちの前の者たちも攻撃した。私たちの背後にまわった敵の者たちも來て私たちの纛にむけ矢を放ち始めた。彼らは前後から攻撃してきた。私たちの者を動揺させた。ウズベクの戦における1つのすぐれた戦術がこの旋回(tolghama)である。旋回なしにおわる戦はない。もう1つの戦術は前後のベグや従者らが全員で矢を射かけ手綱をとって來襲する点である。退却する時も〔馬なりに〕ちりちりにならず、馬を自由にあやつって退却するのである。

私と共に10～12人が残っていた。コハク川が近かった。右翼の先端は川に接していた。私たちは川に向って退却した。コハク川が流れのある(kezgän)季節であった。私たちは川に着くと甲冑・馬鎧をつけたまますぐに水にとび込んだ。半分以上は水中を歩いて進んだ。その後は馬を泳がせた。矢を射て届く程の距離を、甲冑・馬鎧をつけた馬を泳がせて渡った。川を渡ると馬鎧を切っ

90b 川の北岸に渡ったので、私たちは敵から(90b)のがれる事ができた。しかし孤立した私の僚友たちを落馬させ、身ぐるみはいだのは、全てこの恥ずべきモグールであった。彼らは、イブラーヒーム・タルハンとその他のまことにすぐれた若党たちを略奪し、落馬させて殺した。私たちはコハク川の北岸を進み、コルバ付近でコハク川を〔南へ〕渡った。私たちが〔サマルカンドの〕シャイフ・ザーダ門から入って内城に到達したのは、正午の礼拝と午後の礼拝の中間の時刻であった。

まことに偉大なベグたちやまことにすぐれた若党たち、そして多くの兵士らがこの戦で失われた。イブラーヒーム・タルハン、イブラーヒーム・サールー、イブラーヒーム・ジャーニー、不思議な事にもこの3人のイブラーヒームという名を持つ偉大なるベグたちがこの1つの戦で失われた。またアブル・カースィム・コフブル、カースィム・ベグの長男のハイダル、ホダーイ・ベルディ・トゥグチ、また先に何度も言及したスルターン・アフマド・タンバルの弟のハリールがこの戦で戦死した。また若干の者たちは各方面へ逃亡した。その内、ムハンマド・マズィード・タルハン、ホスロー・シャーにむけ、ヒサール、クンドゥズ方面へ行った。また私が大変目のかけたベグの1人であったカンバル・アリー・サッラーフ・モグールは、この様に寵愛されていたのに、この様な時に味方せず、來てサマルカンドから一族を連れてやはりホスロー・シャーの

91a 所へ去った。また若干の (91a) 近習や若党たち、例えばホダーイダード・トゥルクメンの子のカリームダード、ジャーニケ・キュケルダシュ Jānikä Kükäl-dash, ムッラー・バーバー・パシャーガリー Mullā Bābā Pashāgharī らはウラ・テペ方面へと出発した。当時ムッラー・バーバーは従者ではなく、客人の様に暮していた。さらに若干の者たち、例えばシーリーム・タガーイーはその一党と共に以下のような行動をとった。彼は私たちと共にサマルカンドに入り、相談の結果、生死を城内で決する事にして籠城する事に決定しており、また私の母や姉妹が城内にいるというのに、そこにいた[自分の]家族・一族・従僕・下僕らをウラ・テペにむけ出城させた。そして彼自身は数名の従僕・下僕らとただひとりで城内に留まったのである。これに止まらない。このような難しい出来事が生じた際に、彼はこのような役立たずの敵対的な行動をとるのが常であった。

翌朝までに、ホージャ・アブル・マカーリム、カースィム・ベグ、そして全てのベグや近習たち、さらに意見を持つ若党たちを召集して会議を開き、籠城して、生死を城中で決する事に決定した。私とカースィム・ベグが、私の近くにいた近習・若党たちと共に予備軍になった。このため私は町の中央の、ウル
91b グ・ベグ・ミールザーのイスラム学院 (madrasa) の屋上に (91b) 白いテントを張って座した。他のベグたちや若党たちには、諸門や周囲の城壁の壘壁の所に持ち場を分ち定めた。

2～3日後、シャイバク・ハーンが到着して城から遠い所に下馬した。サマルカンドの居住区ごと (maḥalla maḥalla), 街路ごと (kūy kūy) の任侠無頼の者たち (awbāsh wā yatīm) は群をなして集まり、ならず者風に「アッラーは偉大なり」などと叫び、学院の入口の所に来て戦に出かけて行った。シャイバク・ハーンは馬で戦に出てきたが、城に近づく事も出来なかった。数日はこのようにして過ぎた。矢や刀の打ち傷や会戦や平原での戦を体験した事の無い任侠無頼の者たちはこの両軍のやりとりで大胆になって、より遠くへと出撃し始めた。経験のある若党たちがこのような益も無い出撃を止めようとする、彼らはそれを非難し始めた。

ある日、シャイバク・ハーンが鉄門の方に戦をしかけた。無頼の者達は大胆になっていたのも、いつもの様に大胆に遠方まで出撃した。私は、これらの者たちの後を追って若干の若党たちを騎馬で出城させた。ウシュトゥル・ギャルダン Ushtur-gardan [「らくだの首」] 付近にキュケルダシュたちと側近の近習

たちが出ていた。すなわちノヤン・キュケルダシュ、クルナザル・タガーイー Qul-naẓar Ṭaghā'ī, マズィードその他である。そこで1人か2人か3人のウズベクが(92a) 彼らに馬をしかけた。彼らはクルナザルと刀を交えた。そこにいたウズベくらも徒歩で攻撃してきた。彼らは町の無頼の徒らを追いたて、鉄門に押し込んだ。〔わが方の〕クチュ・ベグとミール・シャー・カウチンはホージャ・ヒズル寺院 Khwāja Khidr masjid の傍らに馬を降りて残った。先頭の騎馬の者たちは、徒歩の者たちに〔無頼の者たちを〕追走させると、ホージャ・ヒズルの寺院に集まって来た。クチュ・ベグが出て、この前進して来たウズベクとよく戦った。彼はめざましい働きをした。全ての者が、眺めて立っていた。下の〔我が軍の〕逃走者たちはただ逃げるのに懸命であった。彼らは矢を射たり、戦のためにふみ止まる時期をすでに失っていた。私は門の上から小箭(nāwak)を射続けた。また若干の私の傍らにいた者たちも矢を射続けた。敵は上方から矢をあびせられるためにホージャ・ヒズル寺院より前へは進めなかった。その直後、彼らは退却した。

包囲されている間中、私は毎夜、城壁の上から見廻らせていた。時には私が、時にはカースィム・ベグが、また時にはベグか近習の1人が見廻っていた。トルコ石門からシャイフザーダ門まで城壁の上を馬で行く事ができた。他の所は92b 徒歩で(92b) 進んだ。ある者たちが徒歩で進んで見廻ったが、1周するまでに夜が明けた。

ある日、シャイバク・ハーンが鉄門とシャイフザーダ門の中間地点に来襲した。私は予備軍であったので、戦がそこで起こるとそこに向った。ガーズリスタン門 Gāzuristān darwāzası [「漂布地門」] とスーザンギャラン門 Sūzangarān dawrāzası [「針作り職人門」] 方面については注意を払っていなかった。その日、私はシャイフザーダ門の上から、その先端の所で、1人の百騎隊長(yüz atlıq)の馬を小箭でうまく射た。一発で死んだ。この間に敵はウシュトゥル・ギャルダン附近で城壁の基部に到達する程に攻撃して来た。しかし私たちはここでの交戦に忙しく、その方面については全く気づかないでいた。

敵は25～26本の梯子を用意していたらしい。その梯子の広さはそれぞれ3人ないし2人が身を寄せあえば登れる程の広さのものであったらしい。敵は7～800人のすぐれた若党たちをこの梯子と共にガーズリスタン門とスーザンギャラン門の中間地点の前に潜伏させ、シャイバク自身は別の方面から攻撃を

しかけていたのであった。人々が、全てこの方面の戦に勃頭して、持場が無人
93a になった時、彼らはこの潜伏していた場所を出て (93a) 殺倒して、2つの門の
中間の、ムハンマド・マズィード・タルハンの邸の<p. 113 前の所から、1度
にこれらの梯子を城壁にかけたのである。ここはクチュ・ベグ>、ムハンマド・
クリー・カウチン、そしてその他の若党たちの持場であった。この若党たちは
ムハンマド・マズィード・タルハンの邸にいた。スーザンギャラーン門はカラ
・バルラースの持場であった。ガーズリスターン門はシーリーム・タガーイー
とその兄弟、そしてクトゥルク・ホージャ・キュケルダシュ Qutluq Khwāja
Kükäldash の持場であった。

戦が別の方面であったため、持場の人々は油断して、下僕や召使 (qul wā
qulluqchī) たちは用事のために家やバーザールへ行って分散していた。持場の
ベグたちは1〜2名の不頼・下層民 (yatīm yasīr) と残っていた。クチュ・ベ
グ、ムハンマド・クリー・カウチン、シャー・スーフィー Shah Şufī, さらに
1人の若党がよく働いて、勇敢さを発揮した。城壁の上へすでに敵兵の幾人か
が現れていた。また幾人かはまさに現れる所であった。これらの前述した4人
は走って行って、そこに到達すると切って切って打ち続けた。彼らは「敵を」
落として逃走された。中でもクチュ・ベグが最高の働きをした。これが彼の賞
讃さるべき勇敢な行動であった。この包囲の間に彼は2度手柄をたてた。カラ
93b ・バルラースもスーザンギャラーン門の持場に (93b) 独りで残っていた。彼も
よくもちこたえた。クトゥルク・ホージャ・キュケルダシュとクルナザル・ミ
ールザーもその持場であるガーズリスターン門にいた。彼らも少勢と共によく
留まって側方からよく弓矢を射かけた。

さらに1度は、カーシム・ベグが若党たちを将いてスーザンギャラーン門
を出てウズベクをホージャ・カフスィール Khwāja Kafshir まで追って幾人か
を落馬させ首を切って来た。

今は穀物が実る季節であった。誰も新しい穀物を城内に運んで来なかった。
包囲の期間が長びいた。人々の間に非常な食糧不足が生じた。遂には貪しく困
窮した者たちは<p. 114 犬の>肉やろばの肉を食べ始めた。馬の飼料も入手困
難となった。人々は木々の葉を馬に与えていた。そこで体験した所では、あら
ゆる葉の中で、桑の葉と黒榆の葉が馬にはわりとよく合った。ある者は乾燥し
た木をけずってその破片を水につけて馬に与えていた。

シャイバク・ハーンは**3～4カ月間**、城の近くには来なかった。やや遠くで、城の周囲をめぐり、移動して時を過ごしていた。ある夜、われわれの側が油断している時、夜半近くにトルコ石門方面に現れて太鼓を打ちならし、ときの声
94a をあげた。私はイスラム学院に(94a)いた。それは非常な不安と混乱をひき起した。これ以後、彼らは毎夜現れて太鼓を打ちならし、とき声をあげて我々をかき乱した。

私が何度周辺諸方面に使者や人々を派遣しても、誰の所からも援軍・加勢が来なかった。私たちになお勢力・力量があり、私たちがいかなる敗北・損失にもみまわれていなかった時ですら、彼らは救援・援助しなかった。いったいこのような時に、彼らがどんな胸算用で加勢する事があるのか？彼らをあてにして籠城する事は理なき事柄であろう。古人はこう云っている：籠城には、頭と両手と両脚が必要であると。頭とは指揮官の事であろう。両手とは2つの方面から来る援軍・加勢の事であろう。両脚とは城の水と貯えの事であろう。私たちはこれらの諸方面からの援軍・加勢に期待していたが、彼らはまったくどの人もどの人もそれぞれの思惑で行動した。

スルターン・フサイン・ミールザーの如き勇敢にして経験に富んだ君主は、私たちに加勢しなかっただけでなく、精神的な援助のよすがとして使者を派遣して来る事すらもせずに、シャイバク・ハーンにむけ、カマールッ・ディーン・フサイン・ガーズルガヒー Kamāl al-Dīn Ḥusayn Gāzurgahī を、包囲中に、使者とした派遣した。

タンバルはアンディジャーからピスケト Pisket[又は<p.115 Beshkent>]付近へ来た。アフマド・ベグとその一党は、[スルターン・マフムード]ハーンをもタンバルと対決するために出馬させた。彼らはラクラカーン Laklakān
94b (94b) とトゥーラク Tūrāk の庭園(chār bāgh)の近くで相対峙した。しかし両者は戦う事も踏み止まる事も無く相別れた。スルターン・マフムード・ハーンは軍にたけた人物ではなかった。軍事については全く無知であった。タンバルと対峙した時、ハーンはいくじのない言動をあらわにした。アフマド・ベグは素朴な人物(türk kishi)であった。しかし男らしい善意の人物であった。口はまことに荒かった。彼は「あんたが怖れ、こわがっているこのタンバルなど、たいした奴じゃねえ。あんたの眼がこわがっているのなら、眼をつむって進み、対決しようじゃねえか」と云った。

907年〔1501年7月17日—1502年7月6日〕の出来事

包囲が長びいた。糧食・食料はいずこからも来なかった。援軍・加勢もどこからも来なかった。軍民共に希望を失い、1人2人と城を出て逃亡し始めた。シャイバク・ハーンは城内の人々が弱体になったのを知ると、来て恋人たちの洞近くに下馬した。私もシャイバク・ハーンに直面する、パーヤーン街 (Kūy-i Pāyān) のマリク・ムハンマド・ミールザーの邸に来た。この頃、ホージャ・フサインの子のウズン・ハサンが10~15人の従者らと共に到着して城に入った。前述〔51b 以下〕の如く、彼はジャハーンギールの敵対と私たちのサマルカンド放棄の原因となった人物であった。(95a) この入城はまことに勇敢な入城であった。

軍民の間に困窮と窮乏が増大した。私に近い者たちや私が重用した者たちが城を出て逃亡し始めた。ベグ階級の名を知られた者たちの内、ピール・ヴァイス、シャイフ・ヴァイス、〈p. 116 ヴァイス〉・ラーガリーは古くからの家来であったが、逃亡して投降した。

私たちは周辺諸地域からの望みを完全に絶たれた。どの方面からも援軍の来る望みは残されていなかった。糧食・食料も乏しくなった。あった糧食もほとんど尽きた。どこからも糧食・食料は来なかった。

この状況の中でシャイバク・ハーンが和平の提案をしてきた。もしも1方面からでも希望が持てたなら、あるいは糧食が期待できたなら、誰が和平話に耳をかす事などあったであろう。しかしやむを得なかった。和平の約束のごときものをして、夜、二更に近い時刻に、私はシャイフザーダ門から出城した。私は母のハーヌムを伴って出た。また2人の女性も出城した。1人はビチュケ・ハリーファ Bichkā Khalifa で、もう1人はメンリク・キュケルダシュ Menglik Kükaldash であった。私の姉のハーンザーダ・ベギムはこの脱出に当ってシャイバク・ハーンの手には落ちた。

私たちは、真暗な夜、ソグドの大公共用水 (uluq shāh-jūylar) にぶつかって道を見失い、四苦八苦しながら夜明け時にホージャ・ディーダールを過ぎ、95b 朝の礼拝時 (sunnat waqtı), (95b) カルブグ Qarbugh の丘によじ登った。カルブグの丘の北からジューダク村 (Jūdak kenti) の麓を経て、イラン・オ

ティ Ilan otı に向って移動した。道を進んでいる時、私はカンバル・アリー、カーシム・ベグと馬の駆けくらべをした。私の馬が先行した。私は後方にいる彼らの馬を見ようとしてふりかえった。結び目がゆるんでいたらしく、鞍がまわって私は頭から大地につっこんだ。その時は起き上って出発したが、私の頭は夕刻まではっきりしなかった。この世で起こった諸事件がまるで夢・まぼろしの如く私の眼前に現れ、心をよぎった。

おそく午後の礼拝時に、私たちはイラン・オティに下馬し、馬を殺して肉を串に刺して焼肉 (kebab) にした。馬をほんの少時休ませて出発した。私たちは夜明け前にハリーリーヤ村 (Khaliliya kenti) に到着して下馬した。ハリーリーヤからジザク Dhizak に到着した。当時ジザクにはハーフィズ・ムハンマド・ベグ・ドウラダイの子のターヒル・ドウラダイ Tāhir Dawladay がいた。肥えた肉と良質のパンが豊富にあり、甘いメロンとうまい葡萄もたっぷりとあった。私たちはあのような困窮からこのような潤沢に、またあのような試練からこのような安全へとたどり着いたのであった。

不安と困窮の後、安息を見出したり。

新たなる命、新たなる世界を見出したり。

96a 死の怖れは心からとりのぞかれ、飢の (96a) 苦しみも人々からぬぐい去られた。私たちの人生で、これ程にゆったりとした気分を味わった事が無かった。それまで私たちは安全と潤沢の値打ちがこれ程のものとは知らないでいた。喜びは苦しみの後、安全は難儀の後、よりうれしく、よりよいものである。私は生涯に4～5回、これと同様、苦しみから安らぎに、難儀から安逸へという体験を味ったが、これがその最初の体験であった。私たちはこのような敵という試練と飢えという苦しみから解放されて、安全のもたらす安らぎと、潤沢のもたらす寛ぎに到達したのである。

私たちは3～4日、ジザクで休息をとった。その後、ウラ・テペに向って出発した。パシャーガルは少しこの道からは離れていたが、私がかつてしばらくそこに居た事があったので [59a-60a参照]、過ぎて行く途中で行って、そこを訪れた。パシャーガルの城で、ながらく私の母に仕えたがこの時は馬が無いためにサマルカンドに残る事になった家庭教師に出くわした。挨拶を交し、私は状況についてたずねた。彼女はサマルカンドからここまで歩いて来たのであった。私の母ハーヌムの妹のフブ・ニガール・ハーヌムがこの世を去ったと云う

事であった。皆がウラ・テペでそれをハーヌムと私に告げた。私の母の母もア
96b ンディジャーで死去した (96b) と云う。その事もここで聞かされた。

ハーヌムは、私の祖父のハーン〔ユースス・ハーン〕が鷹となって以来〔死去して以来〕、その母、弟、妹たち、つまり〔義母の〕シャー・ベギム、〔弟の〕スルターン・マフムード・ハーン、〔妹の〕スルターン・ニガール・ハーヌムとダウラト・スルターン・ハーヌムに会っていなかった。別れてから13～14年たっていた。彼女はこれらの親族に会うためにタシュケンドに向われた。

私はムハンマド・フサイン・ミールザーと相談して、ウラ・テペの〈p. 118 村々〉の1つであるディフケト Dikhket〔又は〈p. 118 Dihket〉〕という所に冬営地を設営した。行って家族をディフケトに置き、数日後、私もシャー・ベギム、おじのハーン、それに親類縁者に会うためにタシュケンドに向った。私は行って、シャー・ベギムとおじのハーンに挨拶し、数日間そこに滞在した。私の母の同腹の姉であるミフル・ニガール・ハーヌムもサマルカンドから到着された。私の母のハーヌムは病にかかっておられた。まことに重い病であった。きびしい危険な状態を過ごしておられた。

ホージャカ・ホージャ猊下がサマルカンドを出て来られてファルカト Farkat に滞留しておられた。私はファルカトにおもむきホージャにお会いした。私は、おじのハーンが恩恵・親切の立場に立って私に1地方とか1区域 (wilāyat wā pargana) を与えてくれる事を希望した。ハーンはウラ・テペを約束された。
97a しかしムハンマド・フサイン・ミールザーは (97a) 〔それを私に〕与えなかった。彼が自分の判断で与えなかったのか、それとも上から指示があったのか、私は知らぬ。

数日後、私たちはディフケトの農民の家々に下馬した。ディフケトはウラ・テペの山麓村の1つで、大きな山の麓にある。この山を越えるとマスチャー Maschā〔又は〈p. 118 Masikhāy〉〕となる。住民はサルト人で定住民 (deh-neshīn) であるが、トルコ人の様に家畜を所有する人々であった。ディフケトの羊は40,000頭と数えられていた。1人の老人がいた。60～70歳になっていた。しかしその母がまだ健在であった。すこぶる長生きした婦人で、111歳であった。ティムール・ベグがインドに遠征した時、この婦人の親族の1人がその遠征に加わったという。それを記憶し、話していた。ディフケトにはこの婦人自らの血をひく孫や孫娘、ひ孫が96人いた。死んだ者を合わせると200人にのぼ

った。彼女の孫の孫の青年は25～26歳の真黒なひげを持つ若者であった。

私はディフケトに滞在中に、ディフケト周辺の山々をいつも徒歩で見てまわ
97b った。ほとんど裸足で (97b) 歩いていた。裸足でよく歩いたので、足は山と石
を区別せぬ程になっていた。そのような散歩の際、ある日、午後の礼拝と夕の
礼拝の間の時刻に、1本のせまい変りやすい道を、1頭の牛が下手へ進んでい
た。私は「この道はどこへ行くのだろうか？牛をよく見よ。道がどこへ通じてい
るのかがわかるまで、牛を見失うな。」と云った。ホージャ・アサドゥッラー
Khwāja Asad Allāh が冗談に「牛が寝たらどうしましょう」とペルシア語で
云った。

この冬、騎兵の内の若干の者たちは、私たちと共に根なし草の状態で過ごす
事にたえられず、アンディジャーンにおもむく許しを求めた。カーシム・ベ
グが「この人たちが行く時に、ジャハーンギール・ミールザーに、特別にあなた
が身につけている物を贈りなさい」と懸命に上奏した。私は私の白テンの帽
子を贈った。カーシム・ベグはまた「タンバルにもあなたが何か送ったら、
まずい事になるでしょうか」と強調した。私は同意しなかったけれど、カー
シム・ベグが強調するため、ノヤン・キュケルダシュがサマルカンドで彼自身
の為に作らせた彼の刀をタンバルに送った。来年の出来事の中〔107a参照〕で
述べるように、私の頭を切る事になるのがまさにこの刀であった。

数日後、私がサマルカンドを脱出した際に残留しておられた私の祖母のイセ
98a ン・ダウラト・(98a) ベギムがサマルカンドに残った家族・一族、そして飢え
やせた者たちと共に到着させた。

この冬のなかば、シャイバク・ハーンはホジャンド川を氷上を渡って、シャ
ールヒーヤとピスケント Piskent [又は 94a Pisket ; <p. 119 Beshkent>] 付
近を攻撃した。知らせが届くと、私たちは兵が少いのに眼もくれず急ぎ出発
した。ホジャンドの下流の村々の1つであるハシュト・ヤク Hasht-yak の対
岸を通して進んだ。寒気はすこぶる厳しかった。この付近ではハー・ダルヴィ
シュの風〔4b参照〕がやまらずに常に強烈にまい上っている。寒さは、その2～
3日の間に2～3人が寒気の猛威によって死亡した程であった。私は沐浴する
必要があった。1つの用水路の所で、その両岸の部分は全て結氷していたが、
中央の部分は水の流れが速いため結氷していなかった。私はこの水に入って身
体を清めた。16回水に身体を沈めた。水の冷さはすこぶる身にしみた。

翌朝、私たちはホジャンド川をハースラル Khāşlar の対岸から氷上を渡った。川を渡ると、夜になっても休まずピスケントに到着した。シャイバク・ハーンはシャルヒーヤ近郊を攻撃して去った。

当時、ピスケントはムッラー・ハイダルの子アブドゥル・ミナーン ‘Abd al-Minān の手中にあった。アブドゥル・ミナーンより年下のムーミンという名の駄目なぐうたらな息子が私がサマルカンドに居た時に私のもとに来ていた。
98b おおむね私は目をかけていた。ノヤン・キュケルダシュがサマルカンド (98b) で彼とどのようなみだれた生活をしていたかは私は知らぬ。このおかま (köt bergüchi) はうらみをはぐくんでいたらしい。私たちは、ウズベクの攻撃隊が去った知らせを得ると、ハーンのもとへ人を遣し、ピスケントから移動して、アーハンギャラーン Āhangarān の村々に3～4日滞留した。

ムッラー・ハイダルの息子のムーミンは、サマルカンドでのなじみの故に、ノヤン・キュケルダシュ、アフマド・カーシム、そして若干の者たちを宴会に招いた。私がピスケントから移動した時、彼らはピスケントに残ったのであった。ムーミンはこれらの人々を1つの崖の傍らで接待した。私たちは進んで、アーハンギャラーンの村々の後、サームスィレク Sāmsirāk という村に下馬した。翌朝、ノヤン・キュケルダシュが崖から酔って落下して死んだという知らせが届いた。

私はノヤンの母方のおじにあたるハック・ナザル Ḥaqq-naẓar を一隊と共に派遣した。彼らは行って、ノヤンが落ちた所を調べ、ノヤンをピスケントに埋葬して帰って来た。彼らが宴会を催した場所から1アトゥム〔アトゥムは「矢の飛ぶ距離」〕離れた1つの高い崖の下にノヤンの死体が発見された。ムーミンがサマルカンドでのうらみをはぐくんでノヤンを殺したのではないかと疑う者もあった。しかし真相を誰も知らなかった。私はすこぶるショックを受けた。私が人の死に、これ程動揺した事は稀であった。私は1週間ないし10日
99a 間、ずっと (99a) 泣き続けた。私はその死の紀年銘「ノヤン死せり」(fawt shod Nūyān) を作った。数日後、私は引返し、ディフケトに到着した。

春になって、シャイバク・ハーンがウラ・テペに来るという情報があった。ディフケトは平地であるため、私たちはアーブ・ブルダン峠 (Āb-burdan dābānı) を通ってマスチャー山地 (Maschā kūhistānı) へ越えた。マスチャーの下村がアーブ・ブルダンである。このアーブ・ブルダンより下方に1つの

泉がある。この泉の所に1つの墓がある。この泉より上方がマスチャーの領内である。そして下方はパルガル Palghar の属地である。この泉の所で泉の傍らにある石に、私は次の3行の詩を彫りこんで刻した。

聞きたり、幸せの星持つジャムシード、

泉のほとりなる巖石にかく刻めりと。

「これなる泉のほとりにて、われらのごとき者多く息継ぎぬ。

されど、われらがまばたきの間に皆逝きぬ。

われら、勇と力もて世界を征したりき。

されど冢墓にまでそを持ち行く事かなわざりき。」

その山地では石に刻して詩やその他のものを書きつけるのがならわしであった。このマスチャーにいる時に、詩人のムッラー・ヒジュリー Mullā Hijrī がヒサル方面から来て私に仕えた。その頃、私はこのカスィーダの冒頭の1行 (maṭlaʿ) を書いた。

肖像画、いかにそなたを飾りたてんも、そなたはそれに勝る。

人、そなたを「命」と云う。されど卒直に云わん、そなたは命に勝る。

99b シャイバク・ハーンはウラ・テペの周辺地帯に来てある程度の略奪をして去った。シャイバク・ハーンがウラ・テペ (99b) にいた時、私たちは兵が少く武器も無いのをかえりみず、マスチャー〔又は Masiḥā〕に家族を残して、アーブ・ブルダン峠を越えてディフケト近郊に到着した。夜明けに近いのを頼りに、眼前の好機をのがさぬためであった。しかしシャイバク・ハーンは急ぎ退却した。私たちはまた峠を越えてマスチャーに帰った。

私はふとこう考えた：このように山から山へ、略奪・強奪してさまよい、領地もなく土地もなく留まっているのは勧められた事ではない。ハーンのもとへタシュケンドへ行こうと。カーシム・ベグは行く事に同意しなかった。前述の如く [39b参照]、彼はカラ・ブラクで3～4人のモグールを軍規を正すために殺していた。おそらくこの理由で彼は行く事をためらったのである。私はかなり行くように強要したが、結局はそうにならなかった。彼は兄弟、一族郎党と共にヒサルへ去った。私たちはアーブ・ブルタン峠を越えてハーンのもと、タシュケンドに向った。

まさにこの時、タンバルは出兵して、アーハンギャラーンの谷に来た。軍中でムハンマド・ドゥグラト (通称ムハンマド・ヒサーリー)、そしてその弟の

スルターン・フサイン・ドゥグラト、カンバル・アリー・サッラーフが共同してタンバルの命をねらった。タンバルがこの重大事に気づくと、彼らは留まりえず、ハーンのもとに逃亡して来た。

私たちがシャールヒーヤにいる時、**犠牲祭の日** (qurbān ‘īdī) [ズィー・ヒッジャ月10日：1502年6月16日] がやって来た。私は滞留する事無く通過してハーンのもと、タシュケンドへおもむいた。私は次の四行詩を作っていた。私
100a は決められた脚韻 (qāfiya) に不安を持っていた。当時は、なお詩の (100a) 術語を今程には研究していなかった。ハーンは詩才のある人で、詩を作っていた。首尾ととのったガザル〔叙情詩〕ではなかったが、私はこの四行詩をハーンに誦んで、私の不安を申し上げた。しかし安心できるような断定的な答を得られなかった。ハーンもおそらく詩の術語はほんの少し勉強されただけだったのであろう。その詩がこれである。

人、逆境にあれば、他者を想わざりき。

人、異郷にあれば、その心楽しまざりき。

わが心、この異郷にありて楽しむ事なかりき。

人、異郷にあれば、げに心楽しまざりき。

私は後に、トルコ語で〔詩作する場合〕は、必要な時にはター (t) とダール (d), さらにガイン (gh) とカーフ (q) とカーフ (k) をお互いにおきかえる事ができるという事を知った。

数日後、タンバルがウラ・テペに來攻した。この知らせが届くと、ハーンはタシュケンドから出兵した。ピスケントとサームスィレクの間で左右両翼を整列させて、閲兵が行なわれた (dim kördilār)。モグールの慣習に従って、**纛** (tugh) が集められた。ハーンが馬から下りた。9本の**纛** (toquz tugh) が、ハーンの前に立てられた。1人のモグールが、1本の牛の脛骨に1枚の長く白い綿布を結び、それを手に持った。また3枚の長い綿布を3本の**纛**のヤクの毛のやや下方に結び、**纛**の木の部分の下を通して持って来て、その1枚の綿布の先端をハーンが踏んで立った。別の1枚の、**纛**に結んだ綿布の先端を私が踏んで立った。もう1枚の綿布の先端をスルターン・ムハンマド・ハーニケが踏んで
100b 立った。(100b) かのモグールは、綿布を結んだ牛の脛骨を手にとって、モグール語で何かを云い、**纛**を見ながら仕ぐさをし続けた。ハーンと全ての立っていた者たちは**纛**にむけて馬乳酒 (qumīz) をまいた。全ての笛・太鼓が1度に鳴

らされた。そこにいた整列して立っていた兵士らが1度にときの声をあげた。彼らは3～4回このようにした。その後彼らは乗馬して、ときの声をあげ、同様に兵のまわりを駆け続けた。

モグールの間では、チンギーズ・ハーンの法令 (tüzük) は、今日に至るまで、チンギーズ・ハーンが定めおいたまさにそのままである。右翼は右翼、左翼は左翼、中軍は中軍と、先祖以来のきまった場所に彼らは立つ。右翼でも左翼でもより尊敬されている者が、より端の方に立つ。右翼では、常にチョラス部とベグチク部の者が先端に行く事を要求していた。その当時、〔先端に立つ権利は〕チョラスのチュメン・ベグのカシュカ・マフムードの手中にあった。彼はまことに勇敢な若者であった。単にチュメンとして知られていたベグチク・チュメンのベグはヤークーブの子アイユーブ Ayyūb-i Ya‘qūb であった。彼ら2人は先端に行くために殴り合った。また互いに刀を抜き合った。結局は、たぶん次のように決定された：巻狩の円陣の際にはその内の1人が上位に立ち、軍陣ではもう1人が先端に行くと。

101a 彼らは翌朝までサームスィレク付近に巻狩の円陣を布き狩りをした。私は来て、トゥレク庭園に下馬した。(101a)私が完成した最初のガザルを、私はこの日、このユルトで完成した。その完成したガザル〔の第1行〕がこれである。

わが魂の他、信じうる友なかりしか。

わが心の他、秘を告げるべき友なかりしか。

6行であった。この後に私が完成したガザルは全てこのやり方で書いた。

この後、〔モグールたちは〕移動を重ねて、ホジャンド川の岸边に到着した。ある日、私たちはピクニックのようにして、川を渡り、食物を料理して、若党や小姓たちをよろこばせた。この日、私の腰帯の金の留め金が盗まれた。翌朝までにバヤン・クリーの子ハーン・クリーとスルターン・ムハンマド・ヴァイスが逃亡してタンバルの所へ行った。皆がこの行為〔盗み〕は彼らの仕わざではないかと疑ったが、確かめられたわけではない。アフマド・カーシム・コフブルも退去の許しを求めてウラ・テペへ行った。彼もこうして去ってから再びもどって来なかった。彼はタンバルの所へ行った。

908年〔1502年7月7日—1503年6月25日〕の出来事

ハーンのこの出兵は、あまり得る所の無い出兵であった。城も取らず、敵も破らず、ただ行ってただ帰った。この間、私がタシュケンドにいた時、私は非常な困窮と貧苦の生活を送っていた。領地も無く、領地に対する希望も無かった。家来たちもほとんどが四散していた。残った少数の者も、貧窮のため私と生活を共にする事ができなかった。私は、おじのハーンの宮廷へ出かける時にも、時にはたった1人、時にはたった2人の伴を連れて行っていた。しかしよい点は、彼らが知らぬ人々ではなく、同じ血をひく人々であった点である。

101b (101b) 私はおじのハーンに顔を見せると、いつもシャー・ベギムの所へ行っていた。私はそこに自分の邸と同様に、ターバンもつけず、靴もはかずに入っていた。遂には、このような窮状とこのような貧窮によって、私は絶望的になった。

私はこう思った：「このような困難と共に生きるよりは、立ち去った方がましだ。私がこのような困窮と慟哭と共にある事を人が知るよりも、足のおもむく限り進んだ方がましだ」と。私は中国（Khitāy）へ行く事に決め、立ち去る事に決めた。私は幼少の頃より、中国の方面に興味を持っていた。しかし王国や関係者たちのため、これまでは不可能だった。王国は失われ、私の母は、その母や弟のもとに合流された。旅の妨げとなるものは除去された。あの心配事は無くなった。

ホージャ・アブル・マカーリムの仲だちで私はこう提案した：「シャイバク・ハーンの如き敵が出現している。彼の与える損害は、トルコ人にとってもモゲール人にとっても同様である。彼がなお部民を十分に統御できず、強大化していない今、次の詩にもあるように、この計画を実行する事が必要である。

消せるなら今日の内に消せ。

火が燃え上れば世界を焼く。

弓引く事を忘れるな。

敵が弓弦をかけられる内は。

〔サーディー『ゴレスターン』第8章第11話〕

私のおじの小ハーン〔スルターン・アフマド・ハーン；アラチャ・ハーン〕

も24～25年間ほど兄君に会っておられなかった。私もあのお方に会った事がない。私が行って、おじの小ハーンに会い、〔両ハーンの〕会見の仲だち役、仲
102a 介役をつとめる事はできないだろうか」と。私がこの口実でこの環境を(102a) 抜け出し、モグーリスターンとトゥルファン **Turfān** に行き着けば、もう何の妨げも不安も残らず、私は自分のたずなを自分の手中にする事ができるであろう。この私の考えに誰も気づいていなかった。また誰にも知らせなかった。なぜなら私の母にすらこのような事を話す事はできなかったのであるから。

また私の周囲には幾人かの種々の身分の者たちがいた。彼らはこれ以外の希望をもって、私の所に〔皆からは〕離れて、困窮しつつ暮していたのである。彼らにもこのような事を告げるのは無慈悲な事であった。ホージャ・アブル・マカーリムはシャー・ベギムとおじのハーンにこの事を告げた時、彼らが同意したと理解した。しかし彼らはまた、ふと私が親切にされないので退去の許しを求めているのではないかと考えた。彼らはこのために恥じて、しばらく許可するのをためらった。

まさにこの時、私の小おじの所から人が来て、まさに小ハーンが来つつある事を告げた。かくして私のこの計画は不可能となった。また1人が来て、小ハーンが近くまで来たという知らせをもたらすと、シャー・ベギム、小ハーンの妹のスルターン・ニガール・ハーヌムとダウラト・スルターン・ハーヌム、私、スルターン・ムハンマド・ハーニケ、ミールザー・ハーンが皆でおじの小ハーンを出迎えに出発した。タシュケンドとサイラーム **Sayrām** の間にヤガー **Yaghā** [＜p. 125 **Yaghmān**＞] という村とさらにいくつかの小村がある。イブラーヒーム・アタ **Ibrāhīm Ata** とイスハーク・アタ **Ishāq Ata** の墓がそこにある。私はこれらの村々の所まで行った。

102b 私は小ハーンがこの時来ているという事を(102b) はっきりと知らずに、状況から、急いで乗馬していた。突然、ハーンと出くわした。皆すぐに下馬した。私は前進した。私が下馬するとハーンも止った。彼は大変とまどった。おそらく、1カ所で下馬し坐って私と堂々と挨拶を交そうと思っていたのであろう。近づくとは私は下馬した。場所が場所だけに彼は膝まづく機会も無かった。私は膝まづいて進み挨拶した。ハーンはとまどい困って、すぐに〔息子の〕スルターン・サーイード・ハーン **Sultān Sa'īd Khān** とバーバー・ハーン・スルターン **Bābā Khān Sultān** に下馬して私と膝まづいて挨拶を交すよう命じられた。

ハーンの子息らの内、この2人の王子が同行して来ていたのである。2人は13～14歳ぐらいであったろう。私たちはこの王子らと挨拶を交し、乗馬してシャー・ベギムのもとに来た。皆は座を占めて、過ぎ去った諸情況や過去の出来事について夜半まで座を立たずに語り合った。

翌日、おじの小ハーンは私にモグール式の衣服一式 (bash ayaq) と自分の腰帯と自分の鞍付きの馬をくれた。〔すなわち〕金のかざりのついたモグール帽と刺繍した中国のサテンの長衣、中国の腰帯であった。中国の腰帯には、古い慣例によって、左側に火打ち石の袋 (tashi chantay) と旅行袋、さらにまた3つか4つの物、つまり婦人がその傍らにつるす香水入れや小袋のような物をつるしていた。右側にも同様の3～4の物をつるしていた。

103a 皆はそこからタシュケンド方面に向った。(103a) おじの大ハーンもタシュケンドから3～4ユガチの所まで出迎えに出た。1つの場所に天幕を張り、大ハーンが座った。小ハーンが正面から進んで来た。近づくと、〔乗馬のまま〕ハーンの左手を通してハーンの後ろをまわって来て、ハーンの前で下馬して進んだ。会見の場所に着くと、9度膝まづき、進んで、挨拶を交した。大ハーンも小ハーンが近くまで来ると立ち上って挨拶を交された。しっかりと抱き合っ立っていた。もどる際にも小ハーンは9度膝まづいた。贈物を差出す時にも何度も膝まづいた。その後、進んで、座を占められた。

小ハーンの兵は、全てモグール式に装っていた。モグール式の帽子、中国のサテン、刺繍をほどこした長衣、モグール式の緑の馬のしり皮で作られた弓袋、そして鞍とモグール馬、そして美しい何ともいえぬ飾りを身につけて彼らはやって来た。小ハーンは比較的少数の伴と共に来た。1,000人以上2,000人以下であったろう。

おじの小ハーンは独特の品行の人物であった。刀の腕の確かな、勇敢な人物であった。武器の中では刀により信を置いていた。彼は、6つの出っぱり付のほこ (sheshpar) や普通のほこ、また棍棒や戦斧や斧は、〔効果が〕あるにはあるが、当たっても1カ所に効果があるにすぎないが、刀が当れば頭から足まで効果があると云っていた。彼はよく切れる刀をその身から離さなかった。腰に
103b さしているか (103b) 手に持っていた。地方で育ったので、やや田舎者でやや口ぎたなかった。私は、前述したモグール式に着飾っておじの小ハーンと共に来た。ホージャ・アブル・マカーリムはおじの大ハーンと共にいたが、私だと

わからなかった。彼は「このお方はどの王子かな？」とたずねていた。私が告げてはじめて私だとわかった。

彼らはタシュケンドに来ると大急ぎでスルターン・アフマド・タンバルにむけアンディジャーンへと出兵した。ケンディルリク峠の道をとって進んだ。アーハンギャラーンの谷に到達すると、小ハーンと私をやや先方に分遣した。峠を越えて、カルナーン *Karnān* のザバルカーン *Zabarqān* 近郊で、ある日、閱兵が行なわれた (*dim kördilār*)。兵を数えると30,000人であった。前方から、タンバルも兵を集めてアフスィに來ているという情報が入り始めた。両ハーンは相談して、私に1団の兵を与え、ホジャンド川を渡って、ウシュ及びウズケンド方面に行き、〔敵の〕背後にまわるという策が決定された。こう決定して、彼らは私に、アイユーブ・ベグチクをそのチュメンと共に、ジャーン・フサイン・バーリン〔又はナーリン〕をバーリン部〔又はナーリン部〕と共に与えた。またムハンマド・ヒサーリー・ドゥグラト、スルターン・フサイン・ドゥグラト、スルターン・アフマド・ミールザー・ドゥグラトは彼ら自身のみを（ドゥグラト・チュメンは彼らの手中に無かった）与えた。さらにカンバル・アリーを与え、サリグ・バシュ・ミールザー・イテルチ *Sarigh-bash Mīrzā Itārchi* を軍のダルガ (*cherik darughası*) とした。

104a 私たちはカルナーンでハーンらと別れ、サカーン *Sakān* 付近でホジャンド川をいかだで渡り、ホーカーン (104a) 地区をよぎり、クバーを抜き、アライルク *Alayluq* 地区を通してオシュにむけ急行した。夜明け時、オシュ城に敵の気づかぬ内に到達した。オシュの人々はどうする事もできず、オシュを手渡した。当然、その地方の人々は私たちを大いに望んでいた。しかしタンバルに対する怖れと、私たちが遠方にいる事のために、彼らはどうしようもなかったのであった。オシュに入城すると、アンディジャーンの東方や南方にある山地・平地の住民・部族が全て服属した。いにしえのフェルガーナの首府であったと思われるウズケンドにはよい城があった。ウズケンドは辺境地帯にある。その住民は私たちに臣従する事を受入れて、人を遣して私に服属した。

数日後、マルギーナーン人もそのダルガを打って追い出して私に服属した。ホジャンド川のアンディジャーン側にある諸城は、アンディジャーンを除き、全てが服属した。この頃、このように各地で〔自分に対する〕反抗・反乱が続いていたというのに、タンバルはなお自己をとりもどさず、アフスィとカルナ

ーンの間地点で騎兵・歩兵と共にハーンらに対陣し、自らを枝や壕で固めてそこに駐屯していた。数回そこで少人数の小ぜり合いがあったが、両軍の勝敗が明らかになるような戦ではなかった。アンディジャーン側の住民・部民、
104b (104b) 城・諸地方のほとんどが私に服属していたので、自然、アンディジャーンの人々も私を望んでいた。しかし彼らはどうする事もできないでいた。

ふと私はこう考えた：1夜、私たちがアンディジャーン近くへおもむき、人を入城させ、ホージャや有力者たちと話合わせるならば、彼らが私たちをどこか1カ所から入城させる可能性がある。この考えから、私たちはオシュを出馬して、夜半、アンディジャーンから1キョルフ〔45a 参照〕の所にあるチル・ドフタランの正面に到着した。私はカンバル・アリー・ベグと若干のベグたちを、密かに入城してホージャや有力者たちと話合わせるために先行させた。私たちはこの行ったベグたちに期待して馬上に留まっていた。

ある者はねむりにつきつつあり、ある者はねむっていた。夜の3更であったであろうか、突然、太鼓のひびきとときの声が起こった。敵の多いか少いかもわからぬまま、気づかずにねむっていた人々は1度に、お互いを見ようともせず、あらそって急ぎ逃げた。私は人々を集める暇もなく、敵にむかってつき進んだ。ミール・シャー・カウチン *Mir Shāh Qawchin*、バーバー・シールザード *Babā Shīrzād*、ドースティ・ナーシル *Dūst-i Nāṣir* が私と共に出動した。私たち4人の他は、全ての者が逃走を選んだのであった。私たちは、この対決した敵の者たちが矢を射かけ、とき声をあげ、せまって来たので、少しばかり退却した。

1人の額の白い馬に乗った者が私に近く押し込んで来た。私はその馬を射た。
105a 横転して死んだ。彼らは、やや形ばかりの退却を(105a)した。私と共にいた3人が「真暗な夜で、敵が多いのか少いのかもはっきりわかりません。この4人で、どれ程相手に損害を与える事ができるでしょうか。行ってしまっても帰って来ない味方の所に行って、それから戦う事が必要です」と云った。私は走って、味方の所へ行き、打ったり、むち打ったり色々こころみたが、どのようにしても彼らは集まらなかった。再び私たちはこの4人でもどって矢を射た。敵は少しばかり前進して来るのをやめた。しかし、彼らは1～2度私たちが3～4人を越えぬのを見ると、再び味方の者を追って落馬させ始めた。私はこのように3～4度行って味方の兵を集めようとしたが、兵が集まるまでに、また同様に

この3人の者と共にもどって矢を射かけ、敵を退却させた。

敵は、2～3キョルフの地点まで、ハラーブーク Kharābūk とパシャームーン Pashāmūn に面する丘の所まで味方を追って来た。彼らは丘に到達するとムハンマド・アリー・ムバッシルと遭遇した。私は「この敵は少勢だ。止まって、馬で攻めよう」と云った。私たちは止まって、馬で攻めた。敵は到達すると、留まったままで〔動かずに〕いた。

諸方に四散していた味方があちらこちらから集まって来た。若干のきわめてすぐれた若党たちは、この敵との対決に際し、まっすぐにオシュに行った。その事情は以下の如くであったらしい。アイユーブ・ベグチクのチュメンに属する数人のモグールが、オシュで私たちと別れ、略奪 (qazaqlıq) のためにアンディジャーンの周辺に来たと云う。彼らは私たちの兵の叫びを聞いて、ひそかに前進して来て、合言葉を云った。

105b この合言葉 (oran) には2種類ある。(105b) 1つは各部族それぞれの合言葉で、例えばある部族の合言葉は「〔天窓の〕戸」(darwāna) であり、ある部族の合言葉は「トッカイ」(toqqay), 他の部族のは「真珠」(lu'lu') である。もう1つは、全軍に、戦時に、2つの言葉を合言葉として決めるものである。すなわち戦時に、お互いに遭遇した時、1人が1つの言葉を云うと、もう1人がはじめに決められていた言葉を云うものである。それはこうする事によって、味方を敵から識別し、自軍の者を外の者から区別するためであった。その進軍の際に決められた合言葉は「タシュケンド」と「サイラーム」であった。「タシュケンド」と云えば「サイラーム」と答え、「サイラーム」と云えば「タシュケンド」と答える事になっていた。

この合言葉を〔モグールが〕云った時、ホージャ・ムハンマド・アリーが前の方にいたらしい。モグールたちが「タシュケンド」「タシュケンド」と言いながら来た。ホージャ・ムハンマド・アリーはサルト人で、混乱して、向いあった時に彼もまた「タシュケンド」「タシュケンド」と云った。モグールたちは敵であると考えて、ときのをあげ太鼓を打ちならして矢を射かけた。まさにこのような間違いの言葉をさげんだ為に、私たちはもちこたえられずに四散してしまったのである。かくして最初に考えた如くならず、私たちはまたもどってオシュに帰った。

5～6日後、山地や平地の城が私に服属したため、タンバルとその一党は心

安からず動揺し、その兵や民は3人ずつ4人ずつと山地や平地へと逃亡し始めた。その内部から来た若干の者たちは「タンバルの事は破滅にひんしている。この3～4日の内に破れ退却するにちがいない」と述べた。この情報が届くと、私たちはアンディジャーンにむけ出発した。アンディジャーン城にはタンバルの弟のスルターン・ムハンマド・ガルプク *Sultān Muḥammad Galpuk* がいた。私はトゥトルク道 (*Tutluq yolu*) をとって来て、アンディジャーンの南にあるハーカーン *Khākān* を、(106a) 正午の礼拝時に略奪させた。私自身も略奪隊の後を進み、アイシュの丘 (*poshte-yi 'Aysh*) のハーカーン側の麓に到着した。

先鋒から、スルターン・ムハンマド・ガルプクがそこにいた兵を連れて居住区、果樹園地帯を出て、アイシュの丘の麓に出て来たという情報が入った。略奪隊はなお集合していなかった。しかし私は、それは無視して、ただちに敵にむかってすばやく移動した。ガルプクの兵は500人以上であったであろう。わが軍はそれより多勢であったが、兵士らが略奪のために四散していた。そのため対陣した時には、まったく同数であったであろう。私たちは軍陣・隊列を整える間もなく、大急ぎで敵にむかって進んだ。敵は、私たちが接近すると留まり得ず、1～2合刀を用いるほどもなく、急に逃走した。味方は、〔アンディジャーンの〕ハーカーン門の近くまで敵を落馬させつつ進んだ。敵を圧迫し、居住区の傍らのホージャ・カッタ *Khawāja Katta* に到達した時、日没時の礼拝の時刻となった。私はただちに城門に行く考えだった。しかしドースト・ベグの父のナースィル・ベグとカンバル・アリー・ベグといった高齢の経験に富むベグたちが「夜になりました。暗い時に城の近くに集まって進むのは成算がたちません。少し後退して下馬しましょう。明日になっても敵はどうしようもありません。彼らは城を与えるでありましょう」と上奏した。私たちはこの経験
106b 豊かなベグたちの言葉に従って、居住区域の傍らから (106b) 退却した。もし私たちが城門に向っていたならば、疑いなく城が獲得できたであろう。

就寝時の礼拝の時刻であった。私はもどり、ハーカーン水路を過ぎてラバーティ・ルーザク *Rabaṭ-i Rūzaq* 村の傍らに下馬した。タンバルが破られて退却しアンディジャーンに来るという情報があったにもかかわらず、経験不足の故にそれを気にとめなかった。私は、ハーカーン水路の如く堅固な水路の傍らを固めて野営せず、水路を渡って来てラバーティ・ルーザク村の傍ら、低い平

地に野営した。私は斥候も放たず、夜警も置かず、不注意にねむっていた。

夜明け方、人々が甘いねむりをむさぼっていた時、カンバル・アリー・ベグが走って来て大声で「敵が来たぞ！起きろ！」と叫んで、一刻も留まらず走り過ぎて行って、もどらなかった。私はいつも、平時でも長衣をとらずに横になっていた。起きるとすぐに刀と箠を身につけただちに乗馬した。嚮手は嚮を結ぶ暇も無く、嚮を手にとって乗馬した。私たちは敵が来つつある方向に向って進んだ。その出発に当って10人から15人が同道した。矢の1射程距離 (bir oq atımı [矢ごろ]) 程進んだ時、敵の攻略隊の所に到達した。この時、私と共に10人程の者がいたであろうか。私たちは急ぎ進んで、敵の所に達し、矢を射かけ、前方の者を捕え、かつ進んだ。私たちが1射程追程って行った時、敵の中軍に行きついた。

107a スルターン・アフマド・タンバルは100人程の者たちと共に(107a)止まって立っていた。タンバル自身はもう1人の男と、戦列から前の方に、まるで門のように立って「打て！打て！」と云っていた。しかし彼の部下たちはほとんどの者が二の足を踏み、「逃げようか、逃げずにおこうか」と云っている如くに立っていた。この時、私と共に3人が残っていた。1人はドースティ・ナーシル、1人はミールザー・アリー・キューケルダシュ、もう1人はカリームダーディ・ホダーイダード・トゥルクメンであった。私は親指ではさんでいた矢をタンバルの胄めがけて射た。私はまた箠に手をのばした。おじのハーンが1つのま緑色の弓先のねじれを正す機具 (gūshe-gīr) を私にくれていた。それが出て来た。捨てるのは気がひけた。また箠にもどしたが、〔そうしなければ〕その間に2本の矢を射るだけの時間があつたであろう。また1本の矢をつがえて、私たちは前進した。この3人の者たちもより後方に残された。

私に対面した2人の人物の内の1人はタンバルであつたと思うが、彼もまた前進して来た。間に1本の公道があつた。私がこちら側から、彼があちら側から道に入り、道の上で相対した。私の右手の方向が敵方で、タンバルの右手の方がわが軍の方向であつた。タンバルは甲胄の他に全ゆる武器を身につけていた。私は箠と刀の他は何も武器を持っていなかった。私は手にしていた矢で彼の楯をその留め物を貫いて射た。この際、敵は私の右脚を矢で貫通した。私は頭に帽子のような胄をつけていた。タンバルが私の頭を切りつけた。私の頭は

107b 刀で打たれてぽっと(107b)なった。私の胄は糸1本も切断されなかったのに、

私は頭に大傷を負った。私は剣のつかにも手をかけられなかった。刀はさやに入ったままで、刀を抜く暇すらも見出せなかった。私は多くの敵の真ただ中にたった独りで残っていた。留まるべき時ではなかった。私はたづなをめぐらした。さらに1本の刀が私の矢につきささっていた。私が7～8歩もどった時、味方の徒歩の3人が私に加わった。タンバルは私の後、ドースティ・ナーシルにも刀をふるった。彼らは矢が的まで飛ぶ程の距離 (nishāna atımlı), 私たちを追跡して来た。

ハーカーン水路は大きな公共用水である。流れは深く、どこも渡れない。しかし神は正義をもたらされた。この水路の1つの渡しのま正面に私たちは到着した。水路を渡るとドースティ・ナーシルの馬が弱って倒れた。止まって彼を乗せ、ハラーブークとファラーギナ Farāghina の間にある丘を経てオシュ方面にむかった。この丘に出た時、マズィード・タガーイーが来て加わった。彼も右脚のひざから下に矢傷を負っていた。貫通してはいなかったが、オシュまで非常に苦勞して到達した。敵は私のすぐれた部下たちを落馬させた。ナーシル・ベグ、ムハンマド・アリー・ムバッシル、ホージャ・ムハンマド・アリー、ホスロー・キューケルダシュ、小姓ヌーマーン Nu‘mān chuhra がここで死んだ。また軽装の若党の多くも死んだ。

108a ハーンたちはタンバルを追って来てアンディジャーン近郊に下馬した。大ハーンは禁地の傍ら、(108a) 私の祖母イセン・ダウラト・ベギムの、「小鳥の水車場」 Qush-tegirmān と呼ばれる庭園に下馬した。小ハーンはバーバー・タヴァッキュル道場 (langar) の近くに下馬した。2日後に、私はオシュから到着した。そして大ハーンに「小鳥の水車場」で会った。私がハーンに会ったその時に、私に服属した諸地域が小ハーンに与えられた。彼らは私に次のように言訳した：シャイバク・ハーンの如き敵がサマルカンドのような町を取って強大化しつつある。この問題解決のために小ハーンを何という〔遠い〕所からお連れした事であろう。彼はここには土地を持っていない。その領地は遠い。ホジャンド川の南の、アンディジャーンをはじめとする諸地域を、そこでユルトを設営するために〔彼に〕与えねばならない。彼らはホジャンド川の北にあるアフシをはじめとする諸地域を私に約束した。そして彼らは、「ここに留まった後、進撃してサマルカンド地方を取ってそなたに与えよう。その後はフェルガーナ全域が小ハーンのものとなろう」と云った。私にとってこの約束は明ら

かに欺瞞に思われた。サマルカンド征服が達成された後、実際にどうなるかは分ったものではなかった。しかしどうしようも無かった。私は否応なしに承諾した。

私が大ハーンのもとを離れて乗馬し小ハーンに会う為に進んでいた時、サッラーフ〔「皮はぎ人」〕の名で知られているカンバル・アリー・ベグが私に近づいて来て云った：「御覧になりましたでしょう？彼らは、ただちに、あった領地を取りあげましたね。この連中からはあなたの将来への道は開かれません。

108b (108b) 今は、オシュ、マルギーナーン、ウズケンドそれに服属した諸地方や民衆・部民があなたの手中にあります。すぐに行って、オシュに入り、城を固め、スルターン・アフマド・タンバルに人を送り、和平して、モグールを打って追出し、諸地方を〔あなた方〕兄弟でお分けなさい」と。私は「そんな事が許されるだろうか。ハーンらは私の血縁である。この人々に臣従する方が、タンバルを臣下にするよりはるかにましだ」と答えた。カンバル・アリーはその言葉が効なき事を見てとると、話した事を恥じてひき返した。

私は進んで、おじの小ハーンに会った。前に会った時には、私が不意に到着して進んだので、小ハーンは下馬する暇も無く、非公式的に会見した。この時は、私が近づくと、彼はテントのロープの端まで走り出た。私は、脚の矢傷のため杖をついて苦労して進んだ。着いて拶揆を交した。彼は「弟よ！ あなたは勇敢だったそうだね」と云って、私の手をとってテントに連れて行った。やや小さなテントがたてられていた。辺境で成長したので、彼のテントと坐っている所は、麗々しくなくカザク的であった。メロンや葡萄や食料品が皆、彼自身が坐っている同じ所にあった。

私は小ハーンのもとを辞して自分のオルドに帰った。彼は私の傷を見るため、アテケ・バフシ *Atākā bakhshī*〔又は *Etägä bakhshī*〕という名のモグールの外科医を派遣した。モグール人は外科医をも「バフシ」〔博士〕と云う。彼は
109a 外科学にすこぶる熟達していた。人の脳が〔109a〕とび出しても薬で治した。植物の根で、どんな傷でも簡単に治した。ある傷にはしっくりの様な薬をつけた。またある傷には服用薬を与えた。私の脚の傷には、獣の脚の皮 (*buchqaq*) を押しつける様に命じた。串線法は用いなかった (*fitil qoymadı*)。根のような物をも1度服用させた。彼自身、「ある人の脚の細い部分が破損し、手ほどの大きさの場所がこなごなになった。私はその肉を切り開いて、脚の骨を全部取

り出し、骨の代りに薬を粉状にして入れた。その薬は骨の代りに、まったく骨と同様になった」と云っていた。彼はこのような驚くべき、大変な事をよく話していたので、この地方の外科医たちはそのような治療法にうちのめされていた。

2～3日後、カンバル・アリーは自分の云った事でおそろしくなって、逃亡してアンディジャーンに入城した。数日後、ハーンらは協議一決して、アイユーブ・ベグチクをそのテュメンと共に、ジャーン・ハサン・ナーリン〔又はバーリン〕をナーリン〔又はバーリン〕・テュメンと共に私のもとに派遣し、またサリグバシュ・ミールザーを軍のベグ (cherik begi) にして、合計1,000～2,000の兵を私に加え、アフフィ方面に派遣した。アフスィにはタンバルの弟のシャイフ・バーヤズィードがいた。カーサーンにはシャフバーズ・カルルク Shahbāz Qarluq がいた。その時、シャフバーズは来て、ナウケンドの城の前面に駐屯していた。私たちはホジャンド川をビチル・アタで渡りナウカンドのシャフバーズにむけ急行した。

109b まだ夜が明ける前に、私たちがナウカンド近くに到達した (109b) 時、ベグたちは上奏して「この人たちはきっと気づいている。隊列をくずさず、明るくなってから到達して進撃するのが適切である」と述べた。私はかなりゆっくりと進んだ。シャフバーズは気づかずにいたらしい。私たちがナウカンド近くに到達した時に気づいて、城外から、逃げて城内に入った。このような事はしばしば起こるものだ。敵が気づいていると簡単に思いこんで、好機が去るのである。経験とは、まさにこのような事のことである。要するに、機会が来た時に努力と注意をおこたらぬ事が肝要で、後の後悔は役にたたぬ。

夜明け時、城の周囲で小ぜり合いがあった。私たちは全力では戦わなかった。私はナウカンドから山の方角のビシュハーラーン Bishkhwārān 方面に略奪の仕事に出かけた。シャフバーズ・カルルクはその機会を僥倖とみなし、ナウカンドを出て逃げてカーサーンへおもむいた。私たちは帰って来て、ナウカンドに駐屯した。

この頃、周辺諸地城に何度か兵がおもむき攻撃していた。1度はアフスィの村々を攻撃した。さらに1度は、行ってカーサーンを攻撃した。シャフバーズとウズン・ハサンのミーラム Mīram という名の養子が戦に出城し、戦って切られ、そこで死んだ。

アフスキの堅固な城の1つがパープ城である。パープの人々はパープ城を固めて、私たちの所に人を派遣して来た。私はサイイド・カースィムを数名の若
110a 党と共に派遣した。(110a) 彼らはアフスキの上流の村々の向いから川を渡って進み、パープ城に入った。

数日後、めざましい事が起こった。当時、イブラーヒーム・チャプク・タガーイー、アフマド・カースィム・コフブル、カースィム・ハティケ・アルゲン Qāsim Khatikā Arghun が〔タンバルの弟の〕シャイフ・バーヤズィードと共にアフスキにいた。シャイフ・バーヤズィードは、これらの人々に200人程のすぐれた若党たちを加え、ひそかに、ある夜、パープ城にむけ派遣した。サイイド・カースィムは用心せず、気づかずにねむっていたらしい。敵が城に到達して梯子をかけて侵入し、門を取り、はね橋をおろし、敵の70～80人程のすぐれた武装した若党らが侵入した時、サイイド・カースィムに知らせが入った。彼は寝まきのような物を身につけて、5～6人と共に矢を射かけ、打ちに打って敵を退却させた。彼は数名の首を切って〔私の所に〕送って来た。彼がこのように不注意にねむっていた事は指揮官としてまことにふさわしくない。しかし少数でかくも多数の武装したすぐれた若党らを打ちのめして退却させたのはまことに勇敢な行為であった。

この間に、ハーンらはアンディジャーン城の包囲に専念していた。城中の者たちは、敵が城の近くに来る事を許さなかった。アンディジャーンの若党たちは騎馬で出城して、城外で戦闘を交えていた。

アフスキからシャイフ・バーヤズィードが〔私の〕味方につく宣言をして人を〔私の所に〕派遣しはじめた。彼は私たちを懸命に招請した。この招請の意図する所は、あらゆる策を用いて私をハーンらから別れさせる事であった。

110b (110b) 私がハーンらから別れれば、ハーンらはその立場を失うはずであった。この招請は、兄のタンバルと相談の上でなされたものと思われる。ハーンらと別れて彼らに合流するなどという事は、私たちの側にとってはおよそ考えられない事であった。私はこの招請の事をハーンらにほのめかした。ハーンらは「行け！ あらゆる手を使ってシャイフ・バーヤズィードを捕えよ！」と云った。このような偽瞞・謀略は、私たちのいつものやり方ではなかった。特に両者の間で誓約を行なう時に、このような偽りの誓約などをどうして行なう事ができよう。

私はふとこう考えた。私たちが何とかしてアフスィに入城すれば、あるいはシャイフ・バーヤズィードはタンバルと別れて私たちの側につくかも知れぬ。あるいはまたさいの目が変わって、よい目が出るかも知れぬと。私たちも使者を派遣した。彼は誓約を行ない協定を結んで、私たちをアフスィに招いた。私たちは行った。彼は対面のために出城し、私の弟のナースィル・ミールザーをも連れて来て、私たちをアフスィ城に伴って行った。彼は外城 (tash qurghan) の、私の父の墓陵の所にユルトと宿営をわり当てた。私は行ってそこに下馬した。

タンバルはシャイバク・ハーンのもとに兄のベグ・テルベを遣し、服従の宣言をして招請していた。この間にシャイバク・ハーンの信書が到着した。「〔私は〕行こう」と書かれていた。この知らせがハーンらのもとに届くと、彼らは浮足だって、留まりえず、アンディジャーンから出立した。小ハーンはその公正さによきムスリムである事で名声を得ていた。しかし、オシュとマルギーナーン、この服属した城々に彼が置いたモグールらは、人々の希望をふみにじり、
111a 悪行・暴虐を為し (111a) 始めた。ハーンらが出立すると、オシュとマルギーナーンの人々はただちに攻撃して、城内のモグールを捕え、略奪し、打ち、奪って城から追い出した。

ハーンらはホジャンド川を渡らず、マルギーナーン、カンディ・バーダームを経て退却し、ホジャンドで渡河した。タンバルはハーンらを追ってマルギーナーンに到着した。この状況の中で私たちの心は定まらなかった。留まる事については、彼らに十分な信を置く事ができなかった。また理由もなく彼らを置いたままにして出立する事も適当とは思われなかった。

ある朝、マルギーナーンからジャハーンギール・ミールザーがタンバルと別れ、逃げて来た。私が浴場にいる時にミールザーが到着した。私たちは拶挨をかわした。この時、シャイフ・バーヤズィードも混乱の態で到着した。彼は動揺していた。ミールザーとイブラーヒーム・ベグが「シャイフ・バーヤズィードを捕えるべきだ。内城を手に入れねばならぬ」と云った。確かにそうする事が事宜に適っていた。しかし私は「私たちは誓約をしたのだ。どうして誓約に背くような事ができようか」と云った。シャイフ・バーヤズィードは内城におもむいた。私たちは橋の所に人を配置しておくべきであった。しかし私たちは橋の所にも人を配置しておかなかった。経験に乏しいと、このような失敗が生

まれるものだ。翌早暁，タンバルが2,000～3,000の武装した兵と共に来て，橋を渡って内城に入った。

もともと私の兵はより少数であった。私はアフスィに入城すると，若干の者たちを諸城にむけ，また若干の者たちを統治や徴税のため諸方面に派遣していた。私と共にアフスィに (111b) いたのは100人よりは多かったであろう。そこにいた者たちと共に私は出馬した。私たちが路々 (kūchā kūchā) の入口の所に若党らを配備し，武具を身に着けた状態でいた時，シャイフ・バーヤズィード，カンバル・アリー，ムハンマド・ドーストがタンバルのもとから和平のために走って来た。私は戦のために任命した者たちをそれぞれの持場に立たせて，会談のため，私の父の墓所へおもむいて下馬し，ジャハーンギール・ミールザーをも呼んだ。ムハンマド・ドーストはひきかえした。シャイフ・バーヤズィードとカンバル・アリー・ベグが来た。私たちが墓陵の南のテラスに坐って会談に入ろうとしていると，ジャハーンギール・ミールザーはイブラーヒーム・チャプクと相談してこれらの者を捕える事に決めていたのである。私の耳に「この者たちを捕えねばなりません」と告げた。私は「落着け。今は捕えるべき時機をすでに失している。見よう。おそらく和平を結ぶ事によって事態は何とかなるであろう。何故なら，彼らはすこぶる多勢であるのに私たちはきわめて少数である。また彼らはこの強力な軍勢と共に内城にいるのに，私たちはこの貧弱な軍勢と共に外城にいるのだから」と云った。

シャイフ・バーヤズィードとカンバル・アリーもこの会談に出席していた。ジャハーンギール・ミールザーはイブラーヒーム・ベグの方に近づき，この計画をやめさせようと合図した。しかし逆に解釈したのか，それとも無視してこの行動に出たのかは私には分らぬが，イブラーヒームはただちにシャイフ・バーヤズィードを捕えた。立っていた若党たちが隅々から (112a) 接近してこの2人をめっちゃくちゃにした。和平・和睦の好機は去った。私たちはこの2人を人に委ねて戦へと出馬した。

私は町の1方面をジャハーンギール・ミールザーの責任下においた。ミールザーの兵は少なかった。1団の者たちを，私の部下の内からも，ミールザーの援けとして任命した。私はまずそこに到着すると，各地点に戦のための兵員を任命すると，ついでまた別の方面におもむいた。町の中央にやや平坦な所があった。私はそこに1団の若党らを配置して進んだ。この人々を多数の「敵の」

騎兵・歩兵が来て、そこから打ち払い、小路におし入って来た。まさにこの時、私は到着しつつあった。私は到着するとすぐ馬を走らせた。敵は抵抗せず、向きを変えてただちに逃亡した。〔敵を〕小路から逃亡させ、平地の所まで追いつめて刀をふるっていた時、彼らは私の馬の足に矢をあびせた。私の馬は膝をつき、私は敵の真ただ中に放り出された。私はすばやく起き上って、ただちに矢を射た。〔私の〕馬の口とりのカーブル *Kābul* は1頭のあまり良くない馬を持っていた。彼は下馬して私の所へ〔その馬を〕引いて来た。私はそれに乗った。ここに人を任命して、私はまた別の小路の入口に向って進んだ。スルターン・ムハンマド・ヴァイスが私の馬が良くないのを見ると下馬してその乗馬を私の所へ引いて来た。私はその馬に乗った。

この時、カースィム・ベグの息子のカンバル・アリー・ベグが傷を負って、ジャハーンギール・ミールザーの所からやって来た。彼は「しばらく前に敵が
112b ジャハーンギール・(112b) ミールザーを攻撃して動揺させた。ジャハーンギール・ミールザーは去って行った」と述べた。私たちはショックをうけた。この同じ時、パープ城にいたサイイド・カースィムが到着した。思いがけぬ、時宜にわなわぬ来訪であった。このような時に、あのような強固な城が手中にあれば有益であったのに。私はイブラーヒーム・ベグに「どうすべきだろうか？」とたずねた。彼は少し傷を負っていた。そのためか、或いは混乱していたためか、彼は適切な返答ができなかった。私の考えは、橋を渡って、橋を破壊し、アンディジャーン方面に向う事であった。

バーバー・シールザード *Bābā Shīrẓād* がそこでよい働きをした。彼は「城門を攻撃して出城しましょう」と云った。この言葉に従って、私たちは城門にむけまっすぐに進んだ。ホージャ・ミーリ・ミールアン *Khawāja Mīr-i Mīrān* もそこで勇敢な意見を述べた。小路の途中まで来た時、サイイド・カースィムとドースティ・ナースィルはバーキー・ヒーズ *Bāqī Khīz* と刀を交えた。私とイブラーヒーム・ベグ、ミールザー・クリー・キュケルダシュはより前方にいた。私が城門に直面すると、シャイフ・バーヤズィードがシャツの上にマントを着けて3～4人の騎兵と共に門に入っていくのが見えた。私は親指の弓をつがえて射た。弓はその首をかすめた。まことに上出来であった。バーヤズィードはあわてて城門を入り、右手の方へ進み、小路を通して急ぎ逃亡した。私たちも彼のあとを追った。

113a ミールザー・クリー・キュケルダシュは1人の歩兵を(113a) 矛で打った。ミールザー・クリーが通り過ぎると、もう1人の歩兵がイブラーヒーム・ベグにむけ矢をひきしぼった。イブラーヒーム・ベグが「ハイ、ハイ」と云って通り過ぎると、敵は門衛の立っている場所のような〔近い〕場所から私の腋の下にむけ矢を射た。私のカルマク式の甲冑の2葉が切断された。彼はただちに逃亡した。その背にむけ私は矢を射た。この時、1人の歩兵が城壁の上を逃げて行った。私はその男の帽子を、城壁の銃眼にねらいをつけて射た。帽子は銃眼にぴったりと打ちつけられた。彼はターバンを手にもいて去った。もう1人の騎兵が私の傍らを通して、シャイフ・バーヤズィードが逃げて行った小路の方へと逃げて行った。私は刀でそのこめかみを突きさした。彼は落馬しかけたが、小路の側壁で身を支えて、落馬せず四苦八苦して逃がれていった。私たちは城門の所にいた騎兵・歩兵を追い払って城門を占領した。

しかし事はすでに時宜を失していた。何故なら2〜3,000の武装した兵が内城におり、私たちの100〜200名は外城にいた。また彼らは、ミルクがわくほどの短時間前にジャハーンギール・ミールザーを追い払って出奔させていたが、私たちの兵の半数はジャハーンギールと共に去っていたからである。このような状況にもかかわらず、私は、経験不足のため、城門に留まり、ジャハーンギール・ミールザーに人を送り、「近くに居るならば来い。もう1度攻撃しよう」と告げさせた。しかし、もはやその時期ではなかった。

イブラーヒーム・ベグの馬が弱っていたのか、傷を負っていたのか、彼は私に「私の馬はもう駄目です」と云った。ムハンマド・アリー・ムバッシルには
113b スライマーン Sulaymān という名の(113b) 家来がいた。この時、誰もそうせよと云わぬのに、彼は下馬して、その馬をイブラーヒーム・ベグに与えた。まことに男らしい行動をとったものである。その城門に居る時に、〔現在〕キョリ・ギュル Köl-i Gül の知事 (shiqdār) であるキチク・アリー Kichik ‘Ali が勇敢な働きをした。当時彼はスルターン・ムハンマド・ヴァイスの家来であった。彼はオシュで2度さらによい働きをした。

私たちは〔ジャハーンギール・〕ミールザーの所に行った者が帰ってくるまで城門の所に滞留していた。行った者たちが帰って来て、もうかなり以前にジャハーンギール・ミールザーが立ち去った事を告げた。もはや留まるべき時ではなかった。私たちも移動した。このように留まっていた事は無益な事であっ

た。私たちのもとには20～30人の者が残っていた。私たちが移動すると、多数の甲冑に身を固めた者たちが後にせまって来た。私たちがはね橋を渡っていた時、敵兵がはね橋の市内側に到達した。カースィム・ベグの息子ハムザの母の父〔母方の祖父〕のバンダ・アリー・ベグ **Banda ‘Ali Beg** がイブラーヒーム・ベグにむかって「お前はいつもえらそうに自慢していたではないか！止まれ！刀で勝負しよう」と叫んだ。イブラーヒーム・ベグは私の傍らにいた。彼は「来い！何のさしさわりがあるものか」と答えた。愚か者はこのような敗北の際にも自慢していた。まったくとんだ自慢であった。ゆっくり留まっている時ではなかった。私たちは急いで進んだ。敵兵は私たちの後から来て、算を乱した私たちの兵を落馬させつつせまってきた。

アフスィから1シャルイーの所にゴンバディ・チャマン **Gonbad-i Chaman** という所があった。ゴンバディ・チャマンを過ぎると、イブラーヒーム・ベグ
114a が私を呼んだ。私がふりかえって見ると(114a) シャイフ・バーヤズィードの小姓の1人がイブラーヒーム・ベグを攻撃していた。私はたずなをかえした。バヤン・クリーの子のハーン・クリーが私の傍らにいた。彼は「今もどるのは良くありません」と云って私のたずなを取って移動した。敵はサング **Sang** に到達するまでに私たちの側のほとんどの兵を落馬させた。サングはアフスィから2シャルイーである。

サングを過ぎると私たちの後方に敵の姿は見えなくなった。私たちはサング川を上流へとまっすぐに進んだ。この時には私たち8人が残っていた。ナースィルの子ドースト、カースィム・ベグの子カンバル・アリー、バヤン・クリーの子ハーン・クリー、ミールザー・クリー・キューケルダシュ、ナースィルの子シャーヒーム、サイイディー・カラの子アブドゥル・クドゥース、ホージャ・フサイニーそして8番目は私であった。この川の上流で、よい小路に出くわした。谷の内部は人道から離れた裏道であった。谷を上流へとまっすぐに進み、川を右手に置いて、また流れのない谷に入った。私が谷から平地に出たのは翌日の午後の礼拝時であった。

平地の所で遠方に軍勢が見えた。皆をかくれさせ、私自身が徒歩で丘に登って偵察すると、多くの騎兵が私たちの背後から1つの兵の上に駆け登っていた。その軍勢の多少を見定める暇もなく、私たちは乗馬して急ぎ進んだ。追跡者は20～25人であったであろう。私たちは前述の如く8人であった。もし私たちが

最初に敵がこの程度にすぎない事を知っていたなら、私たちもよく戦ったであろうに。私は追跡者が、(114b) これらの者たちの後に続いているにちがいないと考えた。そのため私たちは急ぎ前進した。逃げる敵はたとえ多人数でも、少数の追撃者に対決する事は不可能である。「破れた者の隊列には、1つの“ホーイ”で十分だ」と云われている如くである。

ハーン・クリーが「このようにしては駄目です。私たち全員が捕えられてしまうでしょう。この内から2頭のよい馬を選んで、あなたとミールザー・クリー・キューケルダシュが〔替え〕馬をつないで急いで行って下さい。おそらく逃げられるでしょう」と云った。その云う所は悪くなかった。戦になる事は無かったので、こうすればのがれられる可能性があった。しかしその時はそれぞれの者たちを敵のただ中に馬も無く置いておく事を私はよしと考えなかった。結局は、彼らは自ら、1人1人と、全員が私たちの馬におくれていった。この私が乗った馬はやや弱っていた。ハーン・クリーが下馬して、その馬を〔私に〕与えた。私は馬上からその馬に跳び乗った。ハーン・クリーは私の馬に乗った。

この状況の中で、敵はおくれていたナースィルの子シャーヒームとサイイディー・カラの子アブドゥル・クドゥースを落馬させた。ハーン・クリーもおくれた。しかし支援したり助けに行ける時ではなかった。私は馬の力の限り急がせて進んでいた。その馬が進まぬ者がおくれていった。ドースト・ベグの馬も立止まり、おくれた。私が乗ったこの馬も疲れを見せ始めた。カンバル・アリーが下馬してその馬を与えた。私はそれに乗った。カンバル・アリーも私の馬に乗ったがおくれた。ホージャ・フサイニーは跛者であった。彼は丘の方にむかった。私がおくれ、ミールザー・クリー・キューケルダシュもおくれた。馬に115a はギャロップで駆ける力が(115a) 残っていなかった。私たちは速歩で駆けて進んだ。

ミールザー・クリーの馬も弱まり始めた。私は「お前を捨ててどこへ行こうぞ！進め！生死を共にしよう」と云った。私は何度もミールザー・クリーの方をふりかえりつつ進んだ。最後にミールザー・クリーが「私の馬が止まって進みません。私になどかまわずに進んで下さい。たぶんのがれられるでしょう」と云った。私にとって大変な状況となった。ミールザー・クリーもおくれた。私はひとり残った。敵方から2人の人物が現れた。その1人の名はバーバー・サイラーミー Bābā Sayrāmī で、もう1人はバンダ・アリー Banda ‘Alī であ

った。彼らは私に近づいて来た。私の馬は動かずにいた。しかも山までは1キョルフ〔4,000歩の距離〕近くあった。1つの岩場に行きあたった。私はこう考えた：「馬が疲れている。しかも山もかなり遠い。どこへ行こうか」。私の箆にはなお20本程の矢があった。「馬をおり，この岩場で矢を全部射る事にしよう」と。さらにふとこう考えた：「たぶん山までたどり着けるだろう。山に着いたら，1たばの矢をベルトに差し込み山に登ろう」と。私は脚力にはすこぶる自信があった。

この考えによって私は急に進んだ。私の馬には速く駆ける力が残っていなかった。敵の2人も矢の届く所までせまって来た。私も矢を惜しんで射かけなかった。115b った。(115b) 敵も慎重でそれ以上には近づいて来なかった。彼らはこのように間隔をとってついて来た。陽が沈み，私は山の近くに到達した。突然敵が「あなたはこんな風に来てどこへ行くつもりですか？ ジャハーンギール・ミールザーは捕えられて連れてこられています。ナースィル・ミールザーも彼らの手中にあります」と云った。

彼らのこの言葉で私はすこぶる動揺した。なぜなら私たち全員〔バーブル，ジャハーンギール，ナースィル〕が敵に捕えられれば，殺される可能性が大きかったからである。私は答えずに，山の方へ進んだ。かなり進んだ時，彼らはまた話しかけ始めた。この時は彼らは最初の時よりおだやかに話した。馬をおりて話しかけてきた。私はこれらの者たちの言葉に耳をかさず，急ぎ進んだ。私は谷を上流にむかって進んでいた。就寝時の礼拝の時刻まで進み続けた。最後に1つのテント程の大きさの岩の所に到着した。その岩をまわると，難所になった。馬は通れなかった。彼らも下馬し丁重に敬意をこめて，なおよりおだやかに話しかけてきた。彼らは「こんな風に来られて，闇夜に道も無いのにどこへ行かれるのですか？ スルターン・アフマド・ベグ〔タンバル〕があなたを君主に推戴する事を皆が誓い合っております」と云った。私は「私の心は決まっていない。彼の所へ行く事など出来ぬ。もしもお前たちが私のために時宜に116a 適った働きをしたいと考えているのなら，(116a) 長年月の間にも，今程の絶好の奉仕の機会にめぐり合う事はまずなかなか無いであろう。私を案内せよ。私はハーンらのもとに行くつもりだ。私はお前たちに対して，お前たちが考える以上の恩恵・栄誉を与えるであろう。そうしないのなら，来た道をひき返せ。私には起こる事が起こるのみだ。これもまたよい奉仕だ」と云った。彼らは

「もし私たちが来ていなかったのならよいのですが、来た以上は、あなたをこのようにしたままでどうしてもどる事ができません。もしあなたが来られないのであれば、あなたがどこへ行かれようとも、私たちはお側についてまいります」と云った。私は「それでは言葉に偽りのない事を誓え！」と云った。彼らはコーランにかけて重々しく誓った。

私はただちに彼らを信頼して「皆が、この谷の近くに、広い谷を通る道があると云っていた。その道へ案内せよ」と云った。彼らは宣誓してはいたが、なお完全には信用できなかった。私は彼らを先にたてて、その後から進んだ。1～2 キュルフの道を進むと1つの河床に着いた。私は「広い谷の道はこれではないだろう」と云った。彼らはひきかえして、「あの道はずっと先の方です」と云った。実は広い谷の道とはまさにこれであつたらしい。彼らは裏切りを策して真実を隠したのであつた。私たちは夜半まで進んでもう1つの流れの所に到達した。彼らは今度は「うっかりしておりました。広い谷の道を通り過ぎてしまいました」と云った。私は「それではどうすべきだろうか？」とたずねた。彼らは「私たちの前方ではガワ一道 (Ghawā yoh) が近いです。皆その道を通
116b ってファルカト Farkat に出ています」と云った。(116b) 彼らはその道へ案内した。

私たちは夜の3更までその道を進み、ガワーから来ているカルナーンの河床に着いた。バーバー・サイラーミーが「ここに居て下さい。私が行ってガワー道を調べてまいります」と云った。しばらくして彼は帰って来て、「モグール帽をかぶった数人が進んで来ます。この道は通れません」と云った。私はこの言葉を聞くと途方にくれた。人里の間にいて夜明けも近く、目的地も遠かった。私は「どこか1カ所へ案内せよ。昼はそこに隠れ、夜になったら馬を手に入れて、ホジャンド川を渡り、川のむこう側〔南側〕を通してホジャンドの方へ行こう」と云った。彼らは「ここに1つの丘があります。そこに隠れる事ができます」と云った。バンダ・アリーはカルナーンのダルガであつた。彼は「私たちの馬や私たち自身の食糧が無くてはどうにもなりません。私がカルナーンに行つて必要なものを全て持ってまいります」と云った。私たちはそこからもどつてカルナーンに向つた。

私たちはカルナーンから1キュロフの所で止まった。バンダ・アリーが行つた。長い間待っていた。朝らしくなつて来ても彼はまったくもどつて来なかつ

た。大変不安になった。夜が明けるとバンダ・アリーが走って来た。彼は馬の飼料を持って来ずに、3枚のパン (nān) を持って来た。私たちはそれぞれ1枚のパンをふところに入れ、大急ぎでひきかえし、上方の丘の上に登り、1つの谷に馬をつなぎ、各人がそれぞれ1方面の高みに登って偵察しながら坐っていた。

- 117a 昼近くに (117a) アフマド・クシュチ Aḥmad qushchī [クシュチは「鷹匠」] が4名の騎馬の者と共にガワーからアフシの方面へむかっていた。私はこう考えた：「アフマド・クシュチを呼んで約束を与え懐柔して、彼らの馬をもらおう。何故なら私たちの馬は、1昼夜の間、戦のさ中にいた。飼料も見つからなかった。使いものにならぬ」と。しかしなお私たちの心が定まらず、私たちは彼らを信用する事ができなかった。私は、私の傍らの者たちと共に以下のように決めた：「これらの者たちは今晚カルナーンにいるにちがいない。夜、ひそかに [カルナーンに] 入城して彼らの馬を連れ出そう。それで私たち自身がどこか1カ所へ行く事ができよう」と。

正午に、眼のとどく所にいる1頭の馬の上で何かが光って見えた。私たちの誰にもそれが何であるかがわからなかった。これはムハンマド・バーキル・ベグであつたらしい。彼はアフシで私たちと共にいた。アフシを出た際、皆1方向へ落ちて行つたが、ムハンマド・バーキル・ベグはこの方面に落ちて来て、こっそりと進んでいたのであろう。バンダ・アリーとバーバー・サイラーミーが「馬の飼料を見つけられずにもう2日になります。平地へおりて馬に草を食ませましょう」と云った。私たちはその場所から出発して、平地におりて馬に草を食ませた。

- 午後の礼拝時、1人の騎馬の者が私たちが隠れていた丘に登っていった。私にはそれがガワーの有力者のカーディル・ベルディ Qādir Berdi である事がわかった。私は2人に「カーディル・ベルディを呼べ」と云った。彼らが呼んだので、彼がやって来た。挨拶を交し、恩愛と慈愛に満ちた言葉をかけ、約束をし、いろいろと懐柔して、ロープ、鎌、斧、川を渡る諸用具、馬の飼料、食物、(117b) そして可能ならば馬をも持ってくるように彼を派遣した。そして私たちは就寝時の礼拝の時にこの同じ場所に来て会う約束をした。

おそく夕の礼拝時に1人の騎馬の者がカルナーン方面からガワーの方へ通り過ぎて行つた。私たちは「誰だ？」とたずねた。彼が答えた。これがムハンマ

ド・バーキル・ベグであつたらしい。彼はおそらく昼に見た所からまた別の所へ隠れに行く所であつたのであろう。彼はその声をすっかり変えていたので、何年も私と一緒にいたというのに、まったく彼だと分らなかった。もし彼だと分って、私たちに彼が合流していたらよかったものを。この男が通り過ぎたため、とても不安になった。私たちはカーディル・ベルディ・ガワーイーと行なつた約束の時間まで留まっている事ができなかった。バンダ・アリーが「カルナーンの居住区内に人眼につかぬいくつかの小庭園があります。そこに居るとは誰も思いますまい。そこへ行って、カーディル・ベルディに人を送って、そこに来させましょう」と云った。私はこの考えに従って乗馬してカルナーンの居住区に行った。

冬であつた。すこぶる寒かつた。バンダ・アリーが1枚の古びた羊皮のジャケット (pōstīn) を持って来たので、私はそれを身につけた。また1カップの穀物の粥を持って来たので、私はそれを飲んだ。びっくりする程元気がでた。私はバンダ・アリーに「カーディル・ベルディの所へ人を遣したか」とたずねた。「送りました」と答えた。この2人の幸薄き田舎者の小者たちは、その人物を、相談の上で、アフシのタンバルのもとへ送っていたのであつた。私は1軒の家に入り、草を燃やし、しばらくねむつた。

この小者たちはうまくごまかして、また私にこう云っていた：「カーディル・ベルディから情報を得るまではここを動けません。ここは居住区の中にあり
118a ます。傍らに誰もいないいくつかの庭園があります。そこへ (118a) 行けば誰もそこに居るとは思いますまい」と。私は、夜半、乗馬して傍らの庭園へ行つた。バーバー・サイラーミーは屋根の上から、あちらこちらを偵察していた。正午近くに彼は屋根から降りてきて私の傍らに来て「ユースフ・ダルガが来ました」と云った。私はすこぶる不安になった。私は「私の事を知って来たのかを聞け」と云った。彼は出て行って話し合つて帰つて来て、こう述べた：「ユースフ・ダルガはこう云つております。“アフシの城門の所で1人の徒歩の者にでくわした所、その者は、王様 (pādīshāh) はカルナーンのしかじかの所におられますと云つた。私は誰にも知らせずにこの徒歩の者を、戦の時に私に降っていた財務官 (khazānachi) のワリーと共にある場所に留めておいて、私自身があなたの所へ走つて来たのです。ベグたちもこの事については何も知りません”」と。私は「お前は何を考へているのか」とたずねた。彼は「皆あなたの

家来です。他に案はありません。行かれるべきです。皆はあなたを君主の位にすえるでしょう」と答えた。私は「このような争いがあり戦があった時にどうして信用して行けようか」と云った。

この対話の際中に、ユースフは私の前に両膝をついて「私が何を隠しましょう。スルターン・アフマド・ベグは何も知りません。シャイフ・バーヤズィード・ベグがあなたの事を知って私を遣したのです」と云った。彼がこう云うと私はとても恐ろしくなった。この世では命に対する怖れ程いやなものはないのであった。私は「本当の事を云え！もし事態が必ず変わるといふのなら「私が死なねばならぬ事になっているのなら」、私はそのために身を清めておこう」
118b と云った。ユースフは誓った。しかし誰が彼の宣誓を信用しようか。(118b) 私は私の置かれているどうにもならぬ状況を理解した。

私は立上った。庭園の一隅へ行って、ひとりで考慮をめぐらしてこう云った：人はたとえ100年、1000年生きようとも、最後には死なねばならぬと。

汝、100年、否たとえ1日のみ留まったにせよ、

この心楽しき宮殿をいずれにせよ去らねばならぬ。

私は死ぬ事に心を決めた。その庭園には1本の流れが入って来ていた。私は身を清めた。2回の礼拝を行なった。頭を下げて祈願していると、私の眼がねむりについた。私はホージャ・ヤフヤーの息子で、ホージャ・ウバイドゥッラー猊下の孫に当るホージャ・ヤークーブ Khwāja Ya‘qub が、白黒まだらの(ablaq)馬に乗った多くの人々と共に、私の前に白黒まだらの馬に乗って来られるのを見ていた。ホージャは「心配なさるな。ホージャ・アフラル〔＝ホージャ・ウバイドゥッラー〕が私をあなたの所へ遣わされた。彼は、“私たちはあの方〔＝バーブル〕のために援助の願いを聞きとどけ、君主の座におつけるのだ。どこであれ何か難しい事が生じたら私たちの事を心の中で念ぜよ。私たちはそこに行くだろう”と云われた。今、この時に、勝利はあなたの側にあります。頭を上げなさい。起きなさい」と云われた。

私がその時、気持よくなって眼覚めると、ユースフ・ダルガと彼の同行者たちが1カ所で「彼は口実をもうけてだますだろう。捕えてしばっておかねばならぬ」と相談していた。私はこの言葉を聞くと「お前たちはこんな風に話しているが、お前たちの内の誰が私のそばに近づけるか、さあ見てやろう」と云った。私がこう云っていると、庭園の壁の外側に大勢の騎馬の者が来る物音が聞

119a こえてきた。(119a) ユースフ・ダルガが「もし私たちがあなたを捕えてタンバルのもとへ連れて行っていたなら、私たちの大手柄になっていたものを。彼は今また、大勢の者たちを派遣した。あなたを捕えるためです」と云った。彼はこの物音がタンバルが派遣した者たちの馬のひずめの音であると確信していた。

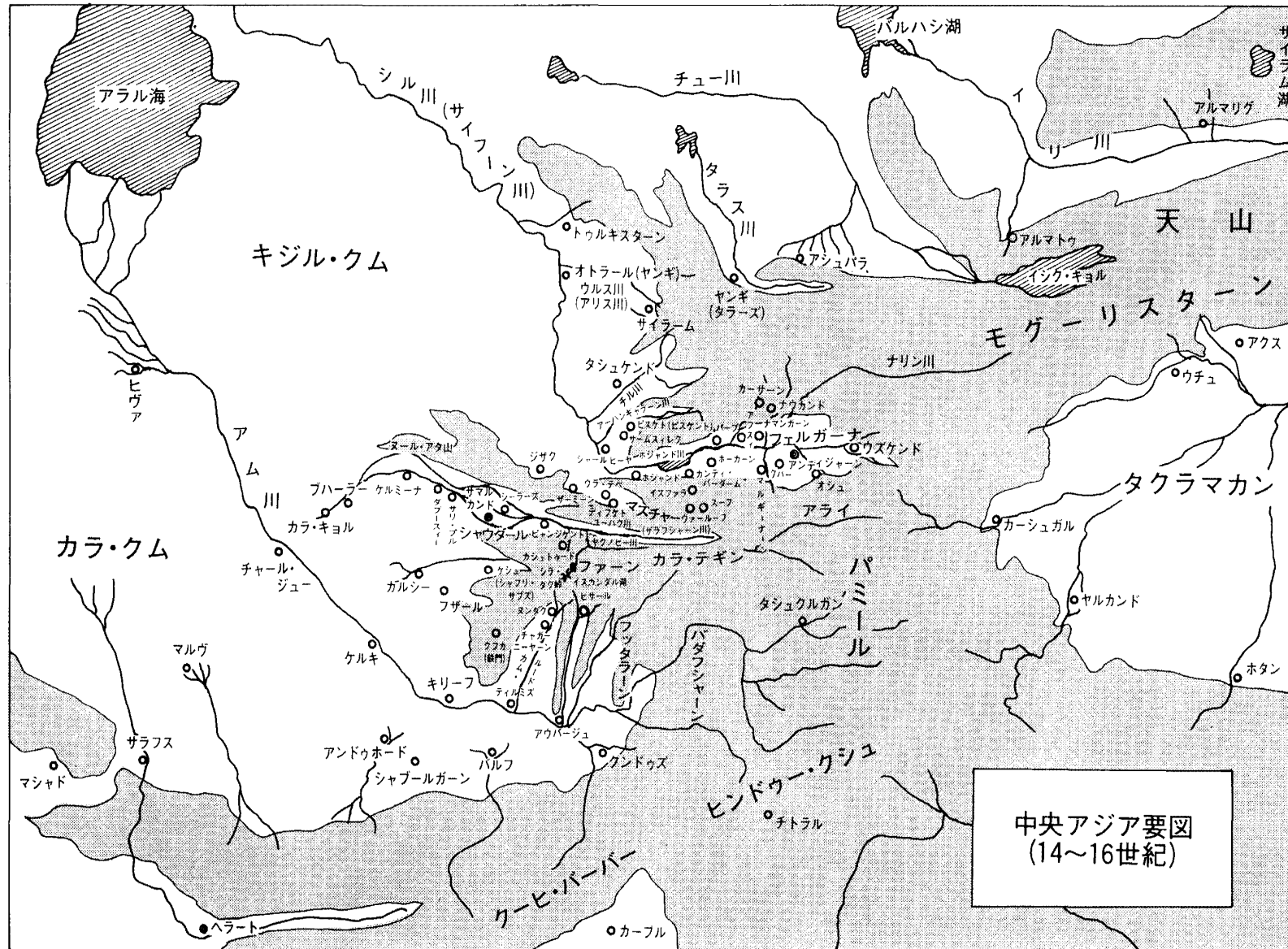
この言葉を聞くと、私の不安は増大して、私はなすすべを知らなかった。この時、この騎馬の者たちは庭園の門を見つけようとせず、古くなっていた所から壁をつき破って入ってきた。見ると、私の、命をささげてくれた家来であるクトゥルク・ムハンマド・バルラス Qutluq Muḥammad Barlās とバーバーイエ・パルガリー Bābā-yi Pargharī が、10名15名あるいは20名であったろうか、到着したのであった。彼らは近づくと馬から下りて、遠くから膝まづき、敬意を表して、私の足もとにひれ伏した。その時私には、あたかも神が新たな源から命をお与え下さった様に感じられた。私は「そのユースフ・ダルガとこの立っているおろかな傭兵たちを捕えてしばれ」と云った。その小者たちは急に逃げ出したが、あちこちで1人ずつ1人ずつと捕えられ、しばられて連れて来られた。

私は「お前たちは何処から来たのか？ どうして分ったのか？」とたずねた。クトゥルク・ムハンマド・バルラスが「アフシを脱出した際、あなたと別れて落ちて行った時、私はアンディジャーンにまいりました。その時ハーンたちもアンディジャーンに来ておられました。私は夢をみました。ホージャ・ウバイドゥッラーが、

119b “バーブル皇帝はカルナーン (119b) という村にいる。行って、彼を連れておいで。王位は彼のものとなっているのだから”と云われました。私はこの夢を見て気分がよくなりました。大ハーンと小ハーンに〔この夢の事を〕申し上げました。私はハーンたちに“私には5～6人の弟や息子がいます。さらに数人の若党をお加え下さい。カルナーン方面を通って行って情報を得るつもりです”と云った。ハーンたちは“私たちも彼がその道の方へ行ったろうと思う”と云って、10人の者を任命された。そして“その方面に行ってよく調べて情報を得よ。とにかくはっきりと情報をつかめ”と云われました。私たちがこの会話を交していた時、バーバーイエ・パルガリーが“私も行って探します”と云いました。彼も2人の若党と弟と共に一緒になって、私たちは乗馬しました。道を進んで今日で3日です。アッラーのおかげであなたを見つ

ける事ができました」と云った。彼らは色々と話した。そして「進んで下さい！乗馬して下さい！このしばった者たちをも連れて行って下さい！ここに留まる事はよくありません。タンバルはあなたがここに来ているという情報を得ております。何としてでも行ってハーンらに合流されるよう！」と云った。

そこで、私たちは乗馬してアンディジャーン方面にむけ急ぎ進んだ。私たちは2日間何も食べていなかった。夕の礼拝時に、皆は1頭の羊を見つけて来て、1カ所で下馬し、殺して焼肉(kebāb)にした。私はその焼肉を満足するまで食べた。その後乗馬して、5日行程の道のりを2昼夜急行して進みアンディジャーンに入り、おじの大ハーン、小ハーンに会い、過ぎ去った日々の事を全て
120a 話した。私はハーンらと**4カ月間**一緒にいた。色々の所へ(120a)行って私を探していた私の家来たちが集まって来た。300人以上の者たちがいた。私はふと、「いったいいつまでフェルガーナ地方にあてもなく留まっていなければならないのだろう。諸方面に別の機会を見つけよう」と考え、[910年] **ムハッラム月** [1504年6/7月]、フェルガーナ地方からホラーサーンをめざして出発した。



中央アジア要図
(14~16世紀)